
華国神記
虚空からの声
九条菜月
Natsuki Kujo





華国神記

虚空からの声

九条菜月
Natsuki Kujo



口絵・挿画　由貴海里

目次

序章……9
第一章……17
第二章……40
第三章……66
第四章……87
第五章……112
第六章……140
第七章……156
第八章……175
終章……200
あとがき……210

登場人物紹介




魏祥琳


姬子虞


韓楊秀


郭洪来


呂翰栄


淘蟬英



李沸儀
現皇帝

親子

愛妾

親子

黎貴妃
皇帝の寵姫

李博焚
太子

腹違いの兄弟

祥安

支援

韓楊秀（27歳）
禁軍右飛龍将軍

親友

鄭玄楽（27歳）
春蘭から真名を奪った男

花興奏（57歳）
中書令（中書省の最高責任者）
太子派の筆頭

幼馴染み

真名を奪う

追っている

上司

部下

腹違いの兄弟

伯父

姪

花翠蓮（15歳）

花玉翠（14歳）
花家の美人姉妹

鄭仲望（24歳）
元禁軍の気術兵。
現在は中書省書物補修係

李春蘭
（300歳／主人公）
小さな邑の元守り神。
真名を奪われ人間に戻る

家主

居候

雇い主

家僕

高友寧（13歳）

孫啓璋（13歳）
鄭家につかえる少年たち

呂翰栄（？歳）
謎の男

姬子盧（25歳）
龍乎虎慈軍隊長

仲間

杜文重（23歳）
子盧の副官

龍乎

淘蟬英
妓楼〈黄海楼〉の女楼主

郭洪来（20歳）
気術士

仲間

兎天（？歳）
鬼面で顔を覆う組織の二番手

猩猩緋



人物相関図

華国神記

虚空からの声



強固な城壁に囲まれた華国の都、華安。

その城壁に沿った薄暗い一画に、荒ら屋ばかりが立ち並ぶ通りがある。戸や屋根も破れ、体裁を保っているものは一つとしてない。壁もひび割れ、漆喰が剝がれているのみならず、通りから中が覗けるほど崩れ落ちている箇所も少なくなかった。

表を歩く人の姿はまばらである。みな痩せ細った体に粗末な短服をまとい、中には足を引き摺りながら歩く者もいる。その顔は感情が抜け落ちたように虚ろであり、生気の欠片すら見つけられない。

通りの隅で座り込んでいる者たちも同じだった。足を抱えて横になっている者もいれば、数人で肩を寄せ合うようにして固まっている者たちもいる。

子供もいれば老人もいるといった具合で、共通するのは、痩せた体とぼろぼろの服。無気力な眼差しだった。

街自体も荒んでいた。争うような音と共に、罵り声と悲鳴が折り重なるようにして響く。そして、しばらく経てば、まるで何事もなかったかのように再び静けさが訪れた。そんなことが延々と繰り返される。

貧しき者たちや、罪を犯して追われる者たちが行きつく場所――貧民窟。華国の中枢を担い、華やかで活気に溢れる都の影と呼ぶべき存在である。

そんな貧民窟の、名もなき通りを歩く男がいた。歳は四十を過ぎた頃だろうか。汗と土で薄汚れた短服を身につけ、髪を乾燥させた植物の蔓で縛っている。瞳は虚ろではあるが、地を踏み締める足にはまだ力が残っていた。

男は関といった。貧民窟に流れついて半年。ここに辿り着いた当初、わずかにあった肉も、今では肋が浮くまでに削げ落ちてしまった。それでも生きていられるだけましだろう。

「確か、今日は西の城壁だったか……」

関はぽつりと呟いた。貧民窟の住人が働ける場所は限られている。とにかく人数が必要な仕事、もしくは人が忌み嫌うような類の仕事だ。

関が見つけたのは、華安を囲む城壁の修理だった。日雇いのそれは、決まった時刻に集まらなければならない。少しでも遅れれば、どれだけ働いたところで賃金を受け取ることはできないのだ。

修復の場所は日によって違う。賃金を受け取る際に翌日の現場を指示されるため、きっちりと覚えておく必要があった。

関は重い足を引き摺るようにして、前へ前へと進む。日雇いで得られる賃金はわずかなもので、三日も暮らすことができればよいほうだ。

――こんな惨めな思いをするはずなどなかったのに。

関は代々官吏を輩出する名家の下男であった。馬の世話や、使い走りが主な仕事だ。それでも、関が住み込みで働いていたのは大きな屋敷で、数いる下男の取りまとめという、少しばかり地位のある役目にも就いていた。

賃金は多くなかったが、関はその暮らしに満足していた。ただ欲をいえば、妻となってくれる女性がほしかった。

器量がよくなくとも健康で明るく、元気な子を産んでくれさえすればいい。年配の家僕にそう仄めかせば、「心当たりを捜してやろう」と、色好い返事があった。

妻帯すれば、生活は今より苦しくなるかもしれない。それでも、関は温かい家庭に憧れた。すでに妻子を持つ友人たちが、羨ましくてしかたなかったのだ。

家僕は関との約束を守ってくれた。働き者と評判の娘で、歳は二十の半ば。器量がいまいちということで、嫁ぎ遅れていたらしい。関は一も二もなく頷いた。

そして、何事もなければ、働き者の娘と生真面目な下男は、めでたく夫婦となるはずだった――。

小さな幸せを摑みかけていた関は、唐突にすべてを失った。いや、失ったのは関だけではない。仕える者すべてが、一夜にして職と住処を失ってしまったのだ。

関の主は名のある官吏だった。しかし、皇帝の不興を買い、死を命ぜられた。その理由は最後まで自分にはわからなかった。家令に訊ねても彼はそれどころではないようで、顔を青褪めさせながら慌ただしく屋敷を歩き回っていた。

家は財産を没収されたうえで取り潰し。一族は散り散りとなり、残された者たちは途方に暮れるしかなかったのだ。

親戚を頼れる者はまだいい。少なくとも当座の生活には困らないだろう。だが、関のように寄る辺のない者たちはどうすることもできなかった。手元にあるのはわずかな給金だけ。

当然のように縁談は立ち消えとなった。職を失った男に嫁ぎたいという酔狂者は、さすがにいない。悄然とする間にも時は流れ、気付けば関は貧民窟の住人となっていた。

共に屋敷で働いていた者たちは、今頃どうしているのだろうか。上手く次の職にありつけたのか、関のようにその日暮らしの生活を送っているのか。あまり考えたくはないが、貧しさを苦に命を絶った者や、飢え死にした者も……。

自分とて、この暮らしがいつまで持つかわかったものではない。日雇いの職があるうちはまだいい。だが、それもいつなくなってもおかしくはない状況だ。以前と同様とまではいかなくても、安定した賃金を得られる職場を見つけない限り、〝死〟は緩慢

ながらも確実に迫ってくる。

頭ではわかっているつもりだった。しかし、日々を過ごすので精一杯な現状では、どうすることもできない。それは関だけでなく、貧民窟で暮らす者たちも同じ思いだろう。みな迫りくる〝死〟の影に気付きながらも、足掻くことすらできずにいる。

――いつから、こんな世になってしまったのだろうか。

国が荒れていることは薄々感じていた。地方では民が飢え、一揆が頻発しているということも聞いていた。

だが、ささやかだが満ち足りた生活を送っていた関には、まるで別の世界の話のように思えた。目には映っているのに、見えていない振りをし続けていたのだ。今は、それが真実であったと身を以て知っていた。

民は確実に飢えている。

毎日のように、貧民窟に新しい顔が増える。それに引き摺られるように、いざこざも頻発し、関がここで暮らし始めた頃に比べても、さらに状況は悪化していた。

金を持っていようものなら、あっという間に奪い去られてしまう。巧く隠すか、賃金を受け取ったその場で食べ物を買って腹に入れてしまうしかない。

だから、仕事の行きよりも帰りに神経を尖らせた。終始周りに気をつけ、少しでも気配を感じた時は、脇道に飛び込んで必死に走った。今ではどの道順が追っ手を振り切るのに適しているか、覚えてしまったくらいだ。

「……もうだいぶ集まってるな」

辿り着いた先には、関と似たような暮らしを送る男たちが揃っていた。全員で三十かそこらはいるだろうか。

天高く聳える城壁は、今から二百年も前に建てられたものだという。それから幾度も補修を繰り返しながら、華安の民を外敵の侵入から守り続けている。

関たち人足に課せられた仕事は、崩れた箇所の修繕である。

職人たちの指示に従い、黙々と手を動かす。人足を見張る役人もいるため、迂闊に手を休めることはできない。

役人たちは無慈悲だ。難癖をつけ賃金を出し渋る。人足たちに支払う金を、どうにかして己の懐にいれようと狙っているのだ。

以前ならば、そんなはした金のために働くなど馬鹿げていると笑っただろう。しかし、そのわずかな金が今の関を生かしている。落ちぶれたものだと、自嘲せずにはいられなかった。

仕事は、昼を過ぎたあたりに一度だけ休憩が入る。疲れ切った男たちは、真っ先に近くにある井戸へと向かい浴びるように水を飲む。それが空腹を紛らわす最良の方法なのだ。

関も胃が張るほどに水を飲んだ。あとは再開の合図があるまで日陰で体を休める。わずかな間でも、休息は貴重だ。体力の消耗が激しい労働は、今の関には過酷すぎた。それでも少しでも手を抜けば役人たちが目敏くそれを見つけだす。

それに、今日はいつもより体が重い気がする。今朝も、差し込むような腹痛に強引に眠りから叩き起こされた。

腹が空きすぎているからだ、と関はとくに気にはしなかった。むしろ体に痛みを感じない日の方が珍しいくらいである。いちいち気にしていては、貧民窟で暮らしてなどいけない。

「――なあ、そこのあんた。あんただよ。若い奴を知らんか？」

振り返れば、自分と似たような背格好の男が立っていた。着古された短服に、袖から覗く痩せ細った腕。虚ろに濁った眼差しは、まさに自分自身を見ているようであまり気持ちのよいものではなかった。

関はできるだけ平静を装いながら、男に訊き返した。

「誰のことだ？」
「あんたとよくいる男だよ」
「……」
「なんだ、忘れちまったのか？」
よくいる男、と言われ、関の脳裏を一人の男が過る。
名は徐といったか。背格好は自分と似たようなものだが、歳は関より十以上も若い。体力にも余裕があるように見え、羨ましさを感じた。
徐も貧民窟に流れて来る前は、とある屋敷で家僕として働いていたそうだ。似たような境遇にあったことから意気投合し、ここ数日は共にいることが多かった。
「いや、覚えてる。そういや、今日はまだ見てないな……」
徐もこちらの姿を見れば、声をかけるなりするだろう。律儀な性格で、それ故に損をすることも多いようだ。
「来てないんじゃないか？」
「それは困った。そいつに頼まれてたことがあったんだがなぁ」
男は面倒臭そうに溜息をついた。それほど急ぎの用事なのだろうか、と関は首を捻る。
「明日じゃあ駄目なのか？」
「俺はここで働いてるわけじゃねぇんだよ。明日も来るなんざごめんだね」
「そうか」
てっきり、この男も自分と同じ日雇いの人足だと思っていたのだが、どうやら違ったらしい。わざわざ徐に会うために、ここへ来たようだ。
「なあ、あんたは明日もここに来るんだろ？」
「ああ」
城壁の修復具合を見る限り、明日もここで働くことは確実だろう。頷くと、男は安堵するように頬を緩めた。
「じゃあよ、あいつが来たら伝えてくれ。魏家のお

嬢様は、妓楼に売られたらしい。詳しく聞きたいなら、趙のとこに来なってな。いいか、絶対に伝えてくれよ！」

男はそれだけを告げると、本当に暇がないのか足早に去って行った。魏家のお嬢様、と関は呟いて空を仰ぐ。

徐がどこの屋敷で働いていたのかは聞いていない。それは関も同じで、詳しいことはけっして口にしなかった。

働き口を失ったことも辛いが、なによりも敬慕していた主を思い出すのが辛かった。自分にも他人にも厳しかったが、礼を重んじ、下男であった関にも礼節をもって接してくれる人だった。

宮中で取り押さえられた主は、そのまま獄舎に繋がれたと聞く。なぜ、皇帝の不興を買ってしまったのだろう。なにもわからぬまま、関は長年働いていた屋敷を追い出されてしまった。

――死を命じられたのだ。もう生きてはおられない。

そう思うと、泣き喚きたい衝動に駆られた。主は本当に、死をもって償わなければならぬほどの罪を犯したのだろうか。信じられないのだ。常に公明正大であった主が、罪人として裁かれたことが。

だからなのか、関は犯罪に手を染めようとはしなかった。関よりも立場の弱い者は存在する。盗みや追い剝ぎ、恐喝など、手段を問わなければもう少し楽に暮らせるとはわかっていた。

だが、主に顔向けできないようなことだけはしたくなかった。たとえその結果、死ぬことになったとしてもだ。

推測ではあるが、徐の主もまた、そのような人物ではなかったのだろうか。そう考えれば、主の娘の行方を案じる徐の行動にも納得がいく。

「妓楼か……」

良家の子女にしてみれば、死ぬよりも辛い境遇かもしれない。

格式の高い妓楼ならばまだいいが、妓女を人とも思わぬような扱いをする所もあると聞く。そのような妓楼で働かせられる娘たちの行く末は、病に罹って死ぬか、耐え切れずに自ら命を絶つかだ。徐がこのことを知ればどう思うか。

「いや、薄々は感じているか」

没落した良家の子女の末路など、火を見るより明らかだ。

――捜したところで、どうすることもできぬだろうに。

その日を生きるのに精一杯の男が、女を養っていけるわけがない。ならば知らぬ方が互いのためでもある。それを承知の上で、知らずにはいられなかったのかもしれないが。

若さだなあ、と関は苦笑した。自分からはすでに失われてしまったものである。羨ましくはあるが、取り戻したいとは思わぬのが現実だ。そのような感情に悩まされるのは面倒なだけ。

空を見上げながらぼんやりとしていると、役人が人足たちへと怒鳴りはじめる。

どうやら、休憩は終わりらしい。無駄に権力を振りかざすしか能のない役人を一瞥し、関はゆっくりと立ち上がった。

不意に、腹部に鈍い痛みが走る。朝に感じたものよりは軽いが、それでも関の足を止めるには充分なものだった。片手で腹を押さえ、痛みに奥歯を食い縛る。

少しでも遅れれば、目敏い役人に気付かれるだろう。そうなれば午前中に働いた意味がなくなってしまう。早く治まれと祈りながらそのまま耐えていると、腹痛は徐々に和らいだ。安堵の息を吐く。人足たちが集まり切っていないこともあり、関は誰に見咎められることなく集団に追いつくことができた。

やがて黙々と手を動かしているうちに、関の頭からは、腹痛のことも徐のことも抜け落ちていったのだった。



夢に見る。
苦しむ邑人たちの姿を。
それは水害であったり、不作であったり、疫であったりと、日によって違う光景が広がった。その度に、己の無力さを痛感する。いったいなんのための守り神かと、怒りすら覚えた。
いつも最後は同じ。やがて人は邑を去り、茫々とした荒れ地だけが残った。先代や、先々代から受け継ぎ長きにわたって守り続けてきた大地が、無残な姿を晒す。
それが夢などではなく、いずれ来たる日の姿だとしたら——考えるだけで胸が張り裂けそうだった。
「どうかしたの、春蘭？」
はっとして顔を上げれば、魏祥琳が心配そうな眼差しをこちらに向けていた。
春蘭が占師として働く黄海楼で、妓女見習いとして研鑽を積む少女である。
出会った当初は、愛嬌のある顔立ちに不安を覗かせることが多かったが、琴の腕にも自信が持てるようになったせいか、このところ大人びた顔付きを見せる。若葉色の、裾が花びらのように広がっている襦裙を身に纏い、きれいに結い上げた髪には見事な細工の金色の簪が挿されていた。
ほんのりと化粧が施された容貌は、花開く前の蕾を思わせた。
「……大事ない」
首を横に振れば、春蘭の髪を彩る銀色の簪が繊細な音を立てた。
春蘭もまた、祥琳と同じように着飾っている。淡

い桃色の上衣に臙脂の濃い腰裙を下肢に巻き、薄絹の衣を肩に纏っている。きっちりと結った髪に挿した小さな玉が、雫のように幾重にも連なる簪が左右に揺れていた。

「それよりも、美しい曲だったな。まだ覚え立てとは思えぬほどだ」

「そう？」

祥琳はなぜか、新しい曲を覚える度に春蘭に聞いてほしいと請うようになった。聞いてもらえると、自信が持てるという願いを断る理由もないため、こうして仕事の合間に耳を傾けている。

夕刻前ということもあり、他の妓女見習いの娘たちはみな出払っていた。整頓された見習い部屋には、すでに薄闇が帳を下ろしかけている。

「美しい花々を称えた歌なの。恋歌もいいけど、こっちも覚えてみなさいって蟬英様が」

「選曲の幅が広がるのはよいことだ」

格式の高い妓楼の妓女は、多才であることが求められる。

楽だけでなく、舞や詩吟、機知に富んだ受け答えができてはじめて一人前とみなされ、客の前に出ることが許される。そのため、見習いの学ばねばならぬ知識の量は相当なものだ。

「できれば、琴だけじゃなくて笛や胡琴も覚えたいんだけど……。あと、舞や詩吟も。でも、色んなものに手を出すよりも、まずは自分の得意なものを極めなさいって言われて」

「正論だな。祥琳は若いのだから、焦らず一つ一つ己のものにしていけばよい」

「そうよね。わかってるんだけど……」

はあ、と祥琳は落胆するように溜息を漏らした。早く一人前になりたいという気持ちはわからなくはないが、焦って稽古を増やしたところで結果となってすぐ現れるものでもない。

「でもね、どんな楽器でも完璧に弾きこなしてしまう蟬英様に言われると……」

祥琳から聞いた話だが、黄海楼の楼主は、経営の手腕に優れていると同時に、妓女としても肩を並べる者がないと言われるほど多才を極めているらしい。楼主となってからは、個人的に客を取ることはほとんどなくなったそうだが、せめて一目だけでもと、通い詰める古馴染は少なくないそうだ。

「比べる相手が間違っていると思うが」

「目標は高い方がいいの！」

そういうものか、と春蘭は、有無をいわせぬ祥琳の迫力に頷いた。

「ところで、春蘭は今日も妓楼に泊まっていくの？」

「うむ。そのつもりだ」

「……あの、ね。こんなことを訊くのはどうかと思うけど、もしかしてお家の人と喧嘩した？」

春蘭は首を傾げた。なぜ、そんなことを問われるのだろうか。

「いや、喧嘩などしておらぬぞ」

「本当に？　今日でもう三日も泊まってるから、お家に帰り辛い理由でもあるのかなって思ったの」

祥琳の指摘に、春蘭は二の句が継げなかった。そういえば、確かにここのところ鄭家に戻る回数が減っている。悩んだ末に、春蘭は無難な回答を口にする。

「……仕事が忙しいのだ」

「でも、前はそれでもちゃんと帰ってたよね」

「……」

祥琳の問いに、春蘭は沈黙した。以前ならば終刻を知らせる鐘が鳴る前に、春蘭は居候先の鄭家へと帰っていた。

とある邑の守り神であった春蘭は、その力の源ともいえる〝真名〟を奪われた。犯人の名は鄭玄楽。華国の民には珍しい、赤い髪と瞳をもつ人物である。とっさに人の姿へと戻ることによって隷属を免れた春蘭は、得意の占を頼りに真名を取り戻すべく華安へとやってきた。

占の結果が指し示したのは、玄楽の生家である鄭家の屋敷だった。何度、占い直してみても示すのは、鄭家の屋敷。悩んだ末にそこに逗留することを宣言した春蘭は、自身の食い扶持を稼ぐために妓楼で占師として働くことに決めた。

そこまでは、なんの問題もなかった。きっかけは、華安の治安を守る龍乎からの依頼で、山で消息を絶った人足と役人たちの捜索隊に同行した鄭家の当主、鄭仲望が行方知れずとなってしまったことだ。

春蘭は迷ったが、仲望を助けたいという強い思いから彼らを助けに行く捜索隊に加わった。そして、妖との戦いの末に、仲望を助け出したのだが――。

「喧嘩したわけじゃないなら、いいけど」

祥琳の声音は柔らかかった。気遣ってくれているのだ。今まで滅多なことでは妓楼に泊まらなかった春蘭が、こうも立て続けに居座るようになれば、なにかあったと考える方が自然だ。

おそらく、黄海楼の楼主も気付いているはずだ。なにも言ってこないのは、こちらの事情に立ち入る気がないからか。

「……喧嘩したわけではないのだ」

そう呟いて、春蘭は困惑した。

ならば、なぜ家に帰らないのか、という言葉が重く伸し掛かる。今日の春蘭には、明快な答えがなかった。

「ごめんね、変なことを訊いて。今日も泊まるんでしょう？　寝具の準備はしておくからね」

「……すまぬ」

「気にしないで。春蘭が泊まってくれると私も嬉しいの」

現在、見習い部屋には祥琳を含め五人の少女たちが寝起きを共にしている。年齢は、十歳から十四歳までと様々だが、その中でも頭一つ飛び抜けているのが祥琳だった。

琴の腕前もそうだが、一つ一つの所作に品がある。引っ込み思案な性格が玉に瑕ではあるが、将来有望

と目をかけられていた。そのせいか、他の少女たちに距離を置かれ、見習い部屋ではずっと気まずい思いで過ごしていたようだ。

嫉みや僻みは、どの世界にもあるものだ。一人でも多くの顧客を得ることが望まれる花街では、それはより顕著に現れるのだろう。

妓楼を切り盛りする楼主は、あえてその問題に立ち入らない。いちいち口を出していたら限がないということもあるだろうが、それで潰れるのであるならばこの世界で生きていくことは不可能なのだ。

「では、世話になる」

「うん！」

「せっかくだ、余裕があるならもう一曲聞かせてくれるか？」

「私は平気だけど、春蘭は大丈夫なの？　そろそろなんじゃない？」

「それが、まだ客が到着しないようでな。着いたら呼ぶから、あまりうろうろするなと言われている」

春蘭は占師として働いているが、それを知るのはごく一部の者たちだけ。妓楼で働く多くの者たちからは、あくまでも占師〝秋菊〟の付き人だと思われている。

やや特殊な存在故に、春蘭は人目を引いた。よく当たると評判の、謎の占師に近しい人物として注目されているらしい。一人で回廊を歩けば、妓楼の誰かしらに呼び止められる。話題はすべて秋菊にかんするものだ。

春蘭が知らないと答えても、しつこく食い下がってくる者もいる。妓女の中には、新しい客を獲得するための話題として秋菊の情報を得ようとする者や、自分も占ってもらえないだろうかと秋菊への執り成しを頼もうとする者もいた。

どこからどう見ても子供にしか見えない春蘭に対し、高圧的な態度を取る者も少なくなく、それを見兼ねた楼主から、「仕事の際は部屋まで迎えを出すから、ふらふらと一人で出歩くんじゃないよ」と命

じられているのだった。

「なんか大変だね」

「まったくだ」

お陰で春蘭は、まともに会話できる相手が祥琳を含め数えるほどしかいない。困りはしないが、祥琳に頼り切りになっている現状には少し心苦しさを感じている。

なんらかの形でお礼ができればいいのだが、そういったことに疎い春蘭は、礼を口にする以外に感謝の気持ちを表す手段をもっていなかった。

「じゃあ、元気の出るような曲にするね！」

「頼む」

純粋に琴を弾くことが好きな祥琳は、嬉々として準備する。

間をおかずに流れ出す旋律に、春蘭は壁に背を預けて聞き入った。律動的な曲で、演奏する祥琳も心なしか楽しげだ。怖ろしいほどの速さで絃を爪弾く指先は、紡ぎ出される音に合わせて舞い踊っている風にも見える。

春蘭が人として暮らしていた時から三百年経った今でも、人々が奏でる音は変わらない。あの頃も、豊穣を祝う祭りでは、煌びやかな衣裳に身を包んだ男女が様々な楽器を奏で、それに合わせた舞が神前で披露されていた。自分もいずれあの中に入り、楽器を弾くか、舞を披露するのだろうと、幼心に胸を躍らせたものだ。

篝火に照らされた光景は幻想的で、とても美しかった。父がいて、母がいて、そして兄がいた。祭りを見たのは、その一度きり。幸せだった。自分も、家族も、祭りに興じる邑人たちも。

優秀な占師であった母だけが、唯一、忍び寄る破滅の足音に気付いていた。

「――らん、――春蘭！」

名を呼ばれ意識を戻せば、祥琳の顔がすぐ傍にあった。どうやら、いつの間にか演奏は終わっていたらしい。



「すまぬ。ぼんやりしていたようだ」
「何度呼んでも反応がないから、寝ちゃったのかと思った」
「せっかく弾いてくれたのに、悪いことをした」
「いいの。私こそ、疲れている時に練習に付き合わせちゃってごめんね。それより、お客様が来たみたい」
視線を戸口へ向ければ、十三、四ほどの少年が立っていた。
上等な布地が使用された濃紺の短服姿で、腰紐(こしひも)だけが黒い。整った顔立ちをしているが、その瞳には驚くほど感情がなく、陶器で作られた人形を見ているようだった。祥琳はそれが苦手なようで、顔を合わせても話しかける素振りを見せたことは一度もなかった。
少年の名は袁蒼羽(えんそうう)。楼主の付き人である。
「今、行く」
立ち上がり少年の傍へと向かえば、無言で手が差し出される。それを片手で握(にぎ)ると、蒼羽は引っ張るようにして歩き出した。
「では、行ってくる」
「うん。頑張ってね」
祥琳に見送られ、春蘭は誰もいない回廊を蒼羽と共に進む。頭一つ分ほど背が高い少年は、春蘭の歩幅に合わせてゆっくりと歩いてくれる。
「毎回すまぬな。ぬしも仕事があろうに」
蒼羽は首を横に振った。これも仕事の内ということなのだろう。
「そういえば、蒼羽は笛が上手らしいな。この間、祥琳が教えてくれたぞ」
ちらり、と横目で春蘭を見た蒼羽は、肯定するように小さく頷いた。
蒼羽は口を利(き)くことができない。詳しい事情は知らないが、まだ幼かった彼を、遠縁に当たる楼主が妓楼に引き取ったそうだ。
「ここで働く者は、なにかしらの楽器に長(た)けていそ

うだな。ん？　でもそうなると、門番らも楽を嗜んでいることになるな」

見るからに屈強な門番たちが、琴や笛を使って繊細な音を奏でる姿を思い描けばそれはなかなかに不気味な光景だ。

楽器も武人の嗜みの一つではあるのだが、と考えながらふと気になって蒼羽を見上げてみれば、彼もまた釣られて想像してしまったのか、表情がないながらも少しばかり奇妙そうな顔付きをしていた。

「まあ、深くは考えずにおこう」

強引に結論づけたところで、不意に蒼羽が春蘭の視界を遮るように前に立った。蒼羽がこういう態度を取る時は、たいてい面倒な相手が通りかかった時である。しかし、前方からこちらへと向かってきた人物は、先ほど春蘭の脳内で、失礼な想像をされそうになっていた門番の一人であった。

名は芳蘇啓。歳は三十過ぎ。短服の上からでもわかるほど筋骨隆々とした体軀と、それに似合いの強面で、鋭い眼光は飛ぶ鳥をも射るのではないかと噂されるほどだ。門番の取りまとめ役についている蘇啓は、春蘭が一人で黄海楼を訪れた際に出会った人物でもある。

また、春蘭が気がねなく言葉を交わせる希少な存在でもあった。顔を合わせる度に声をかけられるが、春蘭の妓女たちとは違う特殊な立場を知っても、態度を一切変えなかった人物でもある。

むろん、彼の口から秋菊の話題が出たことは一度としてなかった。あまり興味がないのか、それとも春蘭のことを慮ってのことなのかは不明だが、さばさばとした兄貴肌の性格は、下の者たちからも慕われているようだ。

蘇啓は警戒する必要のない相手なのだが、なぜ蒼羽は春蘭の視界を遮ったのだろう。疑問が脳裏を過った時、春蘭は蘇啓が片手で引き摺っているものに気付いた。

「お、なんだお前らか」

「……それはどうしたのだ？」

蒼羽の背後から視線を向けた先には、顔を変形するまで殴られ気絶している男の姿があった。着ている袍は見るからに上等だが、飛び散った血糊のせいで見るも無残な有様だ。それを蘇啓は引き摺っていたのだ。

「うちの妓女に乱暴を働いたろくでなしだ。しかも懐もすっからかんときた。今から、楼主様の命令で、身包み剝いで裏に捨ててくるとこだ」

にやり、と片頬を歪めて笑う蘇啓は、まさに凶悪の一言に尽きた。話してみれば気さくな性格なのだが、見た目のこともあって妓女たちからは恐れられているらしい。

確かに、ぼろぼろになった客を引き摺って歩く姿を見れば、妓女でなくとも話しかけたくはないだろう。

それに、妓女たちがなにか仕出かした際、楼主の命令で罰を与えるのは蘇啓のような警固の仕事なのだから。

「春蘭も変な客がいたら俺に言いな。すぐ助けてやっからよ」

「その時はよろしく――」

頼む、と春蘭が言い終える前に、再び視界を蒼羽の背に遮られた。

何事かと様子を窺っていると、蒼羽はぼろぼろの客を指差して、静かに首を横に振った。そして、回廊の奥を指し示す。

一連の動作を見ていた蘇啓は、ああ、と納得するように頷いた。

「確かに、子供に見せるもんじゃねぇな。悪かったよ」

苦笑しながら、蘇啓は客を引き摺ったまま足早に奥へと消えていった。それを見届けると、蒼羽は春蘭の前から体を退けた。

「気遣ってくれたのか？」

こくり、と蒼羽は静かに頷いた。確かに、あれは

子供の見るものではない。春蘭とて祥琳の目に入るようなことになったら、同じ行動を取るだろう。

「そうか。蒼羽は優しいのだな」

少しだけ戸惑うように、蒼羽は首を横に振った。しかし、歩みを春蘭に合わせてくれたり、怖ろしい思いをしないように配慮してくれたりする蒼羽は、充分に心根の優しい人間だ。

「さて、思わぬ足止めをされてしまったな。みなを待たせては悪い。そろそろ行こう」

先を促せば、蒼羽は微かに頷いて再び歩き始めた。黄海楼は中庭を四方から囲む形で建てられた楼閣だ。見習い部屋があるのは西側で、部屋をもたない妓女や下働きの者たちが暮らしている。

そこを抜ければ目にも鮮やかな朱塗りの回廊が広がり、細かな彫刻が施された柱や、透かし彫りの見事な欄干が続く。他にも生花が飾られたり、各部屋からは上品な香木の匂いが漂ってきたりする。

蒼羽と春蘭が向かうのは、北側の楼閣である。最上階には楼主の部屋があり、よほどの上客でもない限り、北側の楼閣に通されることはない。そこで春蘭は秋菊として占を行う。それもまた、客の興味を引く理由の一つとなっていた。

いつも占を行っている房に入れば、春蘭の代わりに秋菊に扮してくれている樊月儀の姿があった。二十代後半の、おっとりとした雰囲気の美女である。

妓女たちのような華やかな襦裙ではなく、飾り気のない白を基調とした袍を纏っている。

「遅かったね」

「すまぬ。客を待たせてしまったか？」

「いいや、あっちも遅れてるようだよ。運がよかった」

笑いながら、月儀は戸口に立つ蒼羽の頭をさらりと撫でた。蒼羽は嫌がる様子もなく、ただされるがままになっている。

「ご苦労様。春蘭を送り届けたら、房に来るように、だってさ」

こくり、と蒼羽は頷くと、足音を立てずに去って行った。それを見送った月儀は、困ったように嘆息する。

「相変わらず感情の読めない子だねぇ」

「そうか？」

「笑いもしないし、泣きもしない。いい子だとは思うけど。子供らしくないっていうか……これはあんたも同じだけどさ」

「ふむ。子供らしいというのは、祥琳のような感じだろうか？」

妓楼において春蘭の周囲には、同世代の子は少ない。見習い部屋の少女たちとは会話をすることもないため、必然的に一人に限定されてしまう。

「そうだねぇ……って、そう訊くあたりが子供らしくないんだよ」

呆れたような物言いをする月儀に、春蘭は眉を寄せた。子供らしくないというが、それも当然。こう見えても春蘭は齢三百を超える守り神だ。妓楼で働く者の中でも、飛び抜けて高齢である。だが、それを口にしたところで相手を戸惑わせるか、一笑に付されるだけなので、ひとつ溜息をつくことでやりすごした。

「でも、そういうとこが、蟬英姐さんの気に入る理由なんだろうけどね」

「ふむ。確かに、蒼羽は蟬英のお気に入りだな」

「あんたもだよ。男でも女でも一癖ある相手に興味を引かれるみたいでねぇ。昔から、蟬英姐さんの客には変わり者が多いって有名だったよ」

「本人が一番の変わり者だと思うぞ」

「一理あるね」

ぽん、と手を叩いて、月儀は愉快げな笑い声をあげた。

「そろそろ客も来るのではないか？」

「ああ、そうだった」

春蘭が房の一画に下げられた御簾の内側へと入れば、続く月儀もいつもの定位置に腰を下ろした。念

のため顔を隠すように頭から白い巾を被れば、月儀の準備は万端だ。

春蘭も肌身離さずもっている水神盤を、すでに準備されている水の張られた容器に浮かべた。気の巡りを確かめるためにそっと触れれば、呼応するように水神盤が緩く旋回した。

春蘭が得意とするのは、水神盤という占具を使用する占いだ。

その託宣は正確であり、春蘭が人として生きていた頃は、災厄を防ぐために重宝されていたものだ。しかし、占の難しさからか、三百年を経た今では書物の中に記録として残されるのみである。

そもそも占に対する捉え方が、がらりと変わってしまったのだ。宮中にはお抱えの占師はいるものの、占の結果が重視されることはなく、また、外れることも少なくないという。巷での占は、あくまでも娯楽の一種となっていた。

――それが、時が経つということなのだろう。

永遠に変わらないものなど、ありはしないのだ。絶えず時は流れ、止まることはない。

その中で、様々なものが姿を消し、そして、新たに生まれていく。虚しさとも、寂しさともつかない感情が胸を去来するが、それは春蘭の記憶が過去で止まっているからだろう。

「おや、ようやく来なさったみたいだね」

月儀の声に、春蘭は水神盤から手を放した。御簾の向こうから、客を伴った妓女の朗らかな声が聞こえる。

表向きの春蘭の役目は、秋菊の言葉を客に口頭で伝えることだ。秋菊自身は姿を見せず、声も発しない。それは、本来、占を行う春蘭の外見があまりにも幼いために仕組まれたものだが、占師秋菊に神秘的な印象をもたらせる結果になった。謎めいた存在に興味をもつのは人の性だ。それもまた、さらなる集客を目論む楼主の戦略である。

御簾の手前に座った客と妓女が、楽しげな声をあ

げる。なにを占うか客が妓女に相談しているらしい。春蘭はその遣り取りを聞きながら、視線を水神盤に向けた。

脳裏に思い浮かんだのは、祥琳との会話だった。そもそも妓楼で占師として働くきっかけとなったのは、鄭家の財政難のためである。はじめは春蘭を警戒していた家僕の少年たちも、今では食い扶持などいらないと言ってくれているが、それは春蘭の矜持が許さなかった。

これは誰に気兼ねすることなく鄭家に居候するための手段なのだが、今はその屋敷に戻らぬ日々が続いている。真名を取り戻すことを最優先に掲げているにもかかわらず、自分がとっている行動はそれに反することになる。

不意に、春蘭の脳裏を端整な横顔が過った。

〝――兄は、理由もなくそんなことをするような人ではない〟

未だに耳に残るそれ。思い出す度に、胸に鈍い痛みが走った。

聞いた瞬間は、無性に苛立ちを覚えた。あまりに強い感情に、思わず怪我人の部屋から飛び出してしまうほどに。

その後もこの胸に湧きあがる〝想い〟はいったいなんなのか、春蘭にはよくわからなかった。悔しいのか、それとも悲しいのか。結局、判断できずに、春蘭は考えることを放棄した。

大事なのは真名を取り戻すことである。ならば、気が進まなくても鄭家に戻るべきだろう。今日は祥琳に泊まると言ってしまったので、明日の仕事が終わったら必ず――春蘭は、そう決意を固めた。

「よし、あれを占ってもらおう」

客の声に耳を傾けながら、春蘭は思い出したように込みあげてくるなにかに蓋をした。胸に巣食う痛みに気付かぬふりをして。

手が空いている者は大広間へ集まるように、と指示があったのは、翌日の昼前だった。

基本的に妓楼の朝は遅い。下働きや妓女見習い、門番といった一部の者たちは起きているが、妓女の大半は太陽が中天にくるまで姿を見せることは滅多にない。昼前に集められるということは、よほど重要で急ぎの報せがあるのだろう。

「なにかあったのかな？」

春蘭の隣に座る祥琳が、不安げに眉を寄せる。このようなことは珍しいのか、祥琳の他にも表情を曇らせている者は多い。

「まあ、何事もなければ、このように集められることもないだろうな」

「それはそうだけど……」

春蘭たちがいるのは、大広間の後方、それも隅に近いところだった。集まるといっても、位によって座る場所が異なるのだと、祥琳は言う。

上座の近くは、部屋持ちの妓女たちが占めるのだそうだ。その周囲には、各妓女の取り巻きたちが群れるようにして座り、少し離れてその他の妓女たちが固まっている。

下働きの下男や下女たちは、後方の余った空間に身を寄せ合い、入り切れない者たちは回廊に溢れている。視線を向ければ、扉から首だけを覗かせて中を窺っている者もいた。

隙間なく詰めれば全員入れるかもしれないが、妓女たちが、下働きの者たちと同席することを快く思わないのだそうだ。そう教えられたあとで、上座の近くに座る妓女たちを窺えば、口にこそ出さないが、不満げな表情をしている者が多いように見受けられた。

「お、あの者は確か……」

上座を窺っていた春蘭の目に、以前、皮肉たっぷりに突っ掛かってきた呂紅燕の姿が映った。歳は二

十前後で、自分の名にも使われている紅色の衣を好んで着ているようだ。今日も牡丹の絵柄が描かれた、目にも鮮やかな襦裙を身に纏っていた。

まだ化粧もしていない妓女たちもいる中で、髪型から衣裳に至るまで完璧に整えた紅燕は実によく目立っている。

「どうかしたの？」

「いや、見知った顔を見つけたものでな」

「春蘭は余裕だよね。私は、なにを聞かされるのかどきどきなのに」

「そうか？」

「少なくとも、春蘭みたいに周りを見てる余裕なんてないわ」

真剣な表情を浮かべる祥琳に、春蘭は苦笑した。余裕があるように見えるというが、それは互いの置かれた立場に違いがあるからだろう。

祥琳たちにとって妓楼は家そのものだ。彼女たちは借金を背負っているうえに、帰る場所がない。楼主からの話がなんであれ、それは自分たちの暮らしに直接結びつく。

対して、春蘭には帰る場所がある。職を失ったとしても、しばらくは生活できる環境が整っているのだ。言葉は悪いが、しょせん他人事。故に、祥琳が言うように余裕があるように見えるのだろう。

「だって、こんなの初めてで……」

不安そうに俯く祥琳の頭を、春蘭は宥めるように撫でた。こればかりは、話の内容が悪いものではないことを願うしかない。

「お、ようやく来たみたいだぞ」

広がるざわめきは、楼主の登場を示していた。大広間の上座に黄海楼の女楼主、淘蟬英が姿を見せた。

蟬英は妙齢の佳人である。目を瞠るほどの華やかな容姿に、均整の取れた見事な肢体。紫色の襦裙から覗く素肌は、遠目から見てもわかるほど白く際立っていた。

「――さて。あまりよい報せじゃないよ」
しんと静まり返った房に、蟬英の凛とした声が響いた。
「貧民窟で悪い病が流行っているらしい」
ざわり、と動揺が走った。みな不安げに眉を寄せ、それぞれに困惑の声を漏らしている。
「静かに！　話は終わっちゃいないよ！」
蟬英の叱咤に、大広間に再び沈黙が降りる。しかし、先ほどとは違って、楼主を見つめる者たちの瞳には深い憂慮の色が滲んでいる。
「まだ、疫と決まったわけじゃあない。調べたところ、流行は貧民窟だけに留まっていて、外に拡まった様子はない。だからって楽観はできないけどね」
被害は貧民窟だけ、という言葉に多くが安堵の表情を見せた。
しかし、花街は貧民窟から比較的近い場所にあるため、楽観はしていられない。一部の者たちは、厳しい表情を蟬英に向けていた。
「初めの症状は、腹痛だ。しばらくして高熱が続くと、下痢や嘔吐が止まらなくなるらしい。病を持ち込んでくる客はいないと願いたいけど、もしもおかしな様子を見せるようなのがいたら、すぐに報告するように。下働きのものも、商品を卸していく相手をよく見とくんだよ」
それから、と蟬英は続けた。
「これが一番大事なんだけどね。あんたたちも、少しでも体調が悪いと感じたら黙ってないで必ずあたしにお言い。病に罹ったからって、見捨てるようなことはしないと約束する。いいね」
蟬英は、特に最後を強い口調で念押しした。
病に罹ったら見捨てられる、と危惧する者は多い。特に妓女たちは誰もが不安を抱いているはずだ。商品としての価値がなくなったものを――むしろ、他の商品に害を及ぼすものを妓楼に留めておくはずがない、と。だからこそ、蟬英は最後の台詞を強調したのだろう。

「報せは以上だよ。くれぐれも用心を怠るんじゃないよ」

解散が告げられ、大広間はざわめきに包まれる。蟬英の許へ詰め寄る者もいれば、不安げな様子で足早に広間を出て行く者もいる。

春蘭も部屋に戻ろうと立ち上がった時、祥琳が座ったままだということに気付いた。心なしか先ほどより色を失った顔付きで、茫然としたまま動こうとしない。

「祥琳？」

「え、な、なに？」

声をかければ、祥琳ははっとしたように春蘭を見返した。

「話は終わったぞ。部屋に戻らぬのか？」

「あ、そうだね。行こっか」

慌てて立ち上がった祥琳は、焦っているようだった。首を傾げた春蘭は、すぐ理由に思い至った。

「もしかして、以前に私が言ったことを気にしておるのか？」

「え？」

以前、祥琳の未来を占った際、春蘭は、疫を乗り越えられるかどうかにかかっていると告げた。それを思い出し、気に病んでいるのではと思ったのだが、どうやら勘違いだったらしい。

「違うの。春蘭に言われたことを思い出したわけじゃなくて……あ、でも信じてないわけじゃないからね」

占の腕を疑われ、春蘭が傷付くとでも思ったのだろうか。祥琳は、最後の台詞を強調するように言った。

「では、なにをそんなに気にしておるのだ？」

「別になにも……」

祥琳は嘘をつけない性格らしい。誰が見ても一目でわかるほど、目が左右に泳いでいた。

「ふむ……そうか」

祥琳が言いたくないのならば、深く追究するのも

憚られる。春蘭が頷くと、祥琳はあからさまにほっとした笑みを浮かべた。
「じゃあ、お部屋に戻ろっか」
「うむ」
春蘭が相槌を打った時だった。その肩を叩く者がいた。振り返れば、蒼羽の姿がある。
「どうかしたのか？」
春蘭の手を握った蒼羽は、ついて来いとばかりに腕を引っ張った。
「わかった。祥琳、済まぬが先に戻っていてくれ」
「うん」
返事をする祥琳は、やはり心ここにあらずといった様子だ。気にはなったが、蒼羽が急かすように腕を引くため、春蘭はしかたなくあとに続いた。
回廊へと出れば、そこかしこで妓楼の者たちがひそひそと立ち話をしている。先ほどの蟬英の話を思えば、むりのないことだった。
「のう、蒼羽。私を呼んでこいと楼主に言われたのか？」
人気のないところに差し掛かった際に、春蘭はそう口を開いた。こちらをちらりと横目で一瞥した蒼羽が、肯定するように小さく顎を引く。
「そうか」
おそらく、貧民窟で流行っているという病絡みの話だろう。祥琳のことを占った際には、蟬英も同席していたのだから。
通された楼主の房は、何度見ても感嘆せざるを得ない。飾られている調度品はどれも高価なものばかりで、一つ一つに気品もあり、しかも全体に調和が感じられる。
空へと昇る龍が描かれた衝立や、壁にかけられている山水画は、春蘭の目から見ても見事としか言いようがない。また、室内の天井や柱、欄間に至るまで、精緻な装飾が細部まで施されていた。
「私はここで待っておればよいのか？」
蒼羽が頷く。しばらくすると、慌ただしい足音と

共に部屋の主が姿を現した。
「ああ、うるさいっ。まったく、あたしにぐちぐち言ったって解決するわけないだろ！」
盛大に文句を喚き散らしながら入ってきた蟬英は、円座と呼ばれる敷物に腰を下ろした。そして、脇にあった小箱から煙管を取り出すと、手慣れた様子でそれに火を入れる。
「蒼羽。あんたは下がってな」
蟬英の命に、蒼羽は音もなく室内から立ち去る。それを見届けてから、蟬英は春蘭に向き直った。機嫌は直っていないようで、眉間には深い縦皺が刻まれている。
「さて、あんたを呼んだのは、さっきの話に関係したことだよ」
「貧民窟で流行っているという病について、か」
「そうさ。そのことで、韓の旦那はなにか言っていなかったかい？」
「韓……楊秀のことか」
鄭家の主の友人であり、禁軍右飛龍将軍という要職に就いている人物を思い浮かべ、春蘭は首を横に振った。
「なにも。そもそも、ここしばらくは姿を見ていない」
三日ほど前に鄭家に帰った際、楊秀が顔を見せなくなったのだという話を、家僕の少年たちから聞いていた。その際は、職務が忙しくこちらにかまけている余裕がないのだろうと、三人で話したことを覚えている。
「会ってないのかい？」
「うむ。以前は、間をおかずに土産持参で来ていたのだが、顔を見せなくなったらしい」
「それは、いつ頃からだい？」
「確か、五日ほど前からだ」
「……」
春蘭がとある事件に巻き込まれた仲望を助けに向かい、無事に連れ帰って来たのは今から八日前のこ

とである。
　その翌日、楊秀は一度だけ友人を見舞いに訪れている。おそらくそれ以降、姿を見せなくなったのだろう。
「……そうかい」
「なにか気になることでもあるのか？」
「まあ……あんたに話しても、問題はなさそうだからいいけどね」
　ふぅ、と蟬英は気だるげな溜息をついた。
「以前、あんたは〝疫〟が流行ると占ったね」
「うむ」
「どうやら、それが現実になりそうなんだよ」
　蟬英は煙管を持っていない方の手で、額を押さえながら眉間に皺を寄せた。
「貧民窟だけに留まらぬということか？」
「みんなにはああ言ったけどね。街中に拡がるのも時間の問題だろうさ」
「……なるほど。だから楊秀なのか」
　貧民窟に端を発した流行り病を、朝廷が把握していないはずがない。
　当然、なんらかの対策が検討されているはずである。楊秀ならば、禁軍の将としてそれに携わっている可能性は高いだろう。
「お偉いさんたちが、どんな対策を取るのか気になってね。知っといて損はないだろう？」
「客の中に高官はいないのか？」
「もちろん、心当たりはあるよ。でも、うちを信用して情報を提供してくれる相手は、限られてるんだ。今の皇帝様は厳しいからねぇ」
「ふむ」
「なによりも、対策を練ってる時に妓楼に来る暇はないだろうさ」
　だから楊秀も鄭家に顔を出さなくなったのか、と春蘭は納得するように頷いた。
「まあね、うちもそう易々と病を持ち込ませるつもりはないよ」

蟬英はそう請け合った。しかし、春蘭の胸には一抹の不安があった。それは祥琳の未来を占った時のことである。疫を凌げるかどうかがこれからの未来を左右する、という卦が出ていた。

そこには祥琳が疫に罹る可能性が示唆されていた。乗り越えられるかは五分五分。こればかりは、春蘭も判断のしようがない。だが、それは黄海楼内でも病が流行するという暗示ではないだろうか。

「とりあえず、覚悟はしておきな」

「わかった」

春蘭が頷くと、蟬英はふいに目を眇めた。そして、どこか自嘲するような笑みを浮かべる。

「嬉しくないのかい？　疫が流行るという卦は当たったことになるんだよ」

「どういう意味だ？」

「あたしが知ってる占師たちは、占いが当たれば、それがよいことでも悪いことでも誇らしげに胸を張ったもんさ。どうだと言わんばかりにね」

「なぜ、誇らねばならぬのだ？」

蟬英の言葉に、春蘭は困惑した。確かに、疫が流行すれば、春蘭の占は的中したということになる。しかし、それが自分の占の腕を誇ることに繋がるとは思えない。

なによりも、疫が流行ることになれば大量の死者が出る。それは喜ばしいことではない。

「なぜって、占が当たったんだよ？」

「当たる、という言葉は適当ではない」

根本的に占に対する認識が違うのだ、と春蘭は苦笑した。蟬英の訝しげな眼差しが、それを物語っている。

「私は〝視て〟いるだけだ」

それは定められた未来であったり、失せ物捜しであったり、水神盤を通してすべての理を〝視る〟のである。

春蘭が人として生きていた頃、占とはそういうものであった。

「特に〝災厄〟の影は見逃しようがない。わかって当然だ」

「……あんたの言い方だと、未来はすでに決まっているように聞こえるね」

「定まっているものと、そうでないものがある。自然の理は、どう足掻いても覆すことはできない。変えられるのは、人の意志によって左右される未来だけだ」

占師はそれを読み取る。待ち受けるものが凶事であれば、回避することを暗に促す。

自然の理のように、動かすことができぬものであれば、被害を受ける前に逃げるなどの手段が講じられた。

「誇るようなものではない」

蟬英はそれでも腑に落ちないといった様子で首を傾げている。

蟬英の知る占師と春蘭とでは、そもそもの在り方に違いがあるのだが、まさか目の前の少女が三百年という長きを生きる守り神であるなど知るよしもない。

「もう戻ってもよいか？」

「いいよ。客が来たら呼びに行かせるから、準備だけはしておくんだよ」

「わかっている」

房を出ると、回廊の隅に控える蒼羽の姿があった。目が合えば、すぐにこちらへとやってくる。

「話は終わった。部屋まで送って行ってもらえるか？」

返事の代わりに、春蘭の小さな手が一回りほど大きな蒼羽の手に包まれた。



貧民窟での疫の流行を知らされた翌日、仕事を終えた春蘭は鄭家へと戻ってきていた。

真名を取り戻すためだと自分に言い聞かせたこともあるが、もしかしたら不在の間に、楊秀が訪ねてきたかもしれないという考えもあった。世話焼きな男のことだ、病が流行る兆しがあれば、鄭家の少年たちに注意を促すくらいはするだろう。

しかし、家僕の少年たちに訊ねて返ってきた言葉は、〝否〟だった。

「楊秀様だってお忙しいんだ。いらっしゃらない時だってある」

少しばかり憤然とした様子で答えたのは、孫啓璋である。歳は十三。気の強そうな顔立ちそのままに、春蘭に対し攻撃的な喋り方をする癖があった。

質素な短服を着た啓璋は、中庭に作られた畑でせっせと農作業に勤しんでいる。すでに夕暮れが迫っており、闇の色が濃い。それでも、今日のうちに種を蒔いてしまうのだと、啓璋は手を動かし続けていた。

ちなみに手伝いの申し出は、あからさまに迷惑そうな表情を浮かべた啓璋によって却下されている。

「過去にもこのようなことはあったのか？」

「たまにな。いつも、お仕事が立て込んでいらした時だ」

「連絡もなくか？」

「さすがに華安を離れるような場合は、事前に一言おっしゃってくださるけどな」

「そうなのか」

ざくざく、と土を被せる音が辺りに響く。春蘭は

中庭に面した回廊に座って、じっと耳をそばだてていた。
「そういえば、ちょっと伸びたんだぜ」
「ん？　髪か？」
「馬鹿！　身長に決まってんだろ！」
顔を真っ赤にして憤慨する啓璋に、春蘭は首を傾げた。どう見ても以前と変わりがあるようには思えない。
「……気のせいということも」
「毎朝起きたら、柱に印をつけて測ってんだ！　んなわけないだろ！」
どうやら毎日、涙ぐましい努力が行われているようだ。なかなか成長を見せない身長に、一喜一憂する啓璋の姿が脳裏に浮かんだ。
「でもよー、友寧の方が少しだけ大きいんだよなぁ。あ、高いっていっても、ほんのちょびっとだからな！　勘違いすんなよ！」
「いや、見た目的にはほぼ変わらぬと思うが」
「え、そうか？」
変わらないと言われたことがよほど嬉しかったのか、機嫌をよくした啓璋はうきうきとした様子で手を動かしている。
「最近さぁ、体の節々が痛むんだよな。宋先生に訊いたら〝成長痛〟っていうらしいぜ。なんでも、急に体が大きくなるんだとよ。楊秀様を追いこしちゃうかもな！」
自分が守護していた邑の少年たちにとっても、背丈は重大な関心事だったことを思い出し、春蘭は懐かしげに目を細める。同時に、早く邑へ戻らなくてはという焦りが胸を過った。
「ところでさ、花街は大丈夫なのか？」
「なにがだ？」
唐突な啓璋の問いに、春蘭は首を傾げた。
「いや、なんか悪い病が流行ってるって聞いたから。あそこって、貧民窟の次にやばいだろ。人の出入りも多いし、一人でも病人がでたら、あっという間に

拡がるんじゃないか？　そうなったら、お前もやばいだろ」

「私は平気だ」

春蘭は自分の体を見下ろした。三百年もの長い間、春蘭の肉体は神気によって守られてきた。その効果は、魂を戻したあとでも続いている。このまま人として過ごしても、寿命をまっとうするぐらいはもつだろう。

神気は災厄を退ける力を持つ。それを身に帯びている春蘭は、たとえ貧民窟を闊歩したとしても病に罹る心配はなかった。

しかし、こちらの事情を知らぬ啓璋は、農作業の手を止めて春蘭を睨みつけてくる。

「平気なわけないだろうが！　流行り病っていったら、どんな屈強な男だってひとたまりもないんだぞ。罹ってから後悔したって遅いんだ！」

「まあ、普通はそうなのだろうが……」

「特にお前みたいな体の小さい子供は、すぐに倒れるに決まってる。病は、子供や老人の方が罹りやすいって宋先生も言ってたぞ！」

説明するのも億劫だが、なによりも春蘭の事情を話したところで信じてもらえる気がしない。むしろ春蘭にしてみれば、年齢の割に小柄で、肉付きがよくない啓璋の方が心配なのだが。

警戒心が乏しすぎる、と憤慨する少年に、春蘭はとりあえず話題を変えることにした。

「ところで、どこでそれを聞いたのだ？」

「昼間、買い物に出た時に耳にしたんだよ。どの店でも、かなり噂になってたぜ」

「ふむ」

「気の早い奴らは、薬を求めて診療所に詰めかけたって話だぞ」

「正しい判断だな」

貧民窟に蔓延っている病が、やがて華安を覆いつくせば、それは疫と呼ばれるだろう。

「薬かぁ……」

「買えるのか？」

鄭家に高価な薬を買う余裕があるとは、到底思えない。そもそも薬を買いに走っている気の早い者たちというのは、金銭的に余裕のある裕福な家の者だけだろう。

「こないだの謝礼として、龍乎の方から結構な金子が入ってさ。治療費は別に貰ってるから、薬は買おうと思えば買えるんだよ」

でも、今後のことを考えれば貯蓄した方がいいしなぁ、と啓璋は難しげな顔で呻く。

この歳で家計のやり繰りに頭を悩ませている少年は、噂を信じて薬を買っておくべきかどうかで迷っているのだ。

「それにさ、その薬が効くとも限らないだろ？　効かなかったら、買うだけ無駄だし。むしろ日持ちする食べ物を、まとめて買っといた方がいい気がするんだよな。病が流行るようになったら、絶対に価格もあがってくるだろうし」

「それも困るな」

ある意味、薬よりもそちらの方が重要だろう。食糧不足が深刻になれば、多少の金などあっという間になくなってしまう。

「一番は、噂のままで終わってくれることなんだけどな」

それは、誰もが願っていることだ。貧民窟だけで収まってくれれば、と。

だが、蟬英の言葉を信じるならば、病が拡がるのは時間の問題で、そうなれば、またたく間に都全体で猛威を振るうだろう。

しかし、頭の隅では、それを否定する声もある。華安の守り神が、易々と疫の流行を許すはずがない、と。

むろん守り神だからといって、すべての災厄を防ぐことは難しい。だが、規模を縮小することは可能だ。疫へと変化する前に、神気によって威力を弱めてしまえばいいだけの話である。

「これだけの規模の都だ。強力な守り神がいるはずなのだがな……」

ぽつりと漏らされた言葉は、啓璋の耳には届かなかったようだ。手を止めることなく、鍬で土を被せている。

華安は、華国の都である。都を造る際に、神を祀る祭祀を行っていなくてはおかしい。現に、三年前に起こったといわれる飢饉は、規模を拡大することなく終息したという。

元々、そういう定めだったのかもしれないが、守り神が介在したとも考えられる。往時と同様に守り神がいるのならば、今回の流行り病もどこかで終息するはずだ。

「あ、それと、猩猩緋の噂も聞いたな」

「ほう」

義賊、猩猩緋。

国に盾突く逆賊として広く手配書が回されているが、貧しさに喘ぐ者たちからは救い手として支持されている。

春蘭自身、猩猩緋の構成員とは浅からぬ縁があるため、啓璋の話に耳を傾けた。

「なんでも、病が流行るのは皇帝の治世が揺らいでいる証拠だ、って街頭で演説してたらしいぜ。龍乎がくる前に逃げちまうみたいで、まだ一人も捕まってないって噂だ」

「抜け目のない者たちだな」

もっとも、そうでなければとっくに殲滅されているだろう。世論を味方にし、徹底的に相手の戦力を削ぐ。それを地道に繰り返していけば、国家を転覆することも不可能ではないかもしれない。

「猩猩緋は楊秀様の敵だからな。間違っても応援なんてするんじゃないぞ！」

「わかっておる」

やれやれ、と肩を落としながら春蘭は返事をした。しばらく、せっせと働いている啓璋を眺めていると、回廊の奥から足音が聞こえた。

姿を見せたのは、啓璋とそう歳の変わらない少年だ。名は高友寧。優しげな容貌の少年で、のんびりとした性格が啓璋とは対照的である。友寧は春蘭の姿を見つけると笑みを浮かべた。

「夕飯の支度ができたよ。啓璋はそろそろ終わりそうかな？」

「手伝うというのに、聞かぬのだ」

「それは、まあ……これが僕らの仕事でもあるわけだしね。春蘭の手をわずらわせるほどのものでもないよ」

苦笑する友寧に、春蘭は溜息をついた。気を遣われるよりも、正直に足手まといだと言われた方がましだ。

「街では、病が流行るのではないかと噂されているようだな」

「え、うん。啓璋に聞いたの？」

「ああ。花街の方は平気かと訊かれた」

「啓璋もね、春蘭のことを心配してるんだよ。春蘭が帰って来ない時なんかは、花街まで迎えに行こうか悩んでいたくらいだからね」

春蘭に対して当たりがきつい啓璋であるが、嫌われているわけではないらしい。逆に心配をさせていたと知って、春蘭は少し反省した。

「私は平気だ。病には罹らぬ」

「あのね、春蘭。絶対に病に罹らないなんてことはないんだよ」

常になく怖い顔で窘める友寧に、ここにも心配性がいたか、と春蘭は肩を落とした。

気にかけてくれるのはありがたいのだが、このままでは花街への立ち入りを禁止されてしまいそうな勢いである。啓璋同様に、別の話題にすり替えた方が賢明だろう。

「ところで、ここのところ楊秀の姿が見えぬな。友寧はなにか聞いているか？」

「なにも聞いてないけど……禁軍の方で忙しいんじゃないかな」

「ふむ」
返ってきたのは、やはり啓璋とさほど変わりのないものだった。
「楊秀も大変なのだな」
「それは、責任ある立場の方だからね。あ……そういえばさ、春蘭。旦那様がね、ようやく床から起き上がれるようになったんだよ」
「……そうか」
「体が鈍ったらいけないからって、少しずつ運動もされるんだ。宋先生も、回復が早いって驚いてたくらいで――」
春蘭は友寧の言葉に、徐々に顔を曇らせた。なぜ、友寧がいきなりその話題を出したのかはわからないが、無性に耳を塞いでしまいたい衝動に駆られる。
「だから、旦那様も春蘭の顔を見たらもっと元気がでると――」
「そうだ。妓楼から給金が出たのだ」
友寧の言葉を遮って、春蘭は懐から小袋を取り出した。今日は妓楼で働く者たちに給金が手渡される日で、春蘭も秋菊として働いた分の賃金をはじめて手渡された。
小袋はずっしりと重く、自分で稼いだ金だけに感慨深いものがある。春蘭はそれをそのまま友寧に渡した。
「足りるとよいのだが」
春蘭は金銭に関する知識を持ち合わせていない。一家族が十日暮らすのに、どれだけの銭が必要なのか。一袋の米が、どれだけの銭と交換されているのか。神社に奉納されるのは穀物や野菜、家畜といったものばかりで、三百年もの間、銭を見たことは一度もなかった。
今回の給金が居候の礼として見合うならばいいのだが、と春蘭は眉を寄せた。
「足りぬのならば、もっと客を増やせるかどうか蟬英に訊いて――どうしたのだ、友寧？」
袋の中を覗いて唖然としている友寧に、春蘭は首

を傾げた。もしかして、ぜんぜん足りていなかったのだろうか。

「少なくてすまぬ」

「え、いや、違う！　違うよ！」

友寧が慌てたように首を左右に振っていると、畑仕事を終えた啓璋が近寄ってきた。額に噴き出た汗を袖で拭っている。

「どうした？」

「け、啓璋、これっ！」

友寧は小袋を見せ、春蘭が妓楼で稼いできた銭だと告げる。どれどれ、と中身を覗いた啓璋は、先ほどの友寧と同じようにぴしりと固まった。

そして、愕然とした様子で、

「だ、旦那様の給金より多い……！」

と呟いたのだった。

鄭家に戻った翌日のこと。今日は大口の宴会が入っているため、妓楼での仕事は休みとなっている。そういう日も珍しくはないのだが、春蘭は房室で一人、暇を持て余していた。

いつもならば、日当たりのよい場所でのんびりとすごすのだが、今日はそんな気分にはなれない。久し振りの鄭家は、なぜか妙に居心地が悪く、春蘭を戸惑わせた。

「はあ……」

なんとなく出てしまった溜息は、思いの外に大きく室内に響いた。

寝台に横になってぼんやりとしていると、円卓の上から、ぴしゃんと水面を跳ねる音が聞こえた。顔を上げれば、椀の縁から様子を窺っている真っ白な蛙の姿が目に入った。

「腹でも減ったか？」

小さな蛙の白雪は、故あって春蘭が引き取ることになった小さな仙である。真名を取り戻したあかつきには、春蘭に神獣として隷属することが決まって

いる。

『はくとう、はくとう』

「白桃に会いたいのか」

『あい』

白桃とは、春蘭が先代の守り神から譲り受けた神獣だ。春蘭がその名を紡げば、腰紐に結わえた玉が淡い光を放ち、真っ白な虎が姿を現した。

普通の虎よりも一回り大きい白桃は、ぐるりと周囲を見回したあと、円卓の上の白雪に目を止める。

「白雪が遊んでほしいそうだぞ」

巨大な虎と、親指の先ほどしかない蛙では、あまりにも大きさに差がありすぎる。呼び出したのはいいが、いったいどうやって遊ぶのだろうかと、春蘭は二匹の様子を窺っていた。

『はくとう』

椀から飛び出した白雪は、白桃ににじり寄ると、その頭に勢いよく飛びついた。そして、一生懸命に天辺へよじ登る。白桃の頭の居心地のよいところに辿り着いた白雪は、真っ白な毛に埋もれながらどことなく満足げだ。

『ふあふあー』

「確かに、白桃の毛並みはふわふわだ。しかし、よく見ないとぬしはどこにいるかわからぬな」

白桃の毛に埋没しかかっている白雪は、体が同系色のため一度見失うと捜し出すのは難しい。だが、白桃の毛がよほど気に入ったのか、白雪はなかなか椀に戻ろうとしなかった。

白桃と違い、まだ隷属が済んでいない白雪は、毎日を椀に張られた水の中で過ごしている。仙とはいえ、死なないわけではない。その身に過ぎた衝撃を受けると息絶えてしまう。白桃ら神獣に比べれば、遥かにか弱い存在だ。

だが、そんなことはおかまいなしに、妓楼に行こうとする春蘭に意地でもついて行きたがる白雪が目下の悩みだった。

なんとか好物と引き換えに留守番をさせているが、

今日のように一日一緒にいられる時ぐらいはかまってやらないとかわいそうな気がする。

もっとも仙ともなれば時間の概念は緩く、暇を持て余すという感覚は当て嵌まらない。白桃が玉の中に留めおかれているのと同じようなものだ。

「床に落として、踏み潰さぬように気をつけるのだぞ」

そう注意すれば、わかっているという風に白桃は頭を揺らさぬように小さく頷いた。

「白雪、干し肉を食べるか？」

『くう。ほしにくすき』

白雪用に用意してあった干し肉の欠片を、春蘭は一つまみ椀の中に落とした。白桃の頭から椀へと移動した白雪は、干し肉を食い入るように見つめている。

「ちゃんとふやけるまで待つのだぞ」

『あい』

以前、空腹のあまりふやけるのを待たずに干し肉を呑み込んだ白雪は、のどの奥につっかえて苦しんだ経験がある。干し肉をのどに詰まらせ窒息されては、さすがに彼の師に面目が立たない。

干し肉をじっと見つめる白雪。それを、白桃がどこか微笑ましそうに眺めている。初めて仲間ができて——たとえ姿形に大きな差があったとしても——嬉しいのだろう。

春蘭がそんなほのぼのとした二匹を見つめていた時だった。回廊から、こちらへ向かって駆けてくる足音が響く。何事かと体を起こせば、啓璋が慌てた様子で室内に飛び込んできた。

「春蘭、お前に花家から迎えが来てるぞ！　っていうか、遊びに行く予定だったんなら朝にでもそう言えよな。近所の小父さんかと思って、泥のついた格好で出ちまったじゃねえか！」

「……ふむ？」

春蘭は首を傾げた。花家に知り合いはいるが、遊びに行く予定は入っていない。なにかの間違いでは

ないかと思うが、啓璋は急げと春蘭を急かす。
「うちの門前に、花家の俥があったら大変なんだよ！　誰かに見られる前に、さっさと帰ってもらえ！」
「なぜ、問題なのだ？」
「うっ、それは俺もよくわかんないけど……でも、こないだ楊秀様が言ってたんだ。花家から使者が来たら、なんでもいいから理由をつけて追い返せって。じゃないと、旦那様が面倒事に巻き込まれるとかなんとか……」
　説明する啓璋も腕組みしながら小首を傾げている。ただ楊秀に対する信頼から、言いつけを守ろうとしているのだ。
「わかった」
　これ以上、啓璋に聞いてもしかたない。頷いて立ち上がると、ようやく白桃の存在に気付いた啓璋が大声をあげて飛び退った。白桃の存在は知っていても、まだ慣れてはいない様子だ。
「白桃、玉に戻れ」
　淡い光が白桃の巨体を包み、玉へと吸い込まれて消えた。しかし、それを見た白雪が慌てたように声をあげる。
『おれも、いく！』
「……干し肉はいいのか？」
『あ、うう、う』
　干し肉と春蘭を交互に見比べた白雪は、迷うような声をあげる。春蘭について行きたいが、まだふやけ切っていない干し肉にも未練があるようだ。
「今日は早く戻ってくる。だから、いい子で待っていてくれ」
『おれ、いいこ？』
「ああ。白雪はいい子だ」
『じゃあ、まっててやる』
　胸を張る白雪の頭を指先で撫で、春蘭は房室をあとにした。背後では真っ青な顔をした啓璋が、「幻聴、きっと幻聴だ」と呟いていた。

「あ、春蘭。断り辛いんだったら、旦那様に頼んでみたらどうだ？」
「自分で対処できる」
「体調のことなら心配しなくてもいいぞ。もう俺たちの支えがなくても、起き上がれるようになったんだからな」
「いらぬ」
強い口調で告げれば、啓璋はきゅっと眉を寄せた。
しかし、花家からの遣いとは、どういうことだろうか。あの姉妹――特に妹――ならば、用を思い立ってすぐ行動に移すくらいのことはするだろうが、せめて事前にこちらの都合を確認してもらいたいものだ。もしも、春蘭が妓楼に行っていたらそちらに俥をまわすつもりだったのか。
やれやれ、と溜息をつきながら足早に回廊を門へと向かって歩いている時だった。不意に、春蘭の視界を黒い影が覆う。あ、と思った時にはすでに遅く、それに勢いよくぶつかってしまった。
体勢を崩した春蘭は、反動を堪えることができずそのまま背後に倒れそうになる。反射的に目を瞑るが、予想していた痛みは襲ってこなかった。疑問に思い目を開ければ、すぐ傍に久し振りに見る人物――鄭仲望の顔があった。
整った容貌には、いつも通りあまり感情の色は見られない。以前よりも一回り痩せてしまったように思えるが、〝山塀〟から助け出された時よりはだいぶ回復したらしい。
身に着けているのは無地の寝衣だけで、開けた胸元から覗く包帯が、未だ怪我が治り切っていないことを示していた。
「――春蘭？」
名を呼ばれ、はっと我に返った春蘭は、倒れそうになったところを仲望に支えられたことに気付いた。背に回された腕に、なぜか体が強張る。
「あ、旦那様！」
なに出歩いてるんですか、と咎める啓璋に、仲望

は「水を飲みに来たんだよ」と答えた。そのやり取りが交わされる間も、春蘭は硬直したまま動くに動けなかった。

なぜ、こんなにも胸が苦しいのか。自分の感情がよくわからない。とにかく、一刻も早く仲望から離れたい。その一心で、春蘭は背に回された腕を振り払った。

「春蘭？」

訝しむような声が響く。息を吸ってから、春蘭は意を決して顔を上げた。

「ぶつかってすまなかったな」

「そんなに急いで、どうしたんだ？」

「ぬしには関係のないことだ」

意図したわけでもないのに、拒絶するような鋭い言葉が春蘭の口を衝いてでる。仲望の目が驚きに見開かれた。

「――先を急いでいるのだ」

それだけを告げ、春蘭は走りだした。自分を呼ぶ啓璋の声が背後に聞こえる。だが、足を止める気にはなれない。

そうして、春蘭が息を切らして向かった門前には、高級な俥と、その脇に立つ花家の家僕の姿があった。

「花家に行くのなら、早く出してくれっ」

ただならぬ様子の春蘭に家僕は目を丸くしたが、それが本来の目的であったようで、異を唱えることなく御者へと出発を命じた。春蘭を乗せた俥は、徐々に鄭家から遠ざかっていく。

結局、啓璋に花家へ向かうことを告げずじまいだったが、俥と春蘭がいないことで悟ってくれるだろう。帰ったあとでうるさく言われるかもしれないが。

ほう、と安堵の溜息をついて、春蘭は服の上から胸に手を置いた。落ち着いて考えてみれば、仲望にぶつかったくらいで、なぜあそこまで混乱したのかがわからない。確かに、仲望に会うのは久し振りだった。

だが、ただそれだけのこと。なぜ、と春蘭は今一

度、自問した。しかし、明確な答えは一向に見つからぬまま、花家へと着いてしまったのだった。

　しばらくお待ちください、と客室に案内してくれた侍女が告げる。椅子に座った春蘭の前に、香り豊かな甘露茶と、大粒の干し葡萄や杏が盛られた皿が並べられた。

「どうぞ、お召し上がりください」

「……いただこう」

　茶よりも先に、自分がここに連れて来られた理由を訊きたかったが、それは俥を寄越した本人に訊ねるのが筋というものだろう。黙って甘露茶を口に含み、甘酸っぱい干し葡萄を摘まんだ。

　通された客室は中庭が一望できる造りとなっていた。妓楼で働くようになって目が肥えた春蘭だったが、やはり花家の庭は見事の一言に尽きる。

　室内を飾る装飾品も、あつらえたかのように一つの空間に収まっていた。一見して単純なように思えるが、調和の取れた室内を演出する難しさは、妓楼で散々見聞きしていた。

　特にそういうことに厳しい蟬英は、どれほど高価な装飾品であっても、場の雰囲気に少しでも合っていなければ、すぐ別のものに替えるように指示を飛ばしていた。その際、見立てを行った妓女はこっ酷く叱られるため、彼女たちも感性を磨くのに必死である。

　黄海楼の妓女たちがこの部屋に通されたならば、室内を見て回るのに忙しいだろう。春蘭も以前とは違うところに目が行ってしかたなかった。

　花家の姉妹が姿を見せたのは、春蘭が二杯目の甘露茶を飲み干す頃のことだった。

「遅れてしまってごめんなさい」

　心の底から申しわけないといった顔で謝罪したのは、花翠蓮である。歳は十五。たおやかな印象の少女で、年齢よりも二、三歳は上に見える。

今日は仕立てのよい藤色の上衣に、それより少し色の濃い腰裙を合わせていた。艶やかな黒髪は丁寧に結い上げられ、牡丹を模った紅色の簪が挿してあった。

「いや、気にするな」

正直、美味い茶に舌鼓を打ち、干し葡萄や杏を摘まみながら中庭を眺めていたので待たされた気はしない。

「ほら、姉様。だからちょっとくらい平気だって言ったじゃない」

春蘭の返事を受け、不服そうに頬を膨らませたのは、翠蓮の妹、花玉翠だった。歳は翠蓮の一つ下で、喜怒哀楽のはっきりとした性格の少女である。

薄紅色の上衣に、下には薄い桃色の腰裙を合わせていた。姉と同じく丁寧に結い上げられた髪には、金色の簪が左右に三本ずつ挿してあった。

「私たちが呼んだのですよ。お待たせするわけにはいきません」

「もう。姉様は頭が固いんだから」

小さく舌を出した玉翠だったが、姉の咎めるような視線に慌てて背筋を伸ばす。相変わらずだな、と春蘭は頬を緩めた。

花家の姉妹と知り合ったきっかけは、春蘭が華安にやってきた翌日、人攫いに襲われていたところを助けたことだ。厳密にいえば姉妹を救ったのは別の人物なのだが、人攫いたちに臆することなく対峙した春蘭も同じように感謝され、お礼にと花家に招かれたのだった。

以来、姉妹に——特に妹の玉翠に——気に入られ、遊びに来てほしいと再三催促を受けていたのである。もっとも、こんな風に連れて来られるとは思ってもみなかったが。

「それで、私になんの用なのだ？」

「春蘭は占いが得意なのでしょう？」

玉翠の問いに、春蘭は頷いた。実際に姉妹の前で占ったことはないが、占師として働いているのは告

げてある。
「あのね、姉様を占ってほしいの！」
「翠蓮を？」
首を傾げれば、そわそわと周囲に視線をさ迷わせる翠蓮の姿が目に映った。心なしかその頬は朱色に染まっている。
「ほら、姉様からもお願いしなきゃ」
「……あの、とある方と結ばれることができるかどうか、占ってはいただけないでしょうか……」
言い終えたあと、翠蓮はさらに頬を赤らめた。それを玉翠が満面の笑みで見つめている。
「恋占いか」
「こ、こここ、恋って、私は別にそんなつもりは……！」
「違うのか？」
春蘭の問いに言葉を失った翠蓮は、しばらくの沈黙のあと、「……そうです」と消え入りそうな声で呟いた。
「では、水を張った盆を用意してくれ」
しばらくすると、注文したものが円卓に用意される。春蘭が懐から取り出した水神盤（すいしんばん）を、水を張った盆に浮かべれば、玉翠の目がきらきらと輝いた。
「ねえ、これはどういう占いなの？」
「水神盤に浮き出た文様や、八つの角が指した方向で吉凶を判断する。して、相手は誰だ？」
「あ、相手の方も言わないとだめでしょうか？」
恥ずかしげに頬を両手で覆う翠蓮は、まさに恋する少女である。春蘭は即答した。
「うむ。名前は重要だ。特に、より詳しく知りたい場合は言わぬより言ってもらった方がいい」
〝名〟は占において重要なものだ。守り神や仙が持つ〝真名〟とはまた違ったものだが、人は名を得てはじめて完全な存在となる。
名を何度も変えようが、魂に刻まれるのはたった一つ。偽名であれば、違和感として占い手に伝わるくらいだ。

「言いたくなければ無理強いはせぬが」
「いいえ。そういうことならば……」
幾度かの深呼吸のあと、意を決したように翠蓮は口を開いた。
「韓楊秀様です」
「……ふむ」
告げられた知り合いの名に、春蘭は曖昧に頷いた。同姓同名の別人でなければ、鄭家によく肉饅頭を手土産に訪れる人物で間違いないだろう。
「春蘭もご存じの方ですから、恥ずかしくて……」
「しかし、いったいどこで見初めたのだ？」
花家の当主は、姉妹の伯父に当たる人物だ。高位の官吏と聞いているが、あくまでも文官である。部下を屋敷に招くことはあるだろうが、武官である楊秀とは接点がないように思える。かといって、外出を制限されている良家の子女が、道端で楊秀とばったり顔を合わせたとは考え難い。
そんな春蘭の疑問に答えたのは、玉翠だった。
「攫猿の騒動があったでしょう？　楊秀様が調査にいらした際に、伯父様に引き合わされたのよね」
「え、ええ」
当時のことを思い出したのか、翠蓮は心ここにあらずといった様子で頷いた。そんな姉を見て、玉翠は「一目惚れみたい」と春蘭に耳打ちする。
「ほう。引き合わされたのか」
わざわざ翠蓮を会わせるということは、花家の当主は楊秀を娘婿にと考えているのだろうか。確かに楊秀は若くして将軍職に就き、家柄もよい。婚姻を結ぶ相手としては申しぶんないはずだ。
しかし、つい先ほどの啓璋の言葉が引っ掛かる。彼は楊秀から、「花家から使者が来たら、なんでもいいから理由をつけて追い返せ」と、忠告されたと言っていた。花家と接点を持てば面倒事に巻き込まれる。距離を取れ、と。
そう忠告した楊秀もまた、花家にかかわるつもりがないのだとしたら、翠蓮の想いが成就するのは難

しいだろう。
「姉様は美人だから、きっと楊秀様も好意を持ってくれるはずよ！」
「そうかしら……」
翠蓮の双眸は期待に潤んでいるように見える。まあ、こればかりは実際に占ってみないことにはわからない。春蘭の予想に反して、二人が結ばれるという結果が出る可能性もある。
「さあ、春蘭！」
「うむ」
玉翠は、悪い結果が出るなどとは微塵も思っていないのだろう。嬉々とした眼差しを春蘭へ向けてくる。翠蓮は不安そうな、しかし期待の籠った色を表情に浮かべていた。
「占うのはかまわぬが、どのような結果が出ようとも、私はそれを正直に告げねばならぬ。それが翠蓮にとって好ましくないものだったとしてもだ」
「……はい」
翠蓮は頷くが、いまいち真剣みが感じられない。しょせん占いと、あまり深くは考えていないようだ。
「後悔はせぬか？」
無駄を承知で、確認するように訊ねる。答えはやはり同じものだった。
「では、占おう」
春蘭は盆に浮かぶ水神盤に手を翳した。玉翠は興味津々といった様子で、翠蓮は胸の前で祈るように手を握りながら見つめている。
ゆっくりと気を注ぐと、水神盤が動き始めた。小刻みに回転し、やがてぴたりと静止する。溝を浸食していた水も、ある一定のところで動きを止めた。八つの角が指し示す方向、そして、浮かび上がった文様を見て、春蘭は目を瞠った。
「……これは」
「ねぇ、春蘭。どうなの？　姉様は楊秀様と結婚できそう？」
玉翠が身を乗り出すようにして、矢継ぎ早に訊ね

てくる。しかし、春蘭は水神盤に浮かんだ文様に意識を奪われていた。

「これは初めてだ」

おそらく、名立たる占師たちの中でも、この卦を実際に目にできるのはほんの一握りの者だけだろう。春蘭自身、師である母親から、覚えておいて損はないと、一番に教えられた形でもある。

数ある瑞祥文の中でも、特にめでたいものには名が贈られる。春蘭は深い感動に浸りながら、それを口にした。

「〝天子吉文〟だ。翠蓮、ぬしは道が途切れることなく続けば、いずれ天子を産むだろう」

天子とは、天帝に代わり国を治める人間を指す。つまり〝皇帝〟だ。

歴史を辿れば、小さな邑に滞在した占師が一宿の礼にと、子供たちを占ったところ、五歳にもならぬ末娘に天子吉文が現れたという。だが、村の者たちは誰も信じはしなかった。

その十年後のこと。邑が野盗に襲われ、女子供が連れ去られるという出来事があった。邑長の陳述で近くの関所に駐屯していた警備兵が動き、攫われた者たちは無事に邑へと帰った。

野盗の棲み家から助け出された中にいたのがその末娘であり、警備兵を率いたのが皇帝の五番目の公子であった。

公子は末娘を見初め、自身の妻とした。そして、時が流れ、皇帝が没したことに端を発した帝位を巡る争いは、勝ち目は薄いとされた第五公子の勝利に終わった。

帝位に就いた公子は末娘を后妃と定め、その子を太子とした。末娘は自身の子が帝位を継ぐ前に亡くなったが、昔、邑に逗留した占師の言葉は真実であったと親しい者たちに語っていたそうだ。

また逆に、後宮に招かれた高名な占師が、どの妃が天子を産むかを占わされたところ、誰一人として天子吉文が現れる者はいなかったという。妃たちは

怒り、兵に占師を殺すようにと命じた。
その七年後、隣国の侵攻によって国は落ち、皇帝の血を継ぐ公子たちは一人残らず処刑されてしまった。我が子を殺された妃たちの胸には、自分らが命を奪った占師の顔が去来したという。
このように、天子吉文には様々な逸話が残されている。真名を奪われることがなかったら、目にすることはなかった文様である。その皮肉さに、春蘭は思わず苦笑した。
「あの、それはいったいどういう……」
困惑する翠蓮に、春蘭はさてどう説明したものかと頭を悩ませた。
「簡単に言えば、ぬしはいずれ皇帝となる子を産むということだ」
これには、さすがの姉妹も唖然とした表情を浮かべている。いきなり天子を産むと言われても、納得できる方がおかしいだろう。春蘭は言葉を選ぶようにして続けた。
「だが、天子吉文と合わせて妙な卦も出ている。これはぬしではなく、相手を意味する文様だな。その者の命が途絶えれば、ぬしは天子を産むことは叶わぬ」
「あの、ごめんなさい。話が飛びすぎて……結局、楊秀様とは幸せにはなれないのでしょうか？」
「ああ、そうだったな」
天子吉文という、あまりにも珍しい卦に春蘭も気付かぬうちに興奮していたようだ。
「ぬしが結ばれるべき相手は、楊秀ではない」
「そんな……」
「ど、どうして！　姉様ほどの美人なら、楊秀様だって了承するはずよ！」
落ち込む姉に代わり、玉翠が猛然と抗議した。確かに翠蓮は誰もが振り返るほどの美人だ。黄海楼の名立たる妓女たちにも、けっして引けを取らない。
だが、翠蓮が花家の子女である以上、そう簡単にことは運ばないはずだ。宮中の勢力構造は知らない

が、楊秀が花家を避けていることは事実である。もしも二人が恋仲になったとしても、楊秀にも背負うべき者たちがいる以上、すんなりとまとまることはない気がする。

「好き嫌いだけで、物事を決めることができぬ場合もある」

玉翠は不服そうだったが、翠蓮は思うところがあるらしい。寂しげに目を伏せ、「そうですね……」と呟いた。

「大丈夫よ、姉様。だって占いだもの。はずれることだってあるわよ」

これには、春蘭も苦笑いするしかなかった。

占師を前にして言うべき台詞ではないが、玉翠にしてみれば、春蘭の占の腕がどれほどのものかなどわかりはしないだろう。だから、簡単に〝はずれる〟などと口にできるのだ。

「楊秀様に振り向いてもらえるように、頑張ればいいのよ！」

「そうかしら……」

「伯父様にお願いすれば、きっとまたお屋敷に招いてくださるわ」

玉翠が、言葉を尽くして姉を励ましていた時だった。客室の戸の陰から、初老の男が姿を見せた。小柄であるが妙に威厳のある人物で、にこやかな表情にもかかわらず目だけが笑っていない。枯れ草色の袍は仕立てもよく、一目で位の高い者だということがわかる。

花家の当主にして、姉妹の伯父に当たる人物であった。興奏の姿に、玉翠と翠蓮は慌てて居住まいを正す。

「あの、伯父様、御用がおありでしたらお呼びくだされればよろしいのに」

緊張した様子で玉翠が問い掛ける。興奏は春蘭へと視線を向けた。

「お前たちの命の恩人が来ていると聞いてな。ぜひ挨拶でもと思ったんだよ」

命の恩人というのは、攫猿騒動の際、姉妹を助けたことを指しているのだろう。興奏も怪我を負ったはずだが、と春蘭は右肩を一瞥した。それに気付いた興奏が、笑みを深める。

「傷はもう癒えた」

「それはよかった」

妖から受けた傷は、治り難いという特徴がある。酷いものになると、患部から腐りはじめることもあった。興奏は手当がはやかったこともあり、傷の悪化は防げたようだ。

「ところで玉翠。髪が乱れておるぞ」

「えっ、嫌だっ」

玉翠は焦ったように髪に手をやる。確かに、簪の位置が初めよりずれているように見える。

「部屋に戻って直しておいで」

「そうします」

恥ずかしそうに俯いた玉翠は、伯父の前ということもあり、楚々とした雰囲気を壊さぬようにゆっくりと立ち上がった。

「翠蓮もついて行ってあげなさい。客人は戻るまでわしがお相手していよう」

「え、ですが……」

「翠蓮」

興奏の低い声に、翠蓮は不安げな視線を春蘭に送りながらも玉翠に付き添って客室を出て行った。二人の足音が消えたところで、興奏は春蘭の真向かいに腰を下ろした。

「これはなんという占具なのかね？」

水神盤へと視線を落とす興奏に、春蘭は咎めるような口調で告げた。

「当主たる者が立ち聞きとは、あまりよい趣味とは言えぬな」

「なぜ、そう思う？」

「これを見て、占具だと言い当てた者は一人しかいない。ぬしが博識であるとするよりも、立ち聞きしていたと考えた方が辻褄が合う」

そして、それ故に、わざわざ姉妹に席を外させたのだろう。そう指摘すると、興奏は楽しげな笑い声をあげた。

「話に入るきっかけが見つからなくてな」

「……そうか」

聞かれたところで、春蘭にしてみれば困るものでもない。ただ翠蓮が自分の想い人を伯父に知られてしまっただけで。

「君の占いはよく当たるのかね？」

「それを聞いてどうする？」

「自分の姪が天子を産むと言われて、気にならない者はいないと思うが」

興奏の瞳が妖しげに光る。

こうして言葉を交わすのは初めてだが、なかなかに油断のならない相手だ。

「ぬしは、翠蓮を楊秀に嫁がせたいのか？」

「質問に答えていないが……彼が娘婿になってくれたら心強いだろうが、まあ、どう足掻いてもむりだろう。韓将軍には、ここのところずっと避けられているからな。つまりは、そういうことだ」

「ふむ。では、わかっていて翠蓮を楊秀に会わせたのか？」

「万にひとつということもある」

春蘭にしてみれば、宮廷の勢力図に興味はない。なぜ、楊秀を味方に引き入れたいと思っているのかも知らないし、知りたいとも思わない。

ただ、それに利用される姉妹のことが気掛かりであった。

「翠蓮のことだが、玉翠ではだめなのかね？」

「どういう意味だ？」

「天子を産むという話だ。翠蓮でなければならぬのかい？」

春蘭は言葉の意味を吟味するように、脳内で反芻した。どうして、そこに玉翠の名が出てくるのか。

「……ふむ。玉翠を皇帝か太子に嫁がせる予定だったか」

春蘭の出した結論に、興奏は目を瞠った。別段、驚くような話ではない。姉妹それぞれを、優秀な人材を懐に抱え込むための餌と考えているならば、翠蓮だけでなく玉翠も楊秀と会わせるはずだ。どちらがより楊秀の気を引くかなど、興奏にわかりはしないのだから。

だが、楊秀に引き合わされたのは姉だけだった。さらに、先ほどの〝玉翠ではだめなのか〟という台詞が重要な意味を持つ。

興奏が后妃にと考えていたのは、翠蓮ではなく玉翠の方だったのだ。

「天子を産むのは翠蓮だ」

玉翠を占えば、また天子吉文が現れるかもしれない。短期間で皇帝が交替するようなことになれば、それもあり得る。

「では、玉翠のことも占ってくれるかい？」

「断る」

春蘭はきっぱりとした口調で、興奏の要求を撥ね付けた。

「玉翠はそれを望んではいない」

例えば、興奏が自身のことを占ってほしいというのならば、断ることはなかっただろう。しかし、伯父の願いとはいえ、勝手に玉翠の将来を〝視る〟ことはできなかった。

「占師の規律に反することはできぬ」

「ならば、玉翠が望めば占ってくれるのかな？」

「むろん、その際には応じよう。ただし、ぬしがなにを考えているのかは知らぬが、どう画策しようと翠蓮は天子を産む。ただ、夫となる人物が、現皇帝か、それとも太子かまではわからぬ」

唯一、夫となるべき人物の道が閉ざされれば、翠蓮が天子を産むことはないが、立ち聞きしていたのならばあえて言う必要もないだろう。そもそも翠蓮のための占である。多くをこの男に語る必要はない。

なにかを考え込むように押し黙った興奏の顔が、徐々に厳しさを増す。姉妹の幸せを願う春蘭として

は、翠蓮たちを政略結婚の道具として利用する興奏に苛立ちを感じる。名家ではよくあることだとしてもやはりいい気はしない。しかし、春蘭はあえて口出ししようとは思わなかった。

なにも知らない自分がどうこう言ったところで、興奏が考えを変えるわけがない。それに、翠蓮と玉翠もまた、自分たちが政治の道具にされるくらいの覚悟は持ち合わせているだろう。そうでなければ、卦を聞き終えた時の翠蓮の反応は違っていたはずだ。

やがて、髪型を直した玉翠が、翠蓮と共に戻ってきた。

「お待たせしてしまって、申しわけありませんでした」

玉翠は優雅な所作で、春蘭と興奏に向かい拱手する。その後ろでは、翠蓮が心配そうな眼差しを春蘭に向けていた。

伯父の行動になにかしらの意図を感じ取っていたのだ。

「では、わしはこれで失礼するよ。それと、翠蓮、玉翠。わしはしばらく屋敷を留守にする。家宰にはよく言っておくが、以前のように無断で外出することはならんぞ」

興奏の厳しい声に、姉妹は神妙な顔付きで頷いた。その後、興奏を見送った玉翠は大げさな溜息をつく。

「はぁ……緊張したぁ」

「玉翠は伯父殿が苦手なのか？」

「違うけど、なんかついつい緊張しちゃうのよね。伯父様は優しいけど、怒るととっても怖いから」

「それは、ぬしが怒らせるようなことをするからではないか？」

「うっ……そんなことないわよ」

椅子に腰を下ろした玉翠は、ぶつぶつと文句を言いながら円卓に頬杖をついた。それを翠蓮が「行儀が悪いわよ」と、やんわり窘める。

「ところで春蘭。伯父様になにか言われませんでしたか？」

「世間話をしていただけだ」
　春蘭はできるだけ素っ気なく答えた。翠蓮はまだなにか言いたそうであったが、それを玉翠の声が遮る。
「春蘭は伯父様と話していて緊張しなかったの？」
「そもそも、緊張すること自体が稀だ」
　通常は、自身よりも身分のある者を前にすれば、誰でも緊張を感じるだろう。だが、春蘭には身分の垣根がない。元々、守り神という人とは違う存在であったが故のことだ。
　たとえ華国の皇帝が目の前に立っていたとしても、春蘭は身構えることなく自然体で接するだろう。
「春蘭って怖いもの知らずね」
「そうか？」
　呆れたように言う玉翠に、春蘭は首を傾げた。その隣では、翠蓮も似たような表情を浮かべている。わざわざ説明するのも面倒なため、春蘭は姉妹からの評価を甘んじて受け取ったのだった。



右飛龍軍の詰所では、将軍位に就く男が、自身の机に積み上げられた報告書を難しげな顔で睨んでいた。

韓楊秀の精悍な顔には苦渋が滲み、目の下にはくまも浮き出ている。ここ数日はろくに寝ていないのだ、それも当然のことである。日々の鍛錬のお陰で体調に支障を来すことはないが、心は確実に荒れていた。

「また、増えたな」

目を通しても通しても切りがないそれは、ほぼ同じ内容で占められている。

――拡がりつつある病へ、対策を講じているのか。

――流言に惑わされた者が物資を買い占め、市場に並ぶ商品が軒並み価格をあげている。このままでは、餓死者が出かねない。

――罹患を恐れた貧民窟の住人たちが街に逃げ込み、治安が悪化している。怖ろしくて外にも出られない、等々。

市民の声を調べるために派遣した配下からの報告書は、どれも似たようなものだった。しかし、切実さがひしひしと伝わってくる。今のところ暴動に発展する気配はないようだが、このまま不満が燻り続ければどうなるかわからない。

「これでもまだ少ない方ですよ。種類は違いますが、紫宝宮の各部署では、朝廷に寄せられる請願書専用の房が設けられたそうです。それですら、すでに満杯という情報もありますが」

楊秀が目を通したものを手早く片付けるのは、副官の陸万里だった。年齢は楊秀と同じ二十七歳。神

経費そうな容貌にも、疲労の色が濃く浮き出ている。万里もまた、楊秀と同じように徹夜の日々を過ごしていた。

「龍乎からも応援の要請が来ています。官吏を通しても無駄だと思っているのか、直接こちらに請願書が束になって届きましたよ。ここに持ってこられても、結果は変わらないんですがね」

「……怒鳴り込まれるよりましか」

「動かなければ、いずれそうなるでしょう。うちに言われても、困るんですけどね」

万里の無情な言葉に、楊秀は頭を抱えて溜息をついた。

原因は、貧民窟で流行っている病にある。日を追うごとにそれは拡大し、今では貧民窟の外でも病人が出たという報告もあった。

――誰も口にしないが、これは〝疫〟だ。

ひとたび発生すれば、人の手による終息は極めて困難であり、多くの犠牲者を生む。その大半が、体の弱い子供や年寄り、貧民窟のような吹き溜まりで貧しい生活を送る者たちだ。

また、疫の発生は、日常生活にも混乱をもたらす。物価が上がったり、物が足りなくなったり、さらには治安の悪化など、数えあげれば切りがない。

今、なによりも問題なのは、疫への対応策がなにも決まっていないことだ。

通常ならば、疫の兆候が見えると、即座に対策を論じるための会議が催される。だが、官吏たちは誰もが消極的だ。自分の発言が採用され、責任者に抜擢されるのを恐れているのだろう。会議を開くだけで、具体的な案を挙げる者はいないそうだ。

「陛下の勅旨がなければ動けぬのは、やはり辛いものがあるな」

禁軍は皇帝の手であり、足である。だが、頭ではない。命令がなければ一歩も動くことのできない状況に、楊秀は苛立ちを覚え始めていた。

「まあ、我らが動いたところで、街の治安維持くら

いしか仕事はありませんよ」
「それでも、安心する者はいるだろう」
禁軍が動かなければ、人々は皇帝が自分たちを見捨てたと感じるだろう。少なくとも、義賊を名乗る猩猩緋がそれを見逃すとは思えない。無駄に人心を煽り、自分たちの活動範囲を広げようと画策するはずだ。実際、すでに猩猩緋が動き始めたという報告も寄せられている。
胸の奥から込み上げてくる不快感を堪えた楊秀は、椅子から立ち上がった。
「どこに行かれるのですか？」
「……花中書令に会ってくる」
「避けていたのでは？」
「緊急のことだ。派閥云々を論じている場合ではないだろう」
楊秀は、太子派と公子派の争いに、巻き込まれることを拒んでいた。韓家の当主としてこの先、ずっと中立の立場を貫き通すことは難しいとは思っているが、双方ともにできるだけかかわり合いになりたくないというのが本音である。
しかし、今はそんなことで躊躇っている場合ではない。
「止めはしませんが、くれぐれも用心してくださいね。花中書令は劣勢を覆すために、精力的に動いているんですから。これ幸いにと、攻め落としにかかるかもしれませんよ」
「身を以って知っている」
興奏は、ことあるごとに楊秀に接触し太子派への勧誘を続けている。その粘り強さには感心すら覚えるほどだ。
「前に、姪にも引き合わされた。嫁にどうかとまで言われたぞ」
「とうとう身内まで利用し始めましたか。花家の姉妹は美人だと評判ですよ。心を動かされなかったんですか？」
「美しいことは美しかったが、相手はまだ十五だ。

私にとっては子供も同じだな。むろん、その際は丁重に断った」

「ほほう。楊秀様は熟女好きですか」

にやにやと、意地の悪い笑みを浮かべる万里に、「馬鹿なことを言うな」と言い捨て、楊秀は部屋を出たのだった。

詰所を出た楊秀は、まっすぐに紫宝宮を目指した。時刻は夕暮れに差し掛かろうとしているが、疫の発生が懸念される今、要職に就く官吏たちは紫宝宮に詰めているはずだ。

花中書令が来ていないということは、さすがにないだろう。太子派の強化に躍起になっているきらいはあるが、自身の役目を蔑ろにするような人物ではない。

全省が集まる紫宝宮は、慌ただしく動き回る官吏たちで溢れていた。みな疲れたような表情で、それでも足を止めることなく行き来している。

磨き上げられた回廊を行けば、複数の視線が楊秀に向けられた。なぜ禁軍の将軍がここに、と訝しげな表情を浮かべる者もいれば、険しい顔をする者もいる。後者はおそらく公子派の人間だろう。楊秀が向かう先になにがあるのかを悟り、勘繰っているようだ。

「そのような時ではないだろう！」と、声を張りあげたい気持ちを抑え、楊秀はできるだけ早く目的地に辿り着けるよう、無心に足を動かした。

中書省が置かれているのは、紫宝宮の西側である。昼夜を問わず働く官吏たちのために、回廊の柱に設置された燭台の蠟燭には、すでに灯りが点されていた。

目前まで来て足を止めた。さすがに、なんの先触れもなく興奏の房を訪ねることは憚られる。わずかの躊躇のあと、楊秀はたまたま通り掛かった中書省の若い官吏を捕まえ、花中書令に右飛龍将軍がお会

いしたいと伝えるように頼む。

興奏が会議などで不在ならばそれまでだが、その場合は房で待たせてもらうつもりだった。どうせ詰所に戻ったところで、楊秀を待っているのはさらに増えた報告書の山だ。

一応、すべてに目を通すつもりではあったが、動きようがないのでは急いでも無意味だ。

回廊の隅でしばらく待っていれば、先ほど声をかけた官吏が楊秀に駆け寄ってきた。

「――花中書令がお会いするそうです。こちらにどうぞ」

若い官吏に案内されたのは、興奏が来客用に使用している私室であった。

以前、紫宝宮を歩いていた際、理由をつけて引っ張り込まれたことがある。あの手この手で繰り出される勧誘攻撃を、のらりくらりとかわしたが、かなり神経をすり減らされたものだ。

質のよい調度品が置かれた室内は、回廊と同様に灯りが点されていた。円卓にはすでに興奏の姿がある。楊秀の姿を見ると、歓迎するように椅子から立ち上がった。

「わしを訪ねて来るとは、珍しいこともあるものだ。どういう風の吹き回しかね？」

「お忙しいところ、まことに申しわけありません。花中書令にはお願いがあって参りました」

「ふむ。太子派に与するという申し出ならば、大歓迎なのだがな。その様子だと違うようだ」

人の悪い笑みを浮かべる興奏に、楊秀は苦笑した。しかし、ここで時間をかけることは得策ではない。花中書令が不在ならばまだしも、長々と居座っていては本気で誤解する者も出てくる恐れがあった。

ここまで気を遣わねばならぬのも面倒だ、と楊秀は内心で嘆息した。

「〝疫〟のことです。禁軍が動けるように、陛下に働きかけていただけませんか？」

「それはまた難しいことを。わしが陛下に嫌われて



いると知ったうえでの要求ならば、嫌味にもほどがあるぞ」

「中書省の長として、です」

興奏と皇帝は、昔から犬猿の仲である。皇帝沸儀が禁軍の将として活躍していた時期、興奏もまた中書省の若手として名声を轟かせていた。

しかし、二人はなにかと反りが合わぬようで、顔を合わせる度に見えない火花が散っていたと言われている。

それは沸儀が帝位に就いてからも同様で、日に日に対立は深まっていそうだ。もしも興奏が様々な業績を残さなかったら、五大夫のように廃されていたことだろう。

だが、今回ばかりはどうしても了承してもらわねばならない。楊秀には、他に頼る心当たりはなかった。

「龍乎からの請願書が禁軍に届きました。治安の維持には限界があると。すでに混乱に乗じて盗みや諍いが増えているところもあるようです。このままでは、華安の治安が乱れる一方です」

「だから、禁軍を動かせと？」

「全軍を投入する必要はありません。一軍でも充分です」

嫌な考え方ではあるが、大事なのは皇帝の命を受け禁軍が動いたという事実である。それに、一軍出るだけでも龍乎の負担は軽くなるだろう。

「ふうむ。だが、禁軍は最後の砦。そう簡単に陛下が許可を出すとは思えぬな」

「では、会議で有意義な策が出たのですか？」

楊秀の皮肉を、興奏は苦笑気味に受け流した。そして、ちょうどよく室内にやってきた官吏から、淹れたての茶を受け取る。

「さすがにこのままではまずいと、管侍中が意見をまとめている。近日中には、会議での成果が陛下に報告されるだろう」

「内容はご存じですか？」

「あれが、わしに漏らすわけなかろう」

憤然とする興奏に、門下省長官は公子派の筆頭に名を連ねていたことを思い出した。ここにも派閥争いが影を落としているようだ。

「有事の時こそ、一致団結するものではないのですか？」

「むりを言うな。水と油を混ぜても、一つにはならんだろう」

「我々は同じ人間です」

なぜわかり合えないのだ、と楊秀は怒りすら覚えた。外には疫や猩猩緋という敵がいるにもかかわらず、内では団結する気配すら見えない。内部分裂など、奴らの思う壺である。中には楊秀と同じように憂えている者もいるだろうが、派閥の対立を止めることはできない。

内乱の種を抱えながら外敵とも相対しなければならない現状で、さらに足許では疫が蔓延しつつある。最悪どころではない。

「同じ人間だからだろうな」

「花中書令」

「そう凄むな。わしとて、この状況を憂えている。だが、陛下に禁軍への勅旨を願うことはできん。諦めてくれ」

「なぜですか！」

「優先すべきは華安の治安ではなく、宮中の護りだからだ」

興奏の眼差しは、楊秀が思わず居住まいを正したくなるほど厳しいものだった。

「混乱に乗じて、不届き者が陛下のお命を狙うかもしれない。わしが嘆願したところで、けっして禁軍を宮中からお出しにはならないだろうよ。それになよからぬことを企んでいるのではと勘繰られても困る」

皇帝が、太子よりも生まれたばかりの公子に肩入れしているのは、宮中で働く者ならば誰もが知っている事実だ。故に太子派は不利な状況に置かれてい

る。

だが、その皇帝が万が一、身罷ったとしたら形勢は一気に太子派へと傾く。太子の人徳もさることながら、対抗相手の公子が一歳にも満たないからだ。

公子が帝位に就いた場合、間違いなく実母の黎貴妃が実権を握ることとなる。外戚がいないとはいえ、官吏たちはそれを面白くないと感じるはずだ。

「すまぬが、ぬしの力にはなれそうもない」

きっぱりとした拒絶に、楊秀は奥歯を噛み締めた。だが、同時に脳裏に閃くものもある。興奏が駄目ならば、もっと皇帝に近い場所にいる者に頼み込めばいいのだ。

幸い、楊秀は派閥に属さず中立を守っている。傍から見れば、職務に忠実な僕と映るだろう。

「いいえ。こちらこそ、ごむりを言って申しわけありませんでした」

礼を告げ、楊秀は足早に室を出た。向かう先は、管招達の居室である。

門下省は、主に、中書省が起草した詔勅や、臣下からの上奏文の審議を行っている。中書省、尚書省と並び、その権限はとても強い。

また、職掌柄、門下省と中書省の官吏たちは非常に仲が悪いことで有名であった。中書省が提出した詔勅を門下省が難癖をつけて却下すれば、その審議に異を唱え、短期間で決着がつかないことも少なくない。

もっともあまりごたごたが過ぎると、皇帝の不興を買ってしまうため、双方とも最終的には嫌々ながら手を携えることになるのだが。

面倒事を極力避けるために、配置される場所も紫宝宮の東と西に分けられ、回廊ですれ違うことのないようにと配慮すらされている。

たまに双方の官吏が乱闘を繰り広げ、仲裁のために警備の禁軍兵が駆り出されることもあるほどだ。

楊秀自身、幾度かその現場に居合わせたこともあった。いい歳をした大人たちの取っ組み合いは、見ていて情けないものがある。

中書省で花興奏に会い、その直後に門下省の管招達に面会を求めたという噂は、おそらく瞬く間に宮中に広まることだろう。

それを思うと頭が痛いが、それ以上に大切な問題なのだと自身に言い聞かせる。

先ほどと同じように、回廊を通り掛かった官吏を捕まえて招達に面会を求めれば、さほど待たされることなく客室に通された。

花中書令専用の客室は、見るからに高級な装飾品が室内を彩っていたが、管侍中専用の客室は驚くほど簡素だ。

間取りは変わらないが、中央に円卓と二脚の椅子が置かれただけで、室内を飾る掛け軸や衝立、花瓶の類は一切見られなかった。

華やかさを好む興奏と、質素を重んじる招達はまさに対照的な存在といえるだろう。

「――私を訪ねていらっしゃるとは、いったいどのような用件でしょうかな？」

神経質そうな声音に、楊秀は気を引き締めた。興奏と相対した際のある種の気安さは、こちらには微塵も存在しない。

椅子から立ち上がったのは、枯れ木のように痩せ細った初老の男である。上質な袍と門下省長官を示す冠が彼の地位の高さを表しているが、それ以外は特筆することのない凡庸な人物だ。

唯一、炯々とした眼だけが、ただ者ではない雰囲気を漂わせている。正直、長く顔を合わせていたい相手ではない。

「ご多忙の中、申しわけありません。実はお願いがあって参りました」

「私に？　それは珍しい」

楊秀に向けられた管招達の瞳が、訝しげに細められる。

勢力拡大に貪欲な興奏と違い、招達は自分から公子派に新しい人員を勧誘するということをしない。当然、楊秀と言葉を交わすのもこれが初めてのことだった。それ故に、なぜ楊秀が自分を頼ってきたのか、理由が思いつかずに困惑しているのだろう。

「この度の疫の発生について、禁軍へ勅旨を出していただけるよう、陛下にお口添え願いたいのです」

「禁軍は宮中の護りの要。まず動かすことは難しいでしょうな」

「一軍でかまわぬのです。街の治安は龍乎だけでは維持できません。攫猿の騒動の際も、陛下は禁軍を動かされたではありませんか」

「あれは短期的な問題だったからです。長期的な問題に発展する場合、一軍といえど、本来の職務から離れるのは好ましいとは言えませんぞ」

すんなり了承されるとは思っていなかったが、招達の反論は正鵠を射ているため、付け入る隙が見当たらない。だが、ここで諦めるわけにはいかなかった。

「疫への対応がまとまっていない今、せめて治安の悪化を防ぐべきです。むろん宮中の警護は重要ですが、万が一、暴徒と化した民衆が押し寄せてきた場合、陛下をお守りすることはできても多くの官吏たちに犠牲がでましょう。治安の正常化は急務であると自分は考えます」

民の不満を猩猩緋は見過ごさない。ここぞとばかりに人心を煽り、暴動を起こさせようとする可能性は高かった。

そうなってしまえば、騒ぎを収めるために禁軍に勅命が下り、本来、守るべき市民に刃を向けることになる。

楊秀の言葉を吟味するように聞いていた招達は、やがて神妙な顔付きで頷いた。

「確かに、一理はあります」

「ならば！」

「ですが、私から陛下に申しあげることはできませ

ん」

　招達の言葉に、楊秀は奥歯を噛み締めた。

　今度はいかなる理由かと、挑むような眼差しを向ける。

「この度の疫について、未だ対策がまとまっていないのはご存じでしょう。にもかかわらず、とりあえず禁軍を動かしてはいただけませんでしょうかとは、口が裂けても進言できません」

　自分にも立場というものがあるのだ、と招達は暗に匂わせた。

「そうですね……他の将軍方との、請願書を提出するという手もありますよ」

　招達の提案は、楊秀も一度は考えたものだ。

　しかし、将軍の中には、街の治安は龍乎に任せておけばいい、なぜ自分たちがそんなちっぽけな仕事に駆り出されなければならないのか、と考える者が多い。楊秀の意見に賛同してくれる者の方が少ないだろう。

　説得するにも時間と手間がかかりすぎ、ならばと興奏たちを頼ったのだ。

「……今の段階では、むりです」

　華安の治安が目に見えて悪化したら――もっと言ってしまえば、自分の屋敷がある界隈にも被害が及び始めたのなら、彼らもしかたなく楊秀の提案に応じるだろう。

　しかし、それでは手遅れなのだ。

「ああ、もう一つ別の方法がありますよ」

「教えていただけますか？」

　藁にもすがる思いで、楊秀は招達を見た。

「黎貴妃様にお願いするのです。皇帝陛下も、寵妃の進言ならば耳を貸すかもしれません。攫猿の騒動の際も、あの方のお口添えから陛下は禁軍を動かす決意をなさったようですから」

　黎貴妃、と楊秀は苦々しげに呟いた。

　黎貴妃は、傾国の美女と謳われる美貌で、後宮に入るなり皇帝の寵愛を独占した。昨年の終わりに

は男児を出産し、その地位を確固たるものにしている。

太子派、公子派で醜い闘争が行われているのも、黎貴妃が自らの子を太子にと望んだからだと言われている。

「……貴妃様には、すぐにお会いできますか？」

「もちろん。そうかからずに面会は叶いましょう。私の伝手で、後宮の方に話を通しておきましょうか？」

「よろしいのですか？」

「それくらいしか、私にできることはありませんので」

薄っすらと笑んだ招達の眼は、これは貸しだと語っていた。厄介な相手ではあるが、楊秀個人では後宮に繋ぎをつけることは難しい。むろん知人らを頼れば可能だが、それにはあまりにも時間がかかりすぎる。

「よろしくお願いいたします」

「では、子細が決まり次第、詰所の方に連絡をさしあげましょう」

大きな借りにならなければいいが、と楊秀は懸念を覚えながらも深く拱手するのだった。

黎貴妃への面会が叶ったのは、翌日の午後のことである。

右飛龍軍の詰所において、楊秀が相変わらず持ち込まれてくる請願書を捌いていると、不機嫌極まりない様子の万里が一通の書状を手にやってきた。また請願書かと思えば、そうではないらしい。

「まったく、あなたはどこでなにをなさってきたんですか」

「……意味がわからんぞ」

「どこをどうすれば、後宮の貴妃から文が届くのか。ぜひ教えていただきたいものですね」

あれほど気をつけるようにと言ったじゃないです

か、と万里の小言が続く。

手渡された書状を開いて見れば、微かに沈香の匂いが漂った。上質の紙に、流麗な文字で丁寧な言葉が綴られてある。急ぎだと告げていたおかげで、予想よりも早く面会は叶うようだ。

「出掛けて来る」

「お気をつけて。面倒事に巻き込まれたりしないでくださいよ」

「わかっている」

服装を改めるべきなのだろうが、今は時間が惜しい。それに、自分は文官ではない。武官として面会するのだから問題はないだろう、と楊秀は胸当てや籠手といった、簡素な武具を身につけたままの格好で向かうことにした。

後宮が位置するのは、紫玉宮の北である。男子禁制となっている後宮だが、身分のある妃であれば、臣下からの贈り物を受け取ったり、商人らと商談を行ったりという名目で謁見が許可されている。

しかし、直接顔を合わせることは許されていないため、御簾越しの対面で、場所も三方を塀で囲まれた庭先のような場所であることが多い。

楊秀が案内されたのもそのような所で、案内役の宦官より、玉砂利が敷かれた地面に跪いて待つようにと指示がなされた。これから面会するのは、側室といえども貴妃の位を持つ相手である。貴妃、華妃、麗妃、恵妃の四夫人は、正一品に当たり、位は楊秀の方が遥かに下だ。

禁軍の将といえど、楊秀は従三品だ。花中書令や管侍中ですら、正三品に留まる。大将軍となっても、最高位は従一品であり正一品には劣る。

そのような相手に嘆願するのだから、緊張しない方がおかしい。じっとりと汗が滲む掌を握り締め、楊秀はただひたすら待ち続けた。

しばらくして、御簾の中に人の気配を感じた。その手前に位置する石段に、屈強な宦官が二人配置される。

御簾の脇には貴妃の言葉を預かる宦官が膝をつき、その奥にもお付きの侍女たちが控えていることだろう。

大げさではあるが、これが商人相手であれば禁軍の兵士も加わり警備はより厳重なものとなる。

「――ご用件を」

御簾越しに聞こえた耳に心地よい声に、楊秀は思わず目を瞠った。側仕えの宦官が、黎貴妃の代理として喋るものだとばかり思っていたため、わずかに反応が遅れる。

「この度は、お目通りできたことを心からお礼申しあげます。禁軍右飛龍将軍、韓楊秀。不躾ながらお願いがあって参りました」

「私にできることであれば」

どうやら、悪感情は持たれていない様子だ。中立を唱えてはいるが、それを快く思わぬ者もいる。黎貴妃の心中は知らぬが、まずはわだかまりなく言葉を交わせることに楊秀は安堵の息を吐いた。

「黎貴妃様は、華安の都に流行りつつある疫についてご存じであられますか？」

「……噂は後宮にも届いております。亡くなられた方もいるそうですね」

知らないと言われることを覚悟していたので、楊秀は説明の手間が省けたことを単純に喜んだ。

「現在、疫が原因とみられる治安の悪化が報告されています。直に龍乎だけでは手に負えなくなるでしょう。しかし、未だ疫に対する策が取られる気配はありません。せめて治安を安定させるため、どうか陛下に禁軍を動かすよう、進言してはいただけないでしょうか」

これで断られたら八方塞がりだ。あとは、楊秀個人がこっそりと治安回復に協力する程度のことしかできない。

「……今後、疫がより拡がりを見せるとおっしゃるのですね？」

「はい」

実際に、貧民窟に端を発した疫は、日に日に拡大し続けている。貧民窟から避難した者たちの中にもすでに病に罹っている者がおり、逃げた先で発病するという報告もあった。そう遠からず、華安は元よりその外でも病人が相次ぐだろう。

「わかりました」

戻ってきた返答に、楊秀は思わず言葉を失った。興奏たちのように断られる可能性が高いと思っていただけに、こうまであっさり了承されるとは、まさに予想外である。

「陛下に聞いていただけるかはわかりませんが、言葉を尽くしてみましょう」

「――心より、お礼を申しあげます」

楊秀は深々と頭を垂れた。

寵妃である黎貴妃の言葉ならば、皇帝の心を動かせるかもしれない。むろん、徒労に終わることも覚悟している。皇帝が宮中の護りを優先させると言えばそれまでだ。

――だが、これで希望に道を繋ぐことができた。

楊秀の中で、黎貴妃に対する悪感情が少し薄れた。もちろん、がらりと変わったわけではない。

未だに中立の立場を貫く楊秀に、我が子を太子とするため少しでもよい印象を残しておきたいという打算がある可能性も高い。

昨日の招達の態度を見れば、彼から黎貴妃へなんらかの助言があってもおかしくはない。しかし、黎貴妃の声音には人を見下すような色合いは含まれていなかった。

万里に釘を刺されるまでもなく、取り込まれるつもりはない。ただ招達の時同様、これはまた借りが一つできたことになるのだろうな、と楊秀は気付かれぬように苦笑した。

謁見の終わりを告げる宦官の声が響く。楊秀は黎貴妃と女官が退出するまで、その場に留まらなければならない。

御簾越しに、ざわりざわりと人が動く気配。傾国

の美女とも謳われる黎貴妃の美貌とはいかほどのものか、楊秀の心にわずかな興味が湧いた。

——皇帝の寵を一身に受けるのだ、目も覚めるほどの美しさなのだろう。

楊秀は地面に跪いたまま、視線を御簾へと向けた。ここからでは、わずかに動く影を認識するしかできない。

しかし、楊秀の望みを聞き届けたかのように、一陣の風が庭先を走り抜けた。御簾が大きく揺れ、一瞬だけではあったが、楊秀の目に今まで隠されていた奥が映る。

ほっそりとした体軀に深紅の襦裙を纏い、結い上げられた艶やかな黒髪には、複数の細い金色の簪が挿されていた。

ちょうど椅子から立ち上がったところなのか、側仕えの侍女に手を支えられている。ひたりと自分に向けられていた視線は、わずかではあったが確かに一点で交わったように思う。

気付いた時には、御簾は元に戻っていた。

警備の宦官らが、貴妃たちがとうに退出したというのに微動だにしない楊秀を不審に思い、遠慮がちに声をかけてくる。それに、どう返答したのかは覚えていない。

気付けば右飛龍軍の詰所で、報告書に目を通していた。はっとして周囲を見回せば、副官の万里が気味の悪いものでも見るような眼差しを向けている。

「……楊秀様。詰所に戻る際、なにか悪いものでも食べたのですか？」

「なぜだ？」

「先ほどから声をかけていたのですが……報告書が上下逆さになっていますよ」

指摘を受けてみれば、確かに手にしていた書類は逆さまになっていた。

「心をどこかに忘れてきてしまったのかと思いましたよ」

「そうか……」

忘れてきたというよりは、置いてきてしまったという方が正しいのかもしれない。

美しい人だった。それ以外の言葉が思いつかぬほどに。

憂いを帯びた瞳が、一瞬だけわずかに見開かれたのを覚えている。紅をさした唇は花びらのようであり、驚くほど滑らかな肌は、降り積もった新雪のように白く輝いていた。

「楊秀様？　本当に、変なものを食べませんでしたか？」

訝しげな万里の声。だが、耳に残るのは、甘い響きを含んだ声音。思い出すだけで、胸に切ない痛みが走る。

「医師を呼びましょうか？」

「いらん。薬では治りそうにない」

「……頭でも打ちました？」

本格的に心配し始めた万里を他所に、楊秀は深い溜息をついた。胸に芽生えたこの想いがなんであれ、報われないことだけは確かだった。

西離宮の一室で、寝衣に着替えながら、黎貴妃は昼間のことをぼんやりと反芻していた。

招達から至急の書状を受け取ったのは、今朝のことだ。何事かと開けば、禁軍の将が自分に面会を求めているとのことで、当人の詳しい情報がしたためられていた。

なによりも黎貴妃が注目したのは、韓将軍が中立の立場にいることである。花中書令と親しい間柄にあるが、だからといって太子派に与するわけではないらしい。

書状には、公子派に引き入れたとしても裏切る可能性があるため、必要以上にかかわらぬこと、でも、恩を売っておくのもよいだろうなどと、丁寧な文字で書き連ねてあった。

招達は、皇帝沸儀の忠実な僕である。沸儀が公子

を支持しているがために、黎貴妃の味方のような立場にある。だが、そこに信頼関係は一切ない。

この書状も頭から鵜呑みにすることは危険であり、黎貴妃は自身の目で韓楊秀という人物を判断することにした。

御簾で仕切られた謁見の場には、一軍を預かるにしてはいささか若い男性が待っていた。よほど実力に恵まれているのか、他に適当な者がいなかったのか——武官を多く輩出した名家の出であるということも理由の一つだろう。

御簾越しに相対した将軍からは、心から華安の行く末を憂えていることが伝わってきた。真っ直ぐな心根に触れ、彼がなぜ中立の立場を取り続けているのかわかる気がした。

あくまでも彼は武官なのだ。

沸儀を守ることを第一とし、次に華安の安寧を願っている。いずれ太子派と公子派のどちらかに与しなければならなくなるまで、彼は中立の立場を貫くだろう。

こういう芯の通った人物は、一度味方となればけっして裏切ることはない。招達には忠告を受けていたが、叶うならば公子派に引き入れて——自分の味方となってほしかった。

だが、実直な彼の性格を考えれば、それも難しい。ならば、招達の言うように貸しをつくっておいた方がいいだろう。通常ならば断る皇帝への嘆願も、黎貴妃は迷うことなく頷いた。

しかし、了承したあとで思い悩む自分もいる。疫が拡がれば、当然、世は乱れるだろう。自身を見捨てた世間に〝復讐〟するまたとない機会ではないか、と甘く囁く声がある。

復讐の一環として、皇帝の血を引かぬ我が子を太子にと望んだ。脈々と受け継がれてきた血を誰にも知れぬように絶つことに、仄暗い喜びを感じている。

その半面、疫に苦しむ民衆を哀れに思う心も存在した。自分にまだそんな感情が残っていたのかと驚

いたが、胸が痛んだのも事実だった。

憎しみは永遠に続くものではないのだろうか。むろん、自身を攫った攫猿や、後宮へと献上した邑人たち、愛してもいない男に抱かれることに対する怒りはある。自分が、もう後戻りできぬところまで来たという実感も。

それでもやはり、疫によって悪化し続ける華安を憂う韓将軍の気持ちは、痛いほど理解できたのだ。恩を売る云々以前に、彼の力となりたいと考えている自分がいた。

なぜそう思うのかはわからない。だが、御簾が風に揺れた時、なんの隔たりもなく交わった視線に心が震えたのは確かだった。

「……でも、陛下にどうお願いすれば聞き届けてもらえるかしら」

呟いた言葉は、女官を下がらせたため誰に届くこともなく消える。攫猿の騒動の際は、泣きついただけで禁軍を動かすことに成功した。

女官や宦官らは、さすが寵妃だと黎貴妃を持て囃したが、自身の進言がなくとも沸儀は元々そういうつもりだったのではないかと感じていた。たまたま自分の嘆願の直後に命令が下されただけだと考えれば、今回は方法を変えねばならない。

疫に対する脅えだけでなく、後宮にも拡がるのではないかという危惧。そして、しつこくない程度に塞ぎ込む素振りを見せれば、沸儀の心は少しくらいこちらに傾くかもしれない。

内々に招達にも書状を送り、華安の治安について仄めかしてもらうのもよい手だ。なにも禁軍全体を動かすわけではない。攫猿の騒動と同じ、勅旨が出されるのはごく一部だろう。

やがて、西離宮に主上の渡りを告げる女官の声が響く。人払いを命じておいた室内に、慌ただしく姿を現した侍女たちが、当然のように黎貴妃の寝衣を手早く整えた。

「とてもおきれいですわ」

機嫌を取ろうと、わざとらしい声をあげる侍女。それに追従するように、他の女たちも口々に黎貴妃の美しさを褒め称える。

それがいつもの光景だ。誰もが権力の恩恵に与ろうと、黎貴妃に近付いてくる。そうする以外に術がないことも知っているが、だからといって気分のよいものではない。

黎貴妃は気持ちを落ち着かせるために、室内に漂う沈香の匂いを意識した。回廊をゆっくりとこちらへ向かってくる足音が響く。誰かが、それを聞く度に胸が弾むのだと言っていた。自分にとっては胸が躍るどころか、単なる苦痛でしかない。

沸儀の来訪は寵愛が続いていることを示すためにも必要だが、たまには他所に通ってもらいたいという気持ちもある。

しょせん、自分も侍女たちと同じだ。主の機嫌を取るために、偽りの笑みを浮かべ、心にもない言葉を紡がねばならない。

房室に姿を現した沸儀に、黎貴妃は恥じらうように頬を染めて見せた。心中では、嘲るような冷笑を浮かべながら——。



黄海楼からの、迎えの俥が来たと告げにきたのは友寧だった。

準備を整えていた春蘭は、先ほどまでぐずっていた白雪を竹筒に入れ、きっちりと蓋を閉める。早く隷属してやれるといいのだが、そのためには真名を取り戻すことが最優先だった。

「……今日もまた妓楼に泊まるの？」

おずおずとした態度で口を開いた友寧は、春蘭に視線を向けたり、逸らしたりを繰り返している。

「わからぬが、そうなるやもしれぬ」

「あのね、余計なお世話かもしれないんだけど……旦那様となにかあった？」

「……」

ぴくり、と春蘭は肩を揺らした。鄭家の少年たちに直接訊かれるのが初めてだったせいもあり、思わず言葉に詰まる。なにかあったのかと問われれば、答えは「なかった」と返すしかない。

実際、なにがあったわけではない。ただ今まで通り接すればいいのに、なぜかそれができない。どんな事情があろうとも、春蘭は己の感情を殺して鄭家に留まらなければならない。わかっている。わかってはいるのだが、理由をつけて妓楼に留まろうとする自身を止めることができなかった。

「……旦那様が、知らない間に春蘭を怒らせるようなことを言っちゃったとか？　尊敬できる方ではあるんだけど、ほら、ええと、ちょっと配慮に欠けるところがあるというか。で、でも、悪気があったわけじゃないと思うんだ！」

「妓楼に泊まるのは遅くまで仕事があるせいで、

仲望を避けているわけではない。友寧の思い過ごしだろう」

「ううっ。でも、この間から一度も旦那様のお部屋に行ってないよね？」

鋭い指摘に、春蘭は口を閉じた。確かにあれから一度も仲望の房室を訪ねてはいない。自分でも薄々気付いてはいるのだが、いざ言葉にされると否定し辛いものがある。

「その……旦那様もどこか元気がなくて。きっと春蘭のことを、気に病んでるんじゃないかな。だから一度きちんと話し合って、誤解を解いた方がいいと思うんだ」

「元気がないのは、怪我のせいだろう」

「怪我はだいぶ治ったんだよ。昨日だって、春蘭が出掛けたあとで中庭の方でゆっくりしていらしたし。夜になったらようやく平熱に下がって――」

なおも言い募ろうとした友寧を、春蘭は強引に遮った。

「俥を待たせているのであろう？　用事がそれだけならば、私は行くぞ」

「春蘭！」

「……しばらく黄海楼に泊まる。私のことは気にするな」

友寧の瞳に翳りが生じた。

だが、今の春蘭には相手を気遣う余裕がない。足早に門へと向かい、横付けしてあった俥に飛び乗った。

「出してくれ」

顔見知りとなった御者が手綱を引く。

これが逃げだという自覚はあった。だが、どうしても仲望と顔を合わせる気にはなれない。そもそも、さっさと玄楽が姿を現さないから、こんなことになったのだ。

真名さえ取り戻すことができれば、鄭家に用はない。春蘭は守り神として守護する邑へと戻ることができる。

「鄭玄楽。ぬしは、いつまで私を待たせる気なのだ……」

俥に揺られながら、春蘭は誰にともなく呟いたのだった。

黄海楼の裏門から見習い部屋へと向かえば、途中で顔見知りの門番が春蘭を出迎えてくれた。

「お、今日はまだきれいになってないんだな」

「着替えはこれからだ。ぬしこそ、今日は誰も引き摺っておらぬのだな」

蘇啓（そけい）は苦笑して、春蘭の頭をぽんぽんと叩いた。

「うちじゃあ、ああいうことは滅多にねぇよ。たいていは、話せばわかってくれるお客様ばっかりだ」

「ぬしが言うと、なにやら物騒に聞こえるな」

凶悪な笑みに春蘭は嘆息した。俥に揺られている間もずっと落ち込んでいた気持ちが、ようやく浮上してくる。

「おっとそうだ。わざわざ忠告するほどでもねぇが、花街（はなまち）でも治安が悪いとこには間違っても行くんじゃねぇぞ」

「なぜだ？」

「こないだ楼主様が言ってただろ。貧民窟で悪い病が流行ってるって。そっから逃げ出してきた奴らが、最近この辺りでたむろしてんだよ。金目のものを狙って、安い妓楼に押し入る奴らもいるそうだ」

春蘭を脅すために、蘇啓はわざと大げさな身振り手振りを交えているようだった。確かに、その物騒な話を聞いて、わざわざ外へ出る酔狂者もいないだろう。

「わかった。妓楼から出ねばいいのだな？」

「おう。それに、流行り病までこっちにきちまったみたいだしな」

「……もう、病人が出たのか」

春蘭は蘇啓の言葉に眉を寄せた。いずれ花街でも流行るだろうと予測はしていたが、あまりにも早す

ぎる。

「ぬしも気をつけるのだぞ」

「俺は生まれてからこのかた、一度も病気に罹ったことがねぇからな。心配はいらねぇよ」

力強い笑い声を回廊に響かせながら、蘇啓は去って行った。わざわざ春蘭を引き止めて忠告してくれるあたり、意外とお節介焼きなのかもしれない。他の妓楼はわからないが、黄海楼にはそういった者たちが少なくなかった。「決して見捨てない」と言った蟬英（せんえい）の姿勢が伝わっているのだろう。

見習い部屋には、ひとり琴の練習に励む祥琳（しょうりん）の姿があった。

「なんだ、ぬし一人か」

「うん。みんな出払ってるの」

祥琳はやることがないので、琴の練習をしていたそうだ。だが、なぜか心ここにあらずといった様子で、演奏の手を止めては溜息を挟んでいる。

「なにか、悩みごとか？」

「えっ、どうして？」

「深刻そうに溜息をつかれては、気付かぬ方が難しい」

「そ、そっか……」

恥ずかしげに頬を染めた祥琳は、琴に手を置きながら口を開いた。

「……あのね、花街にも病に罹った人が出たんだって」

「ああ。私も先ほど蘇啓に聞いたぞ」

「だから、ちょっと不安になって」

「それだけか？」

春蘭に問われ、祥琳は言葉に詰まった様子だった。畳みかけるように続ける。

「大広間で、楼主の話を聞いた時から様子がおかしかった。他にも気になっていることがあるのではないか？」

祥琳の瞳が戸惑うように揺れる。固く引き結ばれた唇が、ほんのわずかに揺れた。

「……」
「話したくないのならば聞かぬが」
「……春蘭って、強引そうに見えて消極的だよね」
「そうか？」
「そこまでわかってるなら、普通は話してみろって言うよ」
祥琳は言いながら口元を綻ばせた。だが、瞳に宿る色は未だに憂いを帯びていて、またすぐに気遣わしげに眉が寄せられた。
「心配したって、どうしようもないことなんだけどね。……実は、貧民窟に知っている人がいるかもしれないの」
ああ、それでか、と春蘭は納得した。
祥琳は、貧民窟にいる知人のことが気掛かりだったようだ。
「もしかしたら、働く場所を見つけて貧民窟にはいないかもしれない、きっとそうに違いないって自分に言い聞かせてるんだけど……ほら、私って心配性だから不安になっちゃうの。それにね、さっき言ったことも本当だよ。私も病に罹っちゃうんじゃないかって。死にたくないなぁって、つい考えちゃうんだ」
「祥琳……」
春蘭は祥琳の背後に回ると、その背にくっついた。抱き締めるように手を回し、顔を押しつける。自分の体を覆っている神気が、少しでも祥琳に移ればいいのにと思いながら。
「春蘭？」
病は疫となり、華安を覆い尽くすだろう。
あの時、水神盤に現れた文様は、あまりにも禍々しいものだった。人がどれほど足掻こうとも、あれを阻止することはできない。
止められるとすれば、それは――。
「ありがとう、春蘭」
「……礼を言われるようなことなどしていないぞ」
「私の話を聞いてくれたでしょ。悩みは解決しなく

ても、誰かに話すことで気持ちが晴れることもあるんだよ」

くすくす、と祥琳は鈴を転がしたような笑い声をあげる。

「春蘭も悩みごとがあったら言ってね。話を聞くだけはできるから」

「ふむ……」

春蘭の脳裏に浮かんだのは、仲望とのことだった。自分が彼に抱いている感情の正体がなんなのか、気にならないといえば嘘になる。それに、このようなことを相談できる相手も限られていた。

「ないこともない」

「えっ、本当に？　あの、私でよければ相談に乗るよ？」

少し興奮気味の祥琳だったが、こちらに向けられる瞳は真剣そのものだ。それに押されるようにして、春蘭は口を開いた。

「実はだな、とある人物を目の前にすると、胸が痛むのだ」

春蘭の言葉に、なぜか祥琳はぴしりと体を強張らせた。

「……それはどんな風に？」

「うむ。痛いというよりは、苦しいといった方が正しいだろうか。顔を合わせ辛くて、つい逃げ出してしまうのだ」

きっかけは、仲望の一言だったように思う。

〝――兄は理由もなくそんなことをするような人ではない〟

それは、なぜか春蘭に深い衝撃をもたらした。以来、なにかと仲望を避けるようになってしまい、たまたま顔を合わせてもあの有様だ。

自分で自分を操作できないなどはじめてで、さすがの春蘭も、これには戸惑いを隠し切れなかった。

「春蘭、それは……」

「それは？」

「恋よ！」

「……池で泳いでいるあれか」
「こんな時に冗談なんて言わないでよ！」
やたら目を輝かせた祥琳は、春蘭の手を握り締めた。
「春蘭は、その人のことが好きなのよ」
これはまた見当違いの答えが返ってきたものだと、春蘭は唖然とした。仲望という人物を好きか嫌いかで判断すれば、確かに好きという分類に入る。怠け者ではあるが、人間的に嫌うほどではない。
「まあ、確かに嫌いではないが……」
「違うの。そういうことじゃなくて、恋愛的な意味での〝好き〟だよ！」
「……は？」
祥琳の言っている意味をようやく理解した春蘭は、片手で額を押さえた。なぜ、そこに行き着くのかがまったく理解できない。断言してもいいが、自分が仲望に抱いている感情は、男女間での好意とはまったく別物だ。
「自分でも気付かないうちに好きになってるなんて、よくあることじゃない」
「いや、祥琳はそうかもしれぬが、私は……」
「だって春蘭は、胸が苦しいんでしょう？　それに顔を合わせるのが恥ずかしいって、もう絶対に間違いないよ！」
恥ずかしいと言った記憶はないのだが、それを訂正したところで興奮し切っている祥琳には届きそうもない。仲望に対し、そんな甘い感情は一切ないと断言できるのだが……。
「認めちゃえば楽になるよ。それで、どんな人なの？　年齢は？　年上？」
立て続けに質問が飛んでくる。祥琳が、楊秀（ようしゅう）並みに思い込みの激しい性格だったとは。
「……ところで祥琳。そろそろ仕事に向かいたいのだが」
「あ、そうだね！　急いで着替えなきゃ」
着付けはまだしも、化粧や髪結いに慣れていない

春蘭は、いつも祥琳に手伝ってもらい装いを整えていた。慌ただしく立ち上がった祥琳に、春蘭は内心でほっと安堵の息を吐く。

とりあえず、これで当座の追及からは逃れられるだろう。問題は今夜だ。祥琳は嬉々として、春蘭に様々な質問を向けてくるだろう。それを思えば、今日は帰らぬと言って出てきた鄭家に戻りたい気持ちにもなった。

「今日はうんと可愛くするね！」

なぜだ……。

意味がわからぬまま、恋する乙女とされてしまった春蘭は頭を抱えるのだった。

「それで、なぜぬしはこうも私の仕事を邪魔するのだ」

祥琳の勘違い事件も尾を引いて、不機嫌を隠しもせずに相手を睨みつければ、春蘭のすぐ傍で満面に笑みをたたえていた男、呂翰栄は心外だといわんばかりの表情を浮かべた。

「私だって立派な客だよ？」

「私は占師として雇われているのであって、妓女ではない。なぜ、ぬしに酒を注がねばならぬのだ」

春蘭の目の前で杯を飲み干すのは、さして特徴のない平凡な男だった。年齢は聞いたことはないが、二十代半ばほどだろう。

高級な茶葉を取り扱う店に居候している身にもかかわらず、妓楼にふらりとやってきては楼主である蟬英を指名する謎の人物である。

とある理由で翰栄と知り合いになった春蘭は、妙に気に入られてしまい、占師秋菊の正体を秘密にする代わりに妓楼に来た際の同席を命じられていた。

「まあ、いいじゃないか」

「いいわけがあるか」

蟬英にくれぐれも粗相のないようにと念押しされている手前、あまり邪険にすることもできない。嫌

いというよりは苦手な相手である。
「美女を前にして飲む酒は格別なんだよ」
「ならば、私ではなく正真正銘の美女を侍らすのだな」
「謙遜しなくてもいいのに。ほら、春蘭も食べるといい。足りなかったら、どんどん注文していいからね」
上機嫌に杯を干す翰栄は、姿焼きの魚や、蒸した鶏肉を薄切りにして様々な具を挟んだ一品など、彩り豊かな料理が並べられた御膳の前に春蘭を座らせる。
「もう私の腹には、なにも入る隙間はないぞ」
「そんなこと言ってー、ぜんぜん食べてないじゃないか。好き嫌いを言ってると、私のお嫁さんにしてしまうよー」
「なぜそうなる」
酔っ払いの相手ほど面倒なものはない。これは蘇啓に助けを求めるべきなのか、と春蘭は凶悪な人相の門番を連想した。
しかし、今日の翰栄はあまりにも浮かれ過ぎのように思う。文句を言いながらしばらく観察していた春蘭は、やがてある結論に辿り着いた。
「ふむ。これが自棄酒というものか」
「しゅんらん？」
「面白くないことがあったからといって、酒に逃げるのはどうかと思うが。ぬしはそれで気が晴れるような性格でもないだろう」
春蘭自身、仲望から逃げている手前、あまり強くは言えないが、それでも翰栄の乱れ具合は酷いものがある。
これでは、席を外した蟬英が戻って来る前に潰れてしまうだろう。
「食事をすべきなのは私ではなくてぬしの方だ。先ほどから、酒しか口にしていないではないか。だから酔いが回るのも早いのだ」
「……春蘭は容赦ないよね。痛いところを遠慮なく

抉ってくる」

「酔った振りをして絡んでくる男よりは、だいぶましだと思うが」

「すごいね……追撃も的確だよ」

ぱたりと仰向けに倒れた翰栄は、虚ろな眼差しを天井へと向けた。そこには先ほどまでの上機嫌は見られない。

「なにもできず、じっとしているしかない自分が不甲斐なくて、ね。自分は、もう少しできる男だと思ってたんだけどなぁ」

告げられた言葉に、春蘭は返す言葉を持ち合わせてはいなかった。

それはそのまま春蘭にも当てはまる。真名を取り戻したい気持ちばかりが先走り、力を失った自分の無力さに打ちひしがれることもあった。

「……待つしかない時は、どう足掻いたところでそれ以外にできることはない。堪えることも、また重要だ」

「いつも思うけど、春蘭は老成してるよね」

「大人だと言え」

「ごめんね。さすがに今のは、女の子に言うべき表現じゃなかったかも」

翰栄でも悩んだり、迷ったりすることがあるのかと、春蘭は物珍しく見つめた。ついでに思ったことをそのまま告げれば、乾いた笑い声があがる。

「私だってね、落ち込むことくらいあるよ」

「なにをそれほど気に病んでいるのだ？」

祥琳の、「春蘭って、強引そうに見えて消極的だよね」という台詞を思い出した春蘭は、試しにそう訊ねてみた。

「うーん、秘密。お嫁さんになってくれるなら話してもいいけど」

「ならば聞かぬままでいい」

「そこは訊こうよ。お嫁さんになってあげるから教えてって、ちょっと恥じらいながら上目遣いで訊こうよ」

「変態め」
やはり、蘇啓を呼ぶべきだろうか。不満げに抗議する翰栄に辟易していると、ようやく席を外していた蟬英が房室へと戻ってきた。
「蟬英、春蘭が酷いんだよ」
「蟬英、翰栄が気持ち悪い」
互いに互いを訴えれば、蟬英が困ったように微笑んだ。そして、翰栄の側に膝をつく。
「翰栄様。お迎えの方がお見えになっておりますよ」
終刻の鐘が鳴るには、まだ間があった。迎えという言葉に、一瞬訝しげな表情を浮かべた翰栄だったが、蟬英に助け起こされ、ふらふらとした足取りで立ち上がる。
「春蘭。あなたもお見送りするのよ」
「……わかった」
蟬英に支えられながら歩く翰栄は、やはりなにかに気を取られているようで、いつもと違った印象を受ける。
翰栄という男のことをそれほど深く知っているわけではないが、酒に逃げるような性格ではないように思う。いったいなにがあったのだろうか。
「あーあ、今日は春蘭ともっとお話できると思ってたのになぁ」
「ぜひまたのお越しをお待ちしておりますわ」
満面の笑みで告げた蟬英は、あんたも喋るんだよ、というような視線を春蘭に向けてくる。ここで無言を貫き通しても、ろくなことにはならないだろう。
「次は、もう少しましな顔になってから来い」
蟬英の視線が強まるが、春蘭は気にせずに続けた。
「ぬしは、気楽に笑っている方が似合うぞ」
「……はじめて言われたよ、そんなこと」
困惑するように笑った翰栄は、春蘭の髪飾りに気をつけるようにしてその頭を撫でた。
「ねぇ、春蘭。本当に私のとこに来ないかい？」
「むりだな」

「お嫁さんじゃなくてもいいから」

いつもとは違う、翰栄の真剣な眼差しに春蘭は首を傾げた。なぜ、そこまでして翰栄は自分を欲しがるのだろうか。疑問が口から出掛かったが、理由を聞いたところでどうすることもできない。春蘭は、「むりだ」と、言葉を繰り返すしかなかった。

「そっか……残念だなぁ」

がっくりと肩を落とす翰栄に、「そろそろよろしいですか？」と声をかける者がいた。

迎えにきたというのは、翰栄が世話になっている茶房の主人だった。年齢は四十過ぎで、柔和な顔立ちが印象的な人物である。酔いのせいで足腰が立たなくなっている翰栄を支え、黄海楼の前に横付けした俥に乗り込む。

「それでは翰栄様。お気をつけてお帰りくださいね」

「うん。君も頑張ってね」

それはなにに対する励ましの言葉なのかはわからなかったが、蟬英は表情を引き締め頷いた。

「じゃあね、春蘭」

「うむ」

お世話になりました、という茶房主人の言葉を残し、俥は花街界隈を離れて行った。それを見送った春蘭が黄海楼へと戻ろうとした時、蟬英の手が引き止めるように肩を摑んだ。

やはり、お客様（翰栄）への態度がまずかったのだろう。叱責を受ける覚悟を決めた春蘭に、体を屈めた蟬英は素早く耳打ちした。

「――うちにも病人が出た」

「まことか？」

「妓女が一人。それと……もしかしたら下働きの者にも」

蟬英の顔が苦しげに歪められる。春蘭の脳裏に、不安げに微笑む祥琳の顔が過った。



――なぜ、自分がこんな目に遭わなければならないのか。

それは、紅燕が妓楼に売られてきた時からずっと思っていることだった。

紅燕の生家は、多くの文官を輩出した名家だった。一人娘である紅燕は、掌中の珠のごとく大切に育てられ、良家の子女としてどこに嫁いでも恥ずかしくないように最良の教育を受けた。太子の后妃にという話もあったほどだ。

紅燕に、自分は恵まれているという自覚はなかった。裕福な暮らしができて当然であり、それが永遠に続くものだと信じていた。

けれど、幸福な生活は突然に終わりを告げた。官吏だった父親の横領が発覚し、屋敷や土地をすべて召し上げられてしまったのだ。それでも借金は残り、紅燕は妓楼に売られることとなった。

黄海楼に買われたことを、事情を知る者は口々に幸運だと言う。安い妓楼の妓女とは違い、望まぬ限り夜伽をする必要もない。

一流の妓女と称えられ、誰もが羨む地位にいる紅燕だったが、根っ子に巣食う貴族としての矜持がそれを潔しとしなかった。

苦労して身につけた教養と、幼い頃から練習し続けた楽は、妓女になるためのものではない。いくら名娼妓と持て囃されようと、心が晴れることは一度としてなかった。

なによりも紅燕の自尊心を傷付けたのは、楼主の存在である。

様々な分野に秀で、一つ一つの所作にすら匂うような気品が感じられた。人目を惹く華やかな容貌。肉感的でありながら、柳腰の如く細っそりとした肢体。

比べれば比べるほど、自分が劣る存在であると見せつけられているようで辛かった。

「妓女はどんな時も誇り高くありな。たとえ死ぬ間際だって、弱さを見せるんじゃないよ」

それは、紅燕が客の不興を買ってなお、下手に出ることなく凛とした態度を貫き通した際に、蟬英が告げた言葉である。むろん、客を怒らせたことをこっ酷く叱られたあとでのものだ。

当然だ。自分に残されたのは、他ならぬ〝誇り〟以外にはないのだから。いつしかその言葉は、妓女に身を落としてもなお、自分は特別であると自身に言い聞かせ続けた、紅燕の拠り所となっていた。

――だから、誰にも弱さを見せたくはなかった。数日前から感じていた体の不調も、時折痛む腹も、きっと気のせいだと自分に言い聞かせた。

それなのに……。

「紅燕！」

焼けつくような痛みを、腹部に感じた。せり上がってくる嘔吐感を堪えることができない。焦ったように自分の名を叫ぶのは、ずっと憎んできた女だった。

触るな、と叫んだはずの声は、言葉にならずに掠れて消えた。

誰もが悲鳴をあげて離れていく中、あの女だけが自分を抱き締めるように支えてくれた。ざわめきがうるさい。

「病だ……」「うちの妓楼にも……」「どうして」「どこのどいつにうつされたんだっ」――怒りと恐れが入り交じったような声が響く。責めるようなそれに、紅燕は怯えながらも自分のせいではないと叫びたかった。

「うるさいよ！　ぎゃあぎゃあ騒いでる暇があるんだったら、病人のために部屋を用意しなっ！」

唯一、自分を責めない蟬英に、紅燕は朦朧とする意識の中で苛立っていた。

なぜ、この女はここまで強くあれるのか。

普通は、病に倒れた妓女など、どれほどの名妓であっても見捨てるだろう。花街という華やかではあるが地獄のようなそこで、なぜこうも凛と美しくあれるのか。

無意識に伸ばした手を包んでくれたのは、いったい誰の掌だったか。

徐々に霞み始める視界。

紅燕は自嘲するように微かに笑ったあと、自ら瞼を閉じた。

病に罹ったのは、紅燕だった。下働きの中にも不調を訴える者が出たらしいが、そちらは症状が軽度のこともあり、感染と判断するのは微妙だと蟬英は言う。

客に騒動が伝わらないように、妓女たちは終始にこやかな笑みを浮かべている。だが、ひとたび西側の楼閣へ足を踏み入れれば、怯えた様子の者や、真っ青な顔で動き回る者たちでばたついていた。

「――蟬英姐さん。これから、どうするつもりなんです？」

固い表情の月儀が、妓楼に戻った蟬英に詰め寄る。

周囲に客の目がないこともあって、訊ねずにはいられなかったのだろう。

「さっきうちの奴らを、花街でどれくらい病が拡がってるか確認にやらせたよ。酷いようなら、全体の客足が落ちる。どうするもなにも、しばらくは商売になんないだろうね」

苦々しげな口調で蟬英は告げた。確かに、病が流行っている界隈を好き好んで訪れる者はいない。わざわざ閉業の看板を立てなくても、自然と客足は遠のく。

「健康な者は、なるべく病人に近付かないようにするしかない。春蘭、あんたもだよ」

「私は病には罹らぬぞ」

「初めはみんなそう言うもんさ」

神気に覆われているからなのだが、それを蟬英が知るはずもない。また、説明したところで信用してはもらえないだろう。

「客は理由をつけて帰す。うちでうつされたと吹聴

されても困るからね。春蘭も今日の仕事は終わりだよ。見習い部屋に戻ってな」

それだけを告げると、蟬英は春蘭の返事を待たずに月儀を連れて足早に去って行った。残された春蘭は、溜息を一つ落として、見習い部屋へと向かう。室内に足を踏み入れると、そこにはすでに妓女見習いの少女たちが集まっていた。

みな一様に不安げな表情を浮かべ、まるで聞かれては困るといったように小声でこそこそと囁き合っている。

室内を見回した春蘭は、部屋の隅に蹲っている祥琳を見つけた。近付けば、気配に反応して祥琳が顔を上げる。

「春蘭……紅燕様のこと、聞いた？」

「ああ。倒れたそうだな」

祥琳の隣に腰を下ろせば、小さな掌が絽るように春蘭の手を握り締めた。

「体調が悪いのに、ずっと我慢していたみたいなんだって」

「そうか」

「みんな、紅燕様のことを責めてるの。なんでもっと早く言わなかったんだ、黄海楼に病が拡がったらどうしてくれるんだ、って」

春蘭の手を握る掌に力が籠る。祥琳の瞳には薄っすらと涙の幕が張られていた。

「でもね、もしも自分が同じような目に遭ったら、私だって隠すと思う。だって、怖いもの。楼主様は見捨てないって言ってたけど、でも、他の人たちが追い出そうとするかもしれない。だから、黙ってた紅燕様の気持ちがわかるの」

「祥琳は悔しいのだな」

「……うん」

頷いた拍子に、祥琳の目尻に溜まっていた涙が頬を伝う。堰を切ったそれは、押さえが利かぬように次から次へと溢れでた。

「掌を返したような態度が、使用人たちを見てるよ

うで……。どうしてって。みんな、紅燕様におべっかを使ってまで取り入ろうとしてたくせに、いざとなったら一人残らず離れていくの。今だって、楼主様に命じられたから紅燕様の看病をしてるけど、率先してなにかをしようとする人はいなかったわ」

使用人、という言葉に春蘭はしばし頭を巡らせた。脳裏を過るのは、以前に啓璋たちから聞いた話だ。四年前の戦で玄楽が死に、仲望まで禁軍を退役せざるを得なかった際、鄭家の使用人たちは啓璋と友寧を残して屋敷を出て行ったのだという。

金目のものはすべて持ち去られ、それを茫然と見ているしかなかった少年たちの心には深い傷跡が残された。

もしかしたら、祥琳も同じような目に遭ったのか。妓楼には良家の子女が売られてくることもあるという。紅燕に以前の自分を重ねているのだとすれば、この悲しみようにも納得はいく。

「祥琳、それは傲慢な考えだ」

「……え？」

「紅燕を看病すれば、確実とは言わぬが病がうつる恐れがある。それを覚悟してもなお、病人の側にいたいと思う者は少ない。たとえ恩があろうと、命を投げ捨てられるほどの強い思いを抱くことは難しいだろう。まして、それを第三者が恩知らずと非難することは間違っている」

啓璋や友寧には言わなかった言葉だ。彼らは鄭家を見限った使用人たちを憎んでいた。

だが、使用人たちも去りたくて去ったわけではないだろう。没落した家が、使用人たちを養っていけない以上、新しい働き先を探すのは当たり前のことだ。

その際に金目のものを盗って行ったことは恥ずべき行為だとは思うが、生きるために雇い主に見切りをつけるのは、しかたのないこと。たとえ恩があろうとも、それに殉じる気概がなければ人は自分の暮らしを優先する。

啓璋と友寧は、それでもなお鄭家に留まることを選んだ。だから、出て行った者たちを恩知らずだと罵る気持ちを否定してはいけないと思った。

しかし、祥琳のように安全な場所で、紅燕を見捨てた者に怒りの矛先を向けることは間違っている。せめて、紅燕に対し、批判的な言葉を口にした者たちに怒りをぶつける程度に留めるべきだ。

「酷いよ、春蘭……っ。春蘭は誰にも裏切られたことがないから、そんな風に言えるんだよっ。どうして紅燕様がかわいそうだって思えないの？」

涙を零しながら食ってかかる祥琳に、春蘭は心の中で苦笑した。

紅燕のことは、確かに哀れだとは思う。だからといって、彼女の看病を拒んだ者たちを非難しようとは思わない。

「祥琳。問題を履き違えるな。紅燕から離れた者たちを庇ったからといって、紅燕を哀れまぬわけではない」

「春蘭は、他人事だからそんな冷静でいられるんだよっ。帰る家があるものね。黄海楼で病が拡がっても、自分だけは逃げられるから、そんな悠長にしてられるんだっ」

祥琳の瞳には、拒絶の色が宿っていた。帰る家があるから、という言葉に、春蘭は胸に鈍い痛みを感じた。

鄭家は帰る場所ではない。本来、春蘭が帰るべき所は、ここから遠く離れた小さな邑だ。それも真名を取り戻さなければ、帰ることはできない。

しかし、祥琳の言うこともまたもだ。少なくとも春蘭には、〝鄭家〟という場所があり、彼女たちにはそれがない。置かれた立場が異なる春蘭の言葉に重みがなくても当然である。傲慢な発言だったのかもしれないな、と春蘭は自嘲した。

「……すまなかった」

それだけを告げると、春蘭は音もなく立ち上がった。

部屋を出る際に祥琳を振り返るが、抱えた膝に顔を埋めたまま動く気配はない。他の少女たちは、今後について話し合うことに忙しそうで、春蘭に視線を向ける者はいなかった。

房室を出れば、あたりは不自然なほど静まり返っていた。遠くから喧噪は聞こえるものの、いつものように人が慌ただしく走り回る気配はない。

蟬英から春蘭が言われたように、仕事のない者は部屋に戻るようにと指示が出ているのだろう。特に大事な商品でもある妓女たちは、病人に触れないよう念入りに注意を受けているはずである。

「さて、病人の部屋はどこか……」

下働きの者ならば、どの房室に紅燕が運び込まれたのか把握しているだろう。試しに厨房を覗いてみれば、こちらは相変わらず喧噪の真っ只中といった様子だった。

病人が出たからといって、食事の時間が変わるわけではない。まだ居残っている客に対しても、酒や料理の提供は必要だ。春蘭が戸口で観察していると、配膳係の下女が慌ただしい足取りで料理の皿を運んで行く。

しばらく観察していると、春蘭は下働きの者たちを総括している男に叱咤される一人の女に気付いた。盆を持った下女は四十歳ほどで、青褪めた顔に薄っすらと涙を浮かべている。どうやら、紅燕の部屋に配膳を命じられ、それを嫌がっているようだ。

しかし、雇われの身に拒否権はないようで、嫌々といった様子で盆を運んでいく。春蘭は下女に気付かれないように、そのあとをつけた。

下女が向かったのは、西側の二階、その最奥に位置する部屋であった。周囲の房室には人の気配はない。ここを病室と定めた際に、他の場所へと移動させられたのだろう。

下女は扉の前で、戸口に手をかけては戻すことを繰り返している。このまま戸口に盆を置いて戻ろうか迷っているようだ。

やがて意を決したように、下女は扉の中へと姿を消した。そう経たずに、真っ青な顔で廊下へと飛び出してくる。

春蘭はとっさに近くの房室に入り、戻ってくる下女をやり過ごした。俯き加減で足早に去っていく下女を見送り、春蘭は改めて紅燕がいると思われる房室の前に立った。

「そういえば、忘れていたが、私はあの者に嫌われていたな」

黄海楼の上客である翰栄は蟬英の馴染みなのだが、紅燕はあわよくば自分の贔屓にと狙っていたらしい。それを、妓女でもない春蘭が指名を受け、房室に侍っていたのが気に食わなかったようだ。

顔を合わせる度に嫌味を言われ、向けられる視線には常に蔑みが籠っていた。

「出て行けと言われそうだな……」

その時はしかたない、と春蘭は割り切って扉を開けた。

室内は薄暗く、風の通りがないせいか空気が淀んでいる気がした。鼻孔を突く、食べ物が腐ったようなすえた臭いに、春蘭は思わず顔を顰めた。

「失礼する」

声をかけるが、返答はない。

灯りがないといっても、窓の隙間からわずかに光が差し込んでいるため、手探りして進まなければならぬほどではない。

床の上に敷かれた布団は一組だけだった。

「看護の者が見えぬな……」

祥琳の話では、蟬英に指示を受けた下働きの者が病人の看護を受け持っているはずだ。疑問に思いながらも枕元へと歩み寄った春蘭は、変わり果てた紅燕の姿に絶句した。

寝衣から覗く胸元や、顔の両脇には乾いた吐瀉物がこびりついていた。顔は青白く、薄っすらと開かれた瞳は焦点が合わぬように虚空をさ迷っている。唇から漏れるか細い呼吸音と、それに合わせて上下

する胸の動きがなければ、絶命していると勘違いしても不思議はない有様だった。

先ほど下女が運んできた盆は、枕元から離れた場所に置いてあった。近付きたくないという気持ちが如実に表れている。

気持ちを落ち着かせるために、春蘭は深呼吸を繰り返した。そして、淀んだ空気を入れ替えるために、窓を開ける。

気温は日中よりも下がったが、風に冷たさは感じられない。それでも病人の弱った体にはあまりよくはないだろうと、半分ほど開けるに留めた。

次に、枕元に置いてあった水桶に手拭を浸し、それで紅燕の顔や胸元をきれいに拭き清める。吐瀉物の染み込んでしまった枕は、誰のものかは知らないが、室内に置いてあった清潔なものと交換することにした。

「紅燕？」

「……う、うっ」

不意に、紅燕の乾燥した唇から呻き声が漏れる。顔を覗き込めば、わずかながら瞳に意思が感じられた。

「水は飲めるか？」

吐いたのだから、体は水分を求めているはずだ。下女が持ってきた盆には、水差しと茶碗、それに消化がよいようにと、よく煮られた粥が置かれていた。

紅燕の頭を持ち上げ、水を注いだ茶碗を口元に宛がう。少しずつではあるが、それを嚥下する紅燕に春蘭は安堵の息を吐いた。

「粥は食えるか？」

わずかに頭が横に振られた。しかし、食べねば体力は低下する一方だ。

「少しでよい。水と一緒に流し込むのだ。少しでも食わねば、体がもたぬぞ」

春蘭は柔らかな粥をさらに水で薄め、匙で掬っては紅燕の口元に運んだ。

初めは嫌そうに唇を閉ざしていた紅燕だったが、

春蘭の譲らぬ態度に根負けし、渋々といった様子で流し込まれるものを嚥下する。
「ふむ。今はこれくらいでよかろう」
むりに食べさせても、また吐きだすだけである。分量にすれば匙二杯分程度だが、なにも食べぬよりは遥かにましだ。
「あとは眠るとよい」
「……どう、して」
掠れているせいで聞き取り辛いが、そこは根気強く紅燕が喋り終えるまで耳を傾ける。
「なん、で、あんたが……ここ、に。私を、看(み)てる、の」
「具合を見にきたら、ほったらかしにされていたのでな。このままでは治るものも治るまいと、私にできることをしたまでだ」
だが、どう曲解したのか、紅燕は不快げに口元を歪めた。
「……私に、取り、入ったって、いいこと、ない、わよ」
「取り入るつもりはないのだがな。それよりも、のどが痛むだろう。むりに喋るでない」
嘔吐を繰り返す際、一緒に逆流してくる胃液にだいぶのどをやられているのかもしれない。呼吸すら痛みを伴うだろう。
「別に感謝されたいわけではない。ぬしは気にせずに療養に努めよ」
不可解そうな表情を浮かべた紅燕だったが、体力の落ちた体は睡眠を欲しているらしい。ゆっくりと瞼が降り、やがて眠りへと落ちていった。
額に浮き出る玉のような汗を手拭で拭き取りながら、春蘭は紅燕の様子を観察した。以前、回廊で会った時よりも、全体的に痩せたような気がする。むろん、病の影響はあるだろう。
だが、倒れてからさほど間を空けない状況で、ここまでやつれるだろうか、というのが春蘭の疑問であった。

「おそらく、限界まで我慢したのだろうな……」

病に罹ったなどと、紅燕の矜持が許さなかったのかもしれない。むろん、妓楼から出されてしまうのではないかという不安もあっただろう。

しかし、問題は妓楼の奥で、隔離されるようにして暮らしていた妓女が病に罹ったという事実だ。妓女たちが、外部の者と触れ合う機会は限られている。誰からうつされたのかはわからないが、すでに病が妓楼内部にも拡がりつつあると見て間違いはないだろう。

そう考えれば、紅燕だけでなく他の妓女たちも、病に罹っている可能性が高い。今はまだ症状として現れていないが、二、三日もすれば、この部屋は満杯になるかもしれなかった。

水を絞った手拭を、紅燕の額に乗せる。まだ熱はそれほど高くないようだが、蟬英が言っていた症状では高熱が続くとあった。これから徐々に高くなっていくのだろう。

「しかし、解せぬな……」

春蘭は紅燕を見下ろしながら、誰にともなく呟いた。貧民窟で発生したという病の拡がりが、異常なほど早いのだ。

蟬英が妓楼の者たちを集めて注意を促してから二日と経たずに紅燕が倒れ、一部の下働きの者たちにも流行り病と思しき者たちが出ている。

――華安の守り神は、いったいなにをしているのだろうか。

疫の兆候があれば、必ず地脈が乱れる。気の淀みに敏感な守り神が見過ごすはずはない。また、たとえ疫の拡大を阻止することが難しい場合でも、その威力を半減させたり、拡がる速度を緩めることはできる。しかし、守り神が力を使った兆候はない。

「建国の際に、神を祀ったことに間違いはなかろうに……」

むろん、すべての街や邑に守り神がいるとは限らない。力を失い消滅してしまったところもあれば、

祭祀が行われなかったところもある。だが、そういった場所は、疫や洪水、日照りなどの天災に見舞われるのですぐにわかる。

華安はそのような災厄に見舞われることの方が珍しく、飢饉が起こった年も、被害は小規模で収まったと聞いている。華安には守り神がいる――春蘭はそう確信していた。だからこそ、この現状が納得できないのだ。

「……疫が発生したという場所に行ってみるか」

そこに行けば、なにか原因が摑めるかもしれない。危ないと言われている貧民窟だが、春蘭には白桃がいる。行ってみなければ、なにもはじまらない。

とりあえず明日、詳しい話を聞いてからだ。今は紅燕の看病に専念することにしよう、と春蘭は温くなった手拭を桶に浸したのだった。



翌日の早朝。春蘭は見習い部屋にて目を覚ました。紅燕の看病のために、夜通し側についているつもりだったのだが、蟬英に見咎められ、隔離された房室への立ち入りを禁止されてしまったのだ。

いくら自分に病はうつらぬのだと力説しても、「韓の旦那に恨まれたくはないからね」の一点張りで、譲ろうとはしなかった。

また、春蘭の行動が下働きの者たちの知るところとなり、あんなに小さい子供がやっているのだからと、看病を厭う者が減ったという。さらに蟬英が連れて来た医師が病人たちを診察し、薬の処方を行った。

医師が言うには、悪化を食い止められるかどうかは、本人の体力次第なのだそうだ。体力が続けば、薬の効果で病は体の外へと追い出される。しかし、それまでに体力が続かなければ死ぬだろう、と。

紅燕はかろうじて、食べ物を受けつけていることもあって、重篤ではないらしい。ただ、元々の体力が低下していたこともあって、完治するかどうかは五分五分なのだという。

そして、昨夜、新たに妓女二名が体調不良を訴えた。病は、徐々に黄海楼をも蝕み始めているようだ。

「さて……私は、私にできることをするか」

花街と貧民窟は、意外と近い場所にある。花街も路地裏などは、貧民窟とそう変わらないと言われるほどだ。

間違っても、小さな子供が行くような場所ではない。すぐに人買いに攫われるか、場合によってはもっと凄惨な目に遭うだろう。

しかし、春蘭はそんなことは気にせず、同室の少女たちを起こさないようにこっそりと着替えをすます。

音を立てないように扉を開け、廊下に人の気配がないことを確認する。幸い、早朝ということもあって、下働きの者たちも大半は厨房に詰めているようだ。

厨房とは逆方向に抜けた先には、裏口がある。一階には、場所によって用途の違う裏口が設けられており、春蘭が目をつけたのは、行商の者たちが商品と共に出入りする所だ。

「よし……行くか」

扉にかけられた閂を外し、春蘭はわずかに空いた隙間をすり抜ける。小声で白桃の名を呼べば、主の意思を正確に読み取った神獣は、扉の内側に姿を現したようだ。

がたがたとなにかを合わせるような音が響き、そうかからずに春蘭の玉が淡い光を発する。どうやら、無事に閂をかけ直すという任務を果たしてくれたようだ。

「よくやったぞ、白桃」

玉を一撫でしたあと、春蘭は朱塗りの小門を潜って妓楼の外へと出た。

裏門ということもあり、さすがに人気は少ない。なるべく通行人の注目を引かないように、春蘭は足早に妓楼から離れた。

あれからどれだけ経っただろうか。少なくとも、山裾から顔を出した太陽は、頭上近くまで移動している。

貧民窟の正確な場所は不明だが、方角さえわかっていれば問題はなかった。いざとなれば、水神盤でだいたいの方角を占うことも可能である。問題なのは、春蘭の小さな歩幅では、花街から近い場所にある貧民窟までも時間がかかりすぎることと、こち

らを見つけると目の色を変えて群がってくるごろつき共の存在だ。蘇啓が言っていたことは、誇張でもなんでもなかったらしい。

初めは、直接こちらに接触はせず、一定の距離を保って尾行し続ける。そして、春蘭が人気のない路地に入った瞬間、待ってましたとばかりに周囲を取り囲むのだ。春蘭を捕まえて、人買いに売ろうというのだろう。

その度に、春蘭は辟易とした溜息をつきながら白桃を呼び出す。男たちは顔を真っ青にして、我先にと逃げ去って行くのだが、しばらく歩けばまた似たような出来事が繰り返される。

これでは夕刻までに戻れるかも怪しい。いっそのこと、白桃に跨ってしまおうかと、そんな考えまで脳裏を過った。

周囲に立ち並ぶ建物は、歩みを進めるにつれ徐々に荒ら屋に変わっていく。初めは簡素ながらも人が住める風体をした家屋が多かったのだが、ある一点を境に、朽ち果てた屋根瓦や、壁が崩壊して素地が露出しているものが大半の、まさに荒ら屋と呼ぶに相応しいものが立ち並ぶようになった。

風の吹き溜まりでもないのに、辺りには食べ物が腐ったような臭いが充満している。それに混じるようにして、明らかに強烈な臭いを発している箇所があった。春蘭は強く拳を握り締める。病で亡くなった者の死体が、そのままになっているのだ。

通常、流行り病で亡くなった者たちの遺体は、土葬ではなく火葬される。腐敗した死体は、また新たなる病を呼び込むからだ。しかし、貧民窟では葬ってくれる家族や縁者もなく、遺体はそのまま放置されているのだろう。

両脇の家屋は、もはや雨風を防ぐことができぬほど朽ち果てている。大路の両脇に立ち並んでいるような店や、よい匂いを漂わせる屋台などは影も形もない。

同じなのは澄みわたった青い空と、そこに輝く太

陽の二つだけ。死肉に目敏い鴉の鳴き声すら聞こえない。

これが、貧民窟――華安の影。

もしも華安に守り神がいるのだとすれば、この光景をいったいどんな気持ちで見ているのだろうか。

「……考えるだけ無駄か」

ぽつりと呟いて、春蘭は水神盤を取り出した。病が蔓延する一因となっているのは、地脈の乱れではないのか、と春蘭は推測した。地脈が乱れているということはすなわち、守り神が不在または弱ってきているということだ。

「さて、調べるか」

水神盤は占具だが、気が正常に流れているかどうかを調べることもできる。水神盤を使用した占は、地脈を流れる気が不安定であれば、物事を正しく読み取れない。そのため、事前に気の流れを調べておくことも重要とされた。

もっとも、地脈が乱れることなど滅多にないため、それらの手順は春蘭が占を学ぶ頃には形骸化していたのだが。

「この遣い方も久し振りだな」

水神盤を地面に置き、玉の部分に掌で触れる。いつもはそこに気を注ぐのだが、今回は逆だ。地脈の流れを、玉を通して感じるのである。

「ふむ……だいぶ乱れているな」

地脈は、人の体に流れる血液に似ている。健康な者ほど、その流れは正常だ。しかし、一度その流れが乱れれば、多大な影響を及ぼす。華安に蔓延し始めた疫のように。

「わからぬな……」

水神盤についた汚れを上衣の袖で拭き、懐へと戻した。貧民窟を流れる地脈は予想以上に乱れたものだった。

全域を調べたわけではないが、病が蔓延している貧民窟の現状から見れば、乱れは広範囲にわたっていることが推測される。

さらに放置されたそれは、徐々に他の正常な地脈をも侵食する。花街の辺りはまだ大丈夫だが、それもいつまで持つか。むしろ貧民窟に近いことを考えれば、数日中にもあの一帯の地脈にも影響が出始めるだろう。

春蘭の眉間に皺が刻まれた。地脈に問題があることはよく理解できた。しかし、わかったところで春蘭にはなにもできないのが現状だ。疫が華安に蔓延していくのを、ただ見ているしかない。

本来なら対策を取らねばならない朝廷は、いったいなにをしているのだろうか。

だが、このままでは本当に手遅れになってしまう。不穏な予感が春蘭の胸を過った。

「……戻るか」

いつまでもここに留まっていても意味はない。踵を返そうとした春蘭だったが、背後に感じた気配に思わず目を細めた。

「何者だ」

白桃が姿を現さないということは、春蘭に対して害意をもっていない証拠だ。だからといって、場所が場所だけに緊張を解くことはしないが、春蘭は余裕をもって振り返った。

しかし、視界に入ったのは予想外の人物だった。

「祥琳！」

春蘭は驚きに声をあげた。強張った表情を浮かべた少女は、涙ぐみながら春蘭を睨んだ。

「心配、したんだよ！」

「……すまなかった。だが、なぜぬしがここにいるのだ」

春蘭は混乱していた。妓女はなにがあっても、無断で妓楼から出てはいけない。発覚すれば、見習いとはいえ厳しい罰を言い渡されるだろう。祥琳がそれを知らないはずがない。

承知の上でついて来たというのならば、無謀としか言いようがなかった。

「外は危ないって言われてるのに、春蘭がこっそり

どこかに行くから……連れ戻さなきゃって」
「私とぬしとでは、立場が違うのだ。見つかって咎めを受けるのはぬしだぞ」
「わかってるよ。でも……春蘭が危ない目に遭うんじゃないかって思ったら、じっとしてられなくて……」
もう少し周囲に気を配るべきだったか、と春蘭は自身を責めた。祥琳をここまで連れてきてしまったのは、春蘭の落ち度だ。
誰にも気付かれずに妓楼へ戻ることができればいいが、見つかったら最後、祥琳には厳しい罰が言い渡されるだろう。
いくら祥琳を可愛がっていても、蟬英は楼主として公平な処断を下すはずだ。
「本当にすまなかった」
「えっ、そんなに落ち込まなくても……」
「いや、ぬしを巻き込んでしまった」
「春蘭は気にしなくていいよ。私が勝手に追い掛けただけだから」
「そういうわけにもいかぬ」
ただ、できるならば春蘭が妓楼から抜け出した際に声をかけてくれればよかった。貧民窟へ行けなかったかもしれないが、少なくとも祥琳をここまで引き連れて来ることはなかっただろう。
そこまで考えて、春蘭はふとあることに気付いた。
「……しかし、ぬしはよくここまで無事だったな。かどわかしに遭わなかったのか？」
「うん。春蘭のあとをついて来たら平気だったよ。でも、なにをしたの？　怖い顔の男の人たちが、脇道からものすごい悲鳴をあげて走って行ったけど」
どうやら、白桃の姿までは見ていないようだ。説明する手間は省けたが、今度は春蘭が責めるような眼差しで祥琳を睨む番だった。
「なぜ、もっと早く私に声をかけなかった？　妓楼を出てから、呼び止める機会はいくらでもあったはずだぞ」

「そ、それは……」

痛いところを突かれたのか、祥琳は急に言葉を濁した。春蘭を心配したというのは本当だろう。だが、他にもあとをつけて来た理由があるようだ。

「だって、春蘭が貧民窟に向かってるみたいだったから」

「貧民窟……そうか、確かぬしの知り合いがいるのだったな」

祥琳は目を伏せながら小さく頷いた。

「会えるわけないけど、でも、もしかしたらって思って。ごめんなさい……」

「まったく。ぬしも、人のことは言えぬぞ」

嘆息する春蘭に、祥琳はますます体を縮こまらせた。言いたいことはまだあるが、いつまでもここに留まってはいられない。春蘭だけでなく、祥琳の姿まで見えないとなれば気付く者がいるかもしれない。

「とりあえず、妓楼に戻るぞ――」

それは唐突だった。不意に右腕を摑まれた春蘭は、強い力に引っ張りあげられてしまう。

「騒ぐんじゃない」

春蘭を小脇に抱えたのは、薄汚れた格好の男だった。こけた頬や、病的なまでに落ち窪んだ目。春蘭を持つ腕は枯れ木のように痩せ細っていた。

歳がいっているようにも見えるが、外見からではいまいち判断がつかない。先ほどの声もしゃがれ切っていて、老人といわれても納得してしまいそうだ。

男は細い肩で荒い息をつきながら、右腕に春蘭を抱え、左腕で祥琳の手首を摑むと、勢いよく脇道に飛び込んだ。人一人すれ違うことも難しい路地で、男は息を潜めるようにして蹲った。春蘭と祥琳は通りから見えないように、男の陰に押し込められる。

白桃が出て来ないということは、この男は春蘭たちにとって安全であるという証拠だ。驚いて悲鳴をあげようとした祥琳の口を両手で塞いで、男は落ち着くようにと目で合図する。

春蘭たちが黙って陰に身を潜めていると、大通り

に人の集まる気配がした。
「くそっ、どこにもいねぇぞ！」
「どこに行った！」
「だからこんな場所に、身形のいい餓鬼なんざいるわけがねぇんだよ」
「しかも女だろ？　幻でも見たんじゃねぇか？」
「見間違いじゃねぇよ！　確かに、十くらいの餓鬼がうろついてたんだ！」
「てめぇ、嘘だったらただじゃおかねぇぞ」
しばらく怒鳴り声や言い争う音が響き、やがて、それらは足音と共に春蘭たちのいる場所から徐々に遠ざかって行った。
どうやら、病が蔓延している貧民窟でも、元気な者は多いらしい。
「はぁ……見つからずにすんだ……」
安堵の息を吐く男を、春蘭は改めて見上げた。
「助けてもらったことには礼を言う。だが、なぜ私たちを助けた？」
「お嬢ちゃんたちは、なんでこんなとこにいるんだ。迷子か？」
「違うぞ」
否定すると、未だに通りを警戒するように見やりながら、男は困ったように頭を掻いた。
「もののわからぬ年ではないだろ。ここがどういうとこか、わかってるのかい？」
「うむ。調べたいことがあって、ここまで来たのだ。むろん、先ほどのような輩にも嫌になるほど絡まれたが、護衛を連れているので平気だ」
「ああ、じゃあその人と逸れたのか」
そうではないのだが、その護衛が大虎だと言っても信じてはくれないだろう。実物を見せてもいいが、驚かれて逃げられるのがおちだ。
「ぬしは、先ほどの者たちとは違うのだな」
「生憎と、そこまで落ちたつもりはないよ」
男は自嘲するように笑んだ。
のどが痛むのか、ときおり首をさするような仕草

をする。
「さて、護衛の人とはどこで逸れたんだい？」
「いや、そういうわけではないのだが……」
春蘭は未だに男を警戒している祥琳を一瞥した。
「できれば送って行ってあげたいけど、さっきの奴らに見つかるとこっちも危ないんだ。どうにかして、その人を見つけた方がよさそうだ」
春蘭たちだけでここまで来られるはずがないと、頭から決めてかかっている男は、逸れたと決めつけている護衛を捜す算段を始める。
ここは適当にはぐらかして、さっさと妓楼に戻るのが得策だろう。春蘭がそう決断を下した時だった。
「おいっ、いたぞ！」
通りに目を向ければ、そこには下卑（げび）た笑みを浮かべる男の姿があった。立ち去ったと思ったのだが、根気強くこの辺りを捜していたらしい。
「ま、まずいっ」
男が春蘭たちの手を引いて立ち上がろうとする。
だが、そうはさせまいと、通りにいた男が飛び掛かってくる。
白桃を呼ぼうと口を開きかけた瞬間、通りにいた男が勢いよく吹っ飛んだ。
「ぐふっ！」
唖然としていると、通りからは荒々しい怒号と、悲鳴、複数の者たちが争う音が響いてくる。これはいったいどうしたものかと、春蘭は自分を助けてくれた男と顔を見合わせた。ちなみに祥琳は、怖ろしさのあまり蹲るようにして震えていた。
「とりあえず、様子を見てみるか？」
「いや、仲間割れかもしれない。今のうちに逃げよう。こっちに抜け道が――」
絶好の機会とばかりに、男は脇道の奥に向かうべく春蘭たちを促した。
男に腕を摑まれながらも春蘭が通りを気にしていると、聞き覚えのある声が耳に響いた。
「おーい、お前ら！　無事かー？」

今まで怯えていた祥琳も、驚いたように顔を上げた。通りに出て見れば、そこには柄の長い棍を持った蘇啓の姿がある。足許には、先ほど通りで春蘭を捜していた男たちが、重なり合うようにして倒れていた。

「蘇啓、なぜぬしがここにいる」

「それは、こっちの台詞なんだがなぁ。とりあえず、後ろの奴はこいつらの仲間か？」

「ひいっ」

蘇啓が獰猛な笑みを向ければ、春蘭たちを追って脇道から出てきた男が顔を真っ青にして悲鳴をあげた。

「いや、彼は私たちを助けてくれたのだ。敵ではない」

「へぇ。貧民窟にも、そんなお人好しがいるのかい。案外、恩を着せて売り飛ばそうっていう算段なんじゃねぇのか？」

「それはない」

白桃のこともあるが、春蘭たちを攫おうとしていたのならば、護衛の者を捜すはずがない。

「正真正銘、ただのお人好しだ」

「いや……それもちょっと」

春蘭の言葉に、男はがっくりと肩を落とす。しかし、これほどこの男を的確に表現する言葉もないだろう。男たちに見つかった時ですら、春蘭たちを見捨てず共に逃げようとしたのだから。

「お嬢ちゃん、この人が護衛さんなんだね。見つかってよかった」

「あん？　俺は護衛じゃなくて門番だぞ？」

いまいち話が噛み合っていないのだが、男は見るからに屈強な蘇啓を春蘭の護衛と勘違いしているようだ。

「ところで、なぜぬしがここにいるのだ？」

「祥琳が妓楼を出てくとこを見たんだよ。連れ戻そうと思って追い掛けて来たんだが、途中で見失っちまってな」

春蘭の後を祥琳が、その後を蘇啓が追うという展開だったのか。どうやら、まだ蟬英にはばれていないらしい。春蘭は安堵の息を吐いた。

「蘇啓。すまぬがこのことは……」

「わかってるよ。うちの楼主様はおっかねぇからな。祥琳も逃げようとしたわけじゃねぇし、見なかったことにしてやるよ。それに、阻止できなかった俺も連座させられちまうしな」

その言葉に顔を真っ青にしたのは祥琳である。春蘭は、妓楼から出てもなんの罪にも問われない。それを蘇啓が見逃してしまったとしても、春蘭さえ無事ならば叱責程度で終わるだろう。

しかし、それが妓女見習いともなれば話は別だ。逃げるつもりはなかったと主張しても、それを見逃してしまった蘇啓もなんらかの罪に問われてしまうだろう。

「ご、ごめんなさい。私っ……」

そこまで深く考えていなかった、と祥琳は涙ながらに謝罪する。

「どうせそんなことだろうと思ったさ」

黙ってりゃわかんねぇだろ、と蘇啓はあっけらかんとした態度で言い放つ。確かに、疫への対応に追われている蟬英が、春蘭たちの不在に気付く可能性は低い。

「さて、言い訳は妓楼に戻ってからじっくり聞くとして、そろそろ戻るぞ。人数で来られたら、さすがの俺もやばいからな」

棍を片手に、蘇啓は周囲を警戒するように見回す。一人ならばまだしも、春蘭と祥琳を守りながらでは行動が制限されてしまうのだろう。

いざとなれば白桃を出せば問題はないが、それはそれで説明が面倒なため、余計な揉め事は起こらない方がいい。

妓楼へと戻る前に、改めて助けてくれた男へ礼を告げようとした時だった。顔を上げれば、そこには祥琳を凝視しながら静かに涙を零す男の姿があっ

た。
「どうかしたのか？」
「い、いや、なんでもないよ……」
春蘭の声に、はっと我に返った男は、慌てたように首を横に振った。そして、妙にそわそわとした様子で、春蘭に笑い掛ける。
「帰りは気をつけて。もう、絶対にここへ来るんじゃないぞ」
最後の台詞を強調するように告げ、男は春蘭たちの前から立ち去ろうとした。しかし、それを呼び止める声があがる。
「……守真？　もしかして、守真なの？」
男の体が不自然に震える。祥琳はなにかに気付いたかのように、去ろうとした男の腕を摑み必死で訴えた。
「守真なんでしょ？」
「……お嬢さんの人違いですよ」
「うそっ。さっきは怖くて気付かなかったけど、今はちゃんとわかる」
「手を放してください。ここにずっといるんです。病でもうつったら大変ですよ」
男は困惑した様子で、祥琳を引き離そうとするが、腕を抱え込むようにして摑まれているため、それもかなわないらしい。救いを求めるような眼差しを向けられ、春蘭は溜息をついた。
「祥琳、落ち着くのだ。もしかして、以前にぬしが言っていた貧民窟に住む知り合いというのは、この者のことなのか？」
「うん。間違いない。痩せてて、声もがらがらだけど、でも私が守真を見間違えるはずないもの」
「私は何度も違うと言って……」
「違わない！　どうして、そんなこと言うの？」
否定され、祥琳はさらにむきになっているようだ。涙を零しながら、必死になって言い募る。
「怒ったりしてごめんなさいっ。私、春蘭に言われるまで自分ばっかりが辛いんだって思ってた。でも、

屋敷を追われたのは、守真たちだって同じなんだって気付いたの。生きるためには、私のことなんて気にしていられないんだって。だから、私に守真たちを怒る権利なんてなかったの！」

ごめんなさい、と祥琳は精一杯の気持ちを込めるようにして告げる。男はそれに、困ったような、でも、安堵するような表情で答えた。

「私は守真なんて男じゃありませんが、きっとそう言ってもらってその人も嬉しいと思いますよ」

「どうして認めてくれないのっ」

このままでは無意味な押し問答が続きそうだ。溜息をついた春蘭は、仲裁するべく口を開いた。

「否定しているところを悪いが、そろそろ認めてやってくれ。祥琳がかわいそうだ」

「だから、私は違うと――」

「守真とやら。気付いていないかもしれぬが、ぬしは祥琳と話す時だけ敬語になっているのだ。習慣とは馬鹿にできぬな」

春蘭の指摘に、男――守真はしまったという表情を浮かべた。本当に自分では気付いていなかったのだろう。追い打ちをかけるようにして、今まで傍観していた蘇啓が口を挟んでくる。

「大方、祥琳に迷惑をかけまいとしたんだろうよ。こいつの性格上、ここに置いておくわけにはいかないって言い張るだろうからな」

「ああ、なるほど。そういうことか」

核心を突かれ、守真の顔が引き攣ったように歪む。祥琳のことをよくわかっているからこそ、あえて他人の振りをしていたらしい。

「守真、そうなの？」

「……犬猫じゃないんですから、むりですよお嬢様」

「お嬢さん」が「お嬢様」へと変化する。己を偽ることを諦めたようだ。

「まさか、助けた子がお嬢様だったなんて……。見違えるくらいきれいになりましたね。気を張ってた

こともありますが、私の方が名前を呼ばれるまで気付きませんでしたよ」

ですが、と守真は続ける。

「妓女として働いている、お嬢様の迷惑になるようなことはできません。廟客なんて死んでもごめんですよ」

きっぱりとした口調だった。黄海楼にはいないが、他の妓楼には、廟客と呼ばれ妓女に養ってもらっている男もいるそうだ。

「でも、ここにいたら」

「大丈夫。今まで病にも罹らず、暮らしてこられたんです。お嬢様の無事をこうして自分の目で確認できたのですから、それを励みにまた明日から頑張れます」

守真は満面の笑みを浮かべて見せる。しかし、誰が見ても祥琳を諦めさせるための嘘としか思えない。さて、どうしたものかと春蘭が考え込んでいると、面倒臭そうな口調で蘇啓が告げた。

「ったく、しかたねぇ奴らだな。祥琳、いいからそいつを引き摺ってこい。逃げられたくなかったら、意地でも放すんじゃねぇぞ」

「ちょっと、私は行かないとあれほど……」

「いつまでも、うだうだやってる暇はねぇんだよ。うちなら、一人くらいどうにかなんだろ」

唖然とした様子の守真とは裏腹に、祥琳は涙を零しながら嬉しげな笑みを浮かべた。よほどここに守真を残していくことが嫌だったのだろう。

「勝手に決めてよいのか？」

「病に罹ってんなら、追い出せばいいだけの話だ。それにな、これから嫌ってほど人手が必要になるはずだ。身元がはっきりしてんなら、問題ねえだろ」

「あのね、守真はものすごく頭がいいの。将来はうちの家令になる予定だったんだよ」

涙を拭いた祥琳は、必死に守真のよさを熱弁する。蘇啓は過去の経歴にあまり興味がないのか、「下男だった方が、使い勝手がいいんだがなぁ」と難しい

顔をした。

「とりあえず、妓楼に戻るぞ。そいつのことは、責任は持てねぇができる限りなんとかしてやる。いいか、絶対に期待すんじゃねえぞ」

そう言いつつも面倒見のいい蘇啓のことだ、なんとかして黄海楼で雇ってもらえるように直談判してくれるだろう。

「本当にいいんですか……？」

困惑する守真に、蘇啓は軽く舌打ちする。

「おじおどすんじゃねぇ。感謝なら、祥琳にしな。それに、飯を食わせてやるぶん、しっかりと働いてもらうからな」

「は、はいっ」

「んじゃ、いい加減に行くぞ」

そう告げるなり、蘇啓は片腕で春蘭を抱え上げた。問うようにすぐ傍にある顔を見れば、「お前さんの足じゃ、日暮れになっちまうからな」と、獰猛な笑みを浮かべる。

「すまぬな」

「まったくだ。仕事をさぼったのがばれたら、一蓮托生（たくしょう）だぞ」

文句を言うが、蘇啓の口元は笑っている。背後では、守真と手を繋いだ祥琳が同じように満面の笑みを見せていた。

「守真のことを捜したくても方法がなくて、ずっと心配してたんだよ。姐さんたちに訊いてみたら、そういう人たちは貧民窟に行くんだって言われて。だから、もしかしたら守真もここにいるんじゃないかって思ってたの」

「私も心配でしたよ。世間知らずのお嬢様が、どこでなにをしているのか不安でしかたありませんでした。それでも、最近になって花街の妓楼にいると聞いて、少しは安心していたんです」

「誰に聞いたの？」

「貧民窟には、そういった情報を集めることに長けた人物がいるんです。病が流行るようになったおか

げで、結果を訊きに行くことはできませんでしたが、日雇いの仕事で知り合った人が、伝言を頼まれたと、わざわざ私のねぐらまでやってきて教えてくれましてね。お嬢様がどこにいるかだけ、知ることができたんです」

そう告げた守真の表情は、なぜか悲しげに歪められていた。

「……関という人でした。体調を崩した私を心配して、なけなしの食べ物を譲ってくれるくらいよい人で。あれがなければ、私はここにこうしていなかったかもしれません」

守真の口調から、関という男はすでに故人となっていることが察せられた。

病に倒れたのか、それともいざこざに巻き込まれて命を落としたのか。どちらにせよ、守真は知人の死を深く悼んでいるようだ。

「ああ、そうだ。申し遅れました。私は、徐守真と申します。お嬢様の生家で、家僕として働いておりました」

春蘭と蘇啓に向かい、守真は思い出したように名を告げた。

「私は春蘭だ。妓女ではないが、祥琳には世話になっている。こっちは蘇啓といって、妓楼の門番をしている」

ついでみたいに紹介してんじゃねぇよ、と蘇啓がぼやく。それに、守真は柔らかな笑みを浮かべながら、先ほどのように静かに涙を零す。

安堵からか、それとも祥琳の側にいることができる喜びか。貧民窟を出たあとも、守真の涙は止まることはなかった。

昼を大幅に過ぎてから妓楼へと戻った春蘭の予想通り、妓楼で働く者たちは病人の看病に追われていた。妓女たちを隔離してはいるが、病を完全に防げるわけではない。

また、下働きの者たちの中にも倒れる者が少なくなく、必然的に妓女も病人の看病に駆り出されることが多くなった。

守真は蘇啓の紹介ということもあり、下働きとして雇用されることになった。極限まで痩せ細った体でどこまで働けるか危ぶまれたが、祥琳の側にいられるということが大きかったのだろう。どんな仕事を言いつけられても嫌な顔一つせず、病人の看護ですら率先して行うほどだった。

そして、三日を過ぎた時のこと。

蟬英に呼び出された春蘭は、鄭家に戻るよう命じられたのだった。

「……どういうことだ」

「そのままの意味だよ。うちはもう病が収まるまで営業はできない。占師として働けないあんたの面倒を見てやるほど、あたしは善人じゃないんだ」

広い楼主の私室で、いつものように煙管を燻らせた蟬英は、春蘭を見もせずにそう言い放った。確かに、妓女でもない春蘭を置いておく利点はない。下働きの者たちのように、明確な仕事があるわけでもない春蘭は、他の妓女たちに混じり病人の看病に勤しんでいたが、手が足りていると言われてしまえばそれまでだった。

「それに、前に言っただろ。あんたになにかあって韓と鄭の旦那に責められるのはこっちなんだ。ただでさえ忙しいってのに、これ以上の面倒事はごめんだよ。俥は出してやるから、今日のうちに出てっておくれ」

久し振りに顔を合わせた蟬英は、ここ数日の間にずいぶんと痩せてしまっていた。

「だが、今日もまた病に倒れる者が出たのだ。今は平気でも、いずれ人手が足りなくなる」

「あんたが心配することじゃないよ」

突き放すような蟬英の物言いに、春蘭は奥歯を噛み締めた。

言われていることが正論だとはわかる。だが、こ

の現状で妓楼を離れることに抵抗を覚えているのも事実だった。

「しかし……」

「言い訳は聞かないよ。蒼羽、春蘭を連れて行きな。どうせ荷物はないだろうし、見習い部屋じゃなくてまっすぐ裏口に向かいな」

側に控えていた蒼羽は、春蘭の手を取って立たせると、有無を言わせずに部屋から連れ出した。

「蒼羽、せめて祥琳に会わせてくれ。なにも言わずにここを去ることはできぬ」

だが、春蘭の手を引く蒼羽は、首を横に振った。あくまでも蟬英の命に忠実に従うつもりのようだ。春蘭が逃げないようにと、手に力が加わる。相手は子供だが、蒼羽よりも体格の劣る春蘭が敵うはずもなかった。

せめて、祥琳を見つけることができればと、歩きながら周囲を見回すが、倒れた妓女たちの看病に回っているせいか、顔見知りの者すら捕まえることはできなかった。

そうこうしている間にも、春蘭はいつも出入りしている裏口の前へと連れて来られてしまった。外を見れば俥の用意は整っていないようで、見張り番の男が気だるそうに立っているだけだった。せめてそれが蘇啓であったなら、と春蘭は嘆息する。伝言することすら叶わないらしい。

「のう、蒼羽。できるならば、祥琳にすまぬと伝えてはもらえぬか？」

じっと春蘭を見下ろしていた蒼羽は、それに小さく頷いた。言葉を喋ることのできない蒼羽を困らせるかもしれないと思ったが、そう告げずにはいられなかった。

やがて、蟬英が手配した俥が裏口へと横付けされる。俯いていると、春蘭の頭に蒼羽の手が置かれた。見上げれば、珍しく憂いを帯びたような表情を浮かべる少年の姿がある。

「……大丈夫だ。蟬英が、私を心配してああ言った

ことくらい気付いている」

本来ならば、人手はのどから手が出るくらい欲しいはずだ。

だが、病が蔓延している妓楼で働きたいと思う者は少ない。また、下働きを雇用するにしても、身元がはっきりしない者を雇い入れることは難しいだろう。

「私は妓楼を出ても住む場所がある。働かなくても、食っていくことはできる――私が蟬英でも、同じことをした」

いくら病に罹ることはないと力説しても、蟬英は信じないだろう。今の春蘭は傍目には十二歳の少女でしかないのだから。

だが、口惜しさは残る。

「そろそろ行かねばならぬか」

蟬英がまっすぐ裏口に向かうように指示したのは、春蘭の気持ちが鈍るのを懸念したこともあるが、妓楼を出て安全な場所に行くことを快く思わぬ者たちもいるからだろう。

春蘭が誰にも責められぬようにと、配慮してくれたのかもしれない。

「蒼羽。ぬしも気をつけるのだぞ」

俥に乗れば、すぐに動き始める。別れはあまりにも唐突だった。

楼主の部屋に呼ばれた際、祥琳には用を聞いたら戻ると言ったのに。未だに意識の戻らない紅燕も心配だった。朝から具合が悪そうな様子で働いていた月儀も。

わかっているのだ。自分がどれほど無力な存在であるか。守り神から人に戻ってしまった春蘭には、疫を祓うほどの力はない。

たとえ春蘭が守り神として力を振るうことが可能でも、華安はあまりにも広い。

地方の邑を守護していただけの春蘭には、広範囲にわたり狂った地脈を正常に戻すことなどできなかった。

しかたのないことだと、諦めてしまえば楽になれるのだろう。守り神であった時ならば、己の力の及ばぬことに対してそのように考えていた。神とて、けっして万能ではないのだと。

人には常に平等であり、一人の人として捉えたことは一度としてなかった。

誰が死のうとも、それは自然の摂理であり、必要を越えた干渉は守り神としてあるまじき行為だという思いがあった。

だが、胸の奥から込みあげてくる感情を堪えることはできない。それは、悔しさであり、悲しみであり、なによりも無力な自分に対する怒りだった。

守り神であった時には、一度として感じたことのない気持ち――これが、人というものなのかと、頬を伝う雫を感じながら思う。

春蘭が優先すべきは、真名を取り戻すことであり、自身が守護する邑人の安寧だ。しかし、脳裏を過るのは、妓楼で暮らす者たちのことである。

俥に揺られながら、春蘭は収拾のつかない感情を持て余すしかなかったのだった。

気付いた時にはすでに鄭家の門前に俥が横付けされており、気難しそうな御者からさっさと降りるように促された。

門前に立てば、用は済んだとばかりに砂埃(すなぼこり)をあげながら俥は走り去っていく。それを見送った春蘭は、とりあえず帰宅を告げるべく屋敷へと向かった。

「誰かおるか」

声をかけるが、返答はない。屋敷の中はがらんとしており、いつも以上に人の気配は感じられなかった。

それでも廊下を奥へと進めば、逆に騒がしげな声が響いてきた。おそらく、仲望(ちゅうぼう)がいつもくつろいでいる居間にいるのだろう。仲望と顔を合わせることに躊躇いはあるが、今は騒いでいる理由の方が気

になった。房室へと近付けば、室内から久し振りとなる韓楊秀の声が聞こえた。

ちょうどよかった。これで蟬英がずっと気にしていた、朝廷の疫への対応を知ることができる。しかし、足早に楊秀の許へと向かった春蘭が耳にしたのは、悲痛な叫びだった。

「なぜだ。なぜ、陛下はっ……！」

円座に座り深く項垂れた楊秀の隣には、友人を慰めるように肩に手を置く仲望の姿もあった。啓璋と友寧は、真っ青な顔で戸口のところに立ちつくしている。いったいなにがあったのかと、春蘭は急いで啓璋たちの許へと向かった。

「啓璋、友寧。どうかしたのか？」

「あ、春蘭！　よかった、戻ってきたんだね」

春蘭を見るなり、友寧は安堵の表情を浮かべる。見れば啓璋も似たような顔をしていた。

「楊秀は、なにを嘆いておるのだ？」

「それが……」

「なあ？」

「うん……」

友寧と啓璋は互いの顔を見合わせ、言葉を濁した。二人の反応に困惑した春蘭は、いぶかりながらも室内に足を踏み入れる。それに気付いた仲望が、こちらに視線を向けた。

「ああ……お帰り、春蘭」

「うむ。楊秀はどうしたのだ？」

仲望に対する気持ちは整理しきれていないが、今はそれよりも楊秀のことが心配だった。この男が、これほどまでに落ち込むのだ、よほどのことがあったに違いない。

「……今朝方、禁軍に勅旨が下されたそうだ」

「禁軍に？」

疫を発端にしての混乱が華安に拡がっている中、禁軍が動くとすれば、街の治安を護るためだろうか。しかし、仲望からもたらされた言葉は、予想外のものだった。

「貧民窟及び、疫が蔓延している地域を……焼き打ちするように、と」
「なぜ、そのようなことを！」
春蘭は思わず叫んだ。そして、衝動のままに言葉を続ける。
「動ける者ならばまだ逃げることもできるが、病に罹って寝たきりの者はどうするのだ。まさか、その者たちも焼き払ってしまうというのか？」
「それをもって、疫への対応策とするそうだ」
「……弱者は切り捨てるということか」
返答はない。湧き上がる怒りを感じながらも、春蘭はある疑問に口を開いた。
「ならば、なぜ楊秀がここにいる？　仕事を放棄してきたのか？」
勅命が下されたのならば、禁軍の将である楊秀は采配を振る立場にある。このようなところで、嘆いている暇はないだろう。
「蟄居を命じられたんだよ。勅旨を撤回してほしいと、陛下に上訴したそうだ」
「よくそれで済んだな」
焼き打ちを命じるような男だ、刃向かう者は容赦なく切り捨てそうなものなのに。
「楊秀と同じような行動を取った官吏が多かったからね」
「なるほど」
全員を罰するには人数が多く、結果、蟄居という形が取られたようだ。しかし、と春蘭は唇を噛み締める。
疫が蔓延している地域に、花街が含まれるのだとすれば――。
「宮中は混乱している」
呟いたのは楊秀だった。
憔悴し切った様子で、春蘭を見る瞳からはいつもの覇気が失われている。
「面と向かって口にする者はいないが、誰もが事前になんの相談もなく、強硬手段に出られた陛下への

不満を燻らせている。それに、黎貴妃様への非難も――」

「黎貴妃？」

唐突に告げられた名に、春蘭は眉を寄せた。黎貴妃は、攫猿の騒動がきっかけでわずかではあるが言葉を交わしたことのある相手だ。むろん、それを知る者は、この場にはいないが。

「私のせいなのだ……他意はなかったとはいえ、結果的にあの方に迷惑をかけてしまう破目に」

「どういう意味だ？」

なぜ、禁軍の将軍である楊秀が、黎貴妃への批判を自分のせいだと苦慮しているのか。仲望を見れば、春蘭と同じように訝しげな表情を浮かべていた。

「黎貴妃様に面会し、流行り病への対策をしていただけるよう、陛下に嘆願していただけないかとお願いしたのだ。勅旨が下されたのは、その翌日のことだ。おそらく、あの場にいた者の誰かが口を滑らせたのだと思うが、宮中では黎貴妃様が焼き打ちを提案したのではと、もっぱらの噂だ」

春蘭の記憶にある黎貴妃は、美しくも儚い女性だった。

自身の境遇を恨み、復讐のために嫣然と微笑みながらも、心内では静かに涙を零しているような印象を受けた。

彼女が報復の一環として、焼き打ちを進言した可能性は捨て切れない。だが、自身の子を立太子するために卑怯な手段は用いても、無関係な弱者を進んで迫害するようには見えなかった。

「おそらく、陛下は以前より計画されていたはずだ。いくら寵妃とはいえ、他者の嘆願で禁軍全体を動かす方ではない」

「それは、そうだろうね」

仲望が苦笑しながら、同意するように頷いた。

「よく知っているのだな」

「俺は話に聞いたことがあるだけだが、楊秀は陛下が帝位に就かれる以前、二年間だけ、共に禁軍で肩

を並べていた時期があったからね」

「そういえば、皇帝は禁軍の出であったな」

禁軍に所属していた際は、他者の追随を許さぬほどずば抜けた実力の持ち主だったと聞いている。楊秀は複雑な表情を浮かべ、自らが仕える主について語り出した。

「地方で小競り合いが起こった時のことだ。進軍の順列から遅れた小隊が、賊軍に囲まれたという報せが入った。それをあの方は、容赦なく切り捨てた。弱者は軍にはいらぬ、とおっしゃられて。今回も同じだ。病に倒れた者は、あの方にとって手を差し伸べる必要もない〝弱者〟に当てはまるのだろう」

弱者か、と春蘭は呟いた。守り神としてある意味、皇帝に近い場所にいた春蘭は、苛烈とも取れる判断を理解することはできた。

頂点に立つ者は、時として大勢を守るために少数を切り捨てなければならない時がある。春蘭も守り神としてそのような場面に立たされたならば、迷わずに決断を下すだろう。

だがそれでも、取りうる手段をすべて試したうえでのことだ。いきなり焼き打ちという極端な判断は、あまりにも短絡的すぎる。

「それなのに、私のせいで黎貴妃様はあらぬ誤解を……」

苦悩する楊秀に、春蘭は首を傾げた。見れば、仲望も困惑するような眼差しを友人に向けている。

「楊秀。君は、黎貴妃のことを嫌っていたんじゃないのか？」

「あれは噂に惑わされていただけだ。お前も黎貴妃様にお会いすれば、心根の優しい方だとすぐにわかる」

ここではない別の場所を見つめるように、楊秀は恍惚とした表情を浮かべた。

「まあ、俺はお会いする機会もないと思うが……ところで春蘭。今日は妓楼じゃなかったのか？」

仲望の声に、春蘭は思わず肩を跳ねあげた。禁軍

に下された勅旨や、楊秀の奇妙な態度に気を取られていたが、例の気まずさが急に込みあげてくる。

「妓楼は当分の間、臨時休業するそうだ」

顔を逸らせながらそう答えた春蘭は、楊秀の側へとにじり寄った。

「のう、楊秀。禁軍はいつ動くのだ？」

さすがに、今すぐというわけにはいかないだろう。焼き打ちするための手配や、疫が蔓延している場所以外に火が回らぬように配慮する必要がある。皇帝も、華安全土を焼野原にしたいわけではないだろう。

しかし、なぜか楊秀は問いに答えることはせず、仲望と春蘭を交互に見比べる。

「……もしかして、私がいない間になにかあったのか？」

「なにもない。それよりもだ、楊秀。焼き打ちの日を教えてくれ」

「いや、なにもない態度ではないぞ！　以前はあれほど仲睦まじく、膝枕までしていたではないか！　仲望、いったい春蘭になにをしたのだ？　まさか、嫌がるところをむりやり迫ったのか！」

仲望の襟元を摑んだ楊秀は、容赦なく前後に揺さ振る。

「見損なったぞ！」

「うっ、苦しっ……」

「いいから、なにをしたのだ？　洗い浚い吐け！」

「……」

仲望の顔色が土気色になり始めたところで、事態に気付いた啓璋と友寧が慌てて止めに入った。だが、楊秀は興奮冷めやらぬ様子で、仲望を睨みつけている。

「まったく……楊秀。そんなことはどうでもいいから教えてくれ」

痺れを切らした春蘭は、強引に楊秀の袖を引いて問題の日付を訊ねた。楊秀は憤然としながら、それに答える。

「四日後だ。私の他にも、二人の将軍が上訴し蟄居



を命じられた。しかし、指示を出す者は他にもいる。四日後には、間違いなく大規模な焼き打ちが決行される」

「……もしも、その間に疫が鎮まる気配があったとしたら、勅旨は取り下げられるだろうか？」

春蘭の問いに、楊秀は自嘲的な笑みを浮かべながら頷いた。

「もちろんだ。陛下は無意味なことを嫌う。だが、ここまで蔓延したものが、自然と鎮まるはずがない。手遅れだ」

「一つだけ方法がある」

必ず疫を終息させられると、断言することはできない。しかし、なにもせずに手を拱いているよりはましだ。

「華安の守り神を訪ねてみようと思う」

建国の際、龍天山に祀られたと聞く。もしもその守り神が健勝ならば、疫を祓うことができるかもしれない。

守り神が消滅してしまった可能性はある。また、力が弱まり、すでに守り神としての役目を果たせずにいるかもしれないが、それでも訪れてみるだけの価値はあった。

それに、春蘭は華安の守り神がいきなり力を失ったことに疑問を抱いていた。もしかして、春蘭と同じようになにかあったのでは、と。

春蘭の決意に真っ先に反応したのは、啓璋と友寧だった。

「馬鹿！　そんなの、絶対危ないに決まってんだろ！」

「そうだよ、春蘭。山ってことは、また妖が出るかもしれないんだよ。それに、どうして春蘭がそこまでしなくちゃいけないの？」

「お前は、大人しくしてればいいんだ」

「せっかく妓楼から戻って来られたのに……」

四つの瞳が、春蘭へと向けられる。啓璋と友寧の意見はもっともだが、春蘭にも譲れないものがあっ

た。

「危険は承知のうえだ。止めても無駄だぞ」

春蘭が白桃という強硬手段に訴えれば、啓璋たちは手も足も出ない。卑怯だ、と彼らの視線が物語っているが、春蘭の気持ちは変わらなかった。

「春蘭。それは、勝算があってのことか？」

重苦しい雰囲気を纏った楊秀は、苦悩を滲ませた表情でそう訊ねてきた。

「断言はできぬ。だが、それ以外の方法が思い浮かばぬのだ。それにな、楊秀。嘆いていても、なにもはじまらぬ。そんな暇があるのならば、蟄居を命じられたことを利用して、犠牲となる者たちを一人でも多く救うべく行動しろ」

韓家の当主である楊秀ならば、できることはたくさんあるだろう。こんなところで燻っている場合ではない。

「まかせろなどと、大層なことは言えぬ。だが、最後まで足掻いてみようと思う」

脳裏を過るのは、妓楼で暮らす者たちのことだ。病人の看病に追われている者もいれば、体を蝕む病と闘っている者もいる。

それに、花家や、啓璋、友寧ら華安で知り合った者たちも、疫が終息しない限り安穏とはしていられないだろう。

たとえ、春蘭が守り神に戻った時、もう二度と会うことのない相手だとしても。幸せであってほしいと願う気持ちに、嘘偽りはないのだから――。

「私は行くぞ」

春蘭は決意を滲ませた眼差しで、室内の者たちを見回す。その中で、仲望だけがなにも口を挟まずに、真剣な眼差しを春蘭へと向けていたのだった。



西離宮の一室。人払いを済ませた部屋で、黎貴妃は深い罪悪感に襲われていた。

寝台に顔を伏せ、なぜ、と自問し続ける。

昨日、沸儀が禁軍へ勅旨を出した。それはいい。黎貴妃がそうしてほしいと望んだからだ。しかし、勅旨の内容は、華安の警備などという生易しいものではなかった。

――貧民窟及び、疫が蔓延している地域の焼き打ち。

暗に疫の罹患者も一緒に燃やしてしまえという意味が込められていた。だが、自分はそんなことを望んだわけではない。

沸儀は、最初から焼き打ちを行うつもりだったのだ。そうでなければ、次の朝に発表されるはずがない。それが黎貴妃の嘆願と被ってしまった。しかし、韓将軍がどのような理由で自分に面会を求めたのか、あの場にいた口さがない侍女や宦官たちから後宮内に噂として広まっているはずだ。

より一層、自分は恐れられるだろう。それ自体はかまわない。むしろ望むところ……。問題なのは、自分を頼ってきた韓将軍がそれを聞いてどう思うかだ。

――嫌われるどころか、憎まれてしまうかもしれない。

そう思うと、なぜか無性に胸が痛んだ。

「黎貴妃様」

侍女の声に、黎貴妃は苛立たしげな声を返した。

「なんの用？　一人にしておいてと、言ったはずでしょう」

「申しわけありません……ですが、管招達様が謁見の間においでになっておられます」

「それを早く言いなさい！」

寝台から飛び起きて、黎貴妃は立ち上がった。そして、手早く自分の格好を見直す。いくら御簾越しの対面とはいえ、歩いている間に誰と顔を合わせるかわかったものではない。

皇帝の寵愛を一身に受ける者として、寸分の隙も見せられなかった。

招達に面会の旨を申し込んだのは、黎貴妃の方だった。沸儀は、毎日必ず自分の許へ通ってくるわけでもない。

現に、昨夜はいくら待てども、沸儀が西離宮を訪れることはなかった。痺れを切らし、ならばと腹心の部下である招達に文を送ったのだ。

焦りをできるだけ押し殺し、西離宮から出た黎貴妃は、後宮の中央に位置する黄玉宮に向かった。小さな街ほどもある後宮内に自身の宮を持てるのは、皇后を筆頭に四夫人までとされている。それよりも下位の妃妾たちは、それぞれの位に合わせ黄玉宮の一室に部屋を持つに留まる。

謁見の間へと向かうためには黄玉宮を通らねばならず、予想通り、自らに向けられた視線には畏怖の色が宿っていた。中には敵意の籠った眼差しもあるが、それは四夫人のすぐ下に位置する者たちだろう。

いずれ取って代わる気でいるようだが、公子を産んだ黎貴妃の敵は皇后以外にいない。それも息子である博焚が太子の座を追われれば、その地位は自分のものだ。

黎貴妃は内心の憂いを押し隠し、堂々とした歩みで謁見の間へと入った。御簾の内部は暗く、かなり狭い。涼しい時季ならばまだしも、これが夏にもなると地獄そのものだ。

侍女たちが背後に控え、黎貴妃が椅子に腰を下ろす手伝いをする。護衛の宦官たちは、すでに配置を終えていた。

御簾内は暗いせいもあり、明るい場所にいる面会者の姿をよく見ることができる。黎貴妃は、少し離れた場所に膝をつく招達を見下ろし、言葉を選んでゆっくりと口を開いた。

「突然の呼び出し、申しわけありません」

「お気遣いはご無用です。私にできることであれば、なんなりとお申しつけください」

公子派として親交のある相手だが、味方であると思ったことは一度もない。言うなればこの男は皇帝派なのだ。沸儀が太子を押したのならば、その瞬間に太子派に鞍替えする。礼儀正しく振舞っているが、自分に対する忠義心など一欠片も持ち合わせていないだろう。

「禁軍への勅旨の件です。あれを、どうにか取り下げていただくよう陛下にお願いすることはできましょうか？」

「これはおかしなことをおっしゃいますな。そう望んだのは、貴妃様だと聞いておりますが」

「あのような……直接的な対処を望んだわけではありません」

一瞬、声を荒らげそうになった自身を、黎貴妃は必死で抑え込んだ。

いくら寵妃の頼みとはいえ、それだけであれほど大胆な行動にでるはずがないと、招達もわかっているだろう。

嫌味な相手だ。侍女たちには気付かれぬように、黎貴妃は招達を睨めつけた。

「初耳です。しかし、それが本当ならば、陛下は勅旨を撤回はなさらぬでしょう。他ならぬ、あなた様の頼みだったとしてもです」

やはり、決まっていたことだったのか、と黎貴妃は紅を塗った唇を噛んだ。この男がそれにどこまでかかわっていたかは不明だが、知っていて禁軍の将軍を自分の許へ向かわせたというならば、皮肉以外のなにものでもない。

「……どうにも、なりませんか」

「はい。弱者は切り捨てるべきというのが、陛下のお考えでもあります。あなた様も、よくおわかりのはずです」

唇を強く噛み過ぎたせいで、口内に鉄の味が広がった。膝のうえで握り締めた手が、怒りに震える。弱者を切り捨てた結果が、この国の状況であることになぜ沸儀は気付けないのか。

このままでは、いずれ華国は滅びるだろう。復讐を誓った黎貴妃にしてみれば、望むべきことであったが、犠牲となる民のことを思うと胸が痛んだ。

相反する感情は、未だ黎貴妃の心を苦しめ続けている。

「貴妃様。お力になれずに心苦しいのですが……会議が控えております故、申しわけありませんが、これにて退出させていただきます」

呼び止める暇もない、有無を言わせぬ口調であった。黎貴妃は、用は終わったとばかりに、さっさと立ち去って行く招達の背を見送るしかない。本来ならば無礼に当たるその態度も、忙しい仕事の合間を縫ってここまで来させたことを思えば、わざわざ連れ戻して咎めだてするのも躊躇われた。

得たものといえば、結局、禁軍への勅命に黎貴妃の嘆願がかかわっていなかったこと、それに幾ら哀願しても沸儀が意を曲げることはないという事実だった。

退出を促されてもなお、黎貴妃は招達がいた場所を憎々しげに睨みつけていたのだった。

黄玉宮から紫宝宮へと戻ってきた招達は、足早に沸儀の執務室へと向かっていた。

会議があると言ったのは嘘ではないが、それはすぐにではない。角が立たぬよう呼び出しには従ったが、あれ以上、謁見の間にいる必要性を招達は感じなかった。

普通の官吏ならば、黎貴妃の歓心を買うべくここ

ぞとばかりに慰めの言葉を発するだろう。しかし、招達には寵妃のご機嫌取りは必要なかった。

それに今更、黎貴妃がなにを言い募ろうと、沸儀がまともに取り合うことはない。貧民窟一帯と、疫の蔓延が報告された地域の焼き打ちは、黎貴妃になにを嘆願されようとも、沸儀の中ではすでに決まっていたことだったのだ。

招達が事前に知らされていれば、楊秀を黎貴妃に引き合わせたりはしなかった。結果、形としては黎貴妃が沸儀に、貧民窟とその周辺の焼き打ちを嘆願したのでは、という噂が流れることになった。

さすがにこれは招達の望むところではない。太子博焚が廃される時、皇后もその位を追われるのは明らかだ。華国を去るか、それとも毒を呷り自らの命を絶つか。どちらにせよ、新しい皇后の地位には次なる太子の生母、黎貴妃が就くはずだ。だが、悪辣な所業を理由に反対の声があがりかねない。

黎貴妃が皇后になるのならばと、中立の立場であった者たちが、一気に太子派へと傾く恐れがあった。沸儀の後ろ盾があるとはいえ、油断はできない。早い段階で、黎貴妃に対する噂を消しておいた方がいいだろう。

他人を蹴落とすことに余念のない妃妾たちが、黎貴妃を追い落とすべく団結でもすれば厄介だ。そう簡単に負けるような人物ではないが、万が一ということもある。わずかでも可能性があるならば、芽のうちに摘み取っておくのが賢明だ。

もっとも、それを沸儀が望まぬようであれば、手出しは控えるつもりであるが。

「職務外の仕事ばかりが増えるな……」

招達は複雑な溜息をついた。

窓もない迷路のように複雑な通路を抜ければ、皇帝の執務室のある一画へと辿り着く。

自分以外の者を信じていないのでは、と感じるほど沸儀は人を側に寄せつけることをしない。寵妃である黎貴妃は例外と思われがちだが、それでも極端

に色に溺れるといったこともない。

歴代の皇帝の中でも、沸儀以上に孤高を潔しとした者もいないだろう。

――人に愛される太子とは真逆の存在だ。

なによりも調和を大切にする博焚は、今回の勅旨についても、病床から嘆願書を沸儀へと送ってきた。むろん一顧だにされず、廃棄されたが。そもそも、病に倒れたこと自体、虚言ではないかという噂もある。

暗殺を恐れ、身を隠すための方便としてあえてそのように振舞っているのか。病床を見舞っても太子に面会が叶ったという話を耳にしないことから、その噂にもより信憑性が増す。だが、それもあまり長くはもたないだろう。病を理由に、廃嫡されかねないからだ。

「いや、太子のことを考える必要はない……」

頭を振った招達は、室内に向かって声を張り上げた。侍従の取り次ぎがないのもいつものことだ。ここにいるのは屈強な警備兵だけであり、それも沸儀自らが厳選した逸材である。

しばらく経って、沸儀本人の「入れ」という短い返答があった。執務室を訪れる際は、いつもまったく同じやり取りが交わされる。

「勅旨の件で報告に参りました」

深々と拱手したあとで顔を上げれば、これもいつものように執務机に向かい、淡々と書類を片付けていく沸儀の姿があった。

四十五を数える今でも衰えぬ筋肉は、官服の上からでも隆起するのが見て取れるほどだ。常に消えることのない気難しげな表情や、全身から放たれる威圧感は、凡人ならば側に寄るだけで冷や汗が止まらなくなる。

まさに皇帝として、華国の頂点に相応しい人物だった。

「準備は滞りなく進んでおります。多少、疫の蔓延している地域の把握に手間取っておりますが、それ

も明日までには完了する予定です。また、把握できている箇所からの延焼に備え、外周に位置する建物の取り壊しも同時並行で行わせております。今のところ、抵抗する者はごく少数で、活動に支障はないとのことでした」

「そうか」

「なお、今日も勅旨を撤回してほしいとの嘆願が、官吏たちから寄せられておりますが――いかがいたしましょう？」

「蟄居を命じておけ。それでもうるさく喚く者がいれば、見せしめとして殺せ。しばらくは、それで静かになるだろう」

「承りました」

実際、黎貴妃以外にも招達の許に沸儀への執り成しを願う文が何通も届いている。いくら言葉を重ねたところで、沸儀の意志が変わることなどありうるはずもないのに。

愚かなことだと、招達は内心で嘲笑った。

「それではまた明日、報告に参ります」

深々と拱手するが、沸儀から労いの言葉がかかることはなかった。むしろそれが当然であり、労られた日にはなんの不興を買ったのかと、逆に慌ててしまう。

執務室を辞した招達は、再び薄暗い通路へと戻った。これからの予定を反芻しながら、来た時よりも早い速度で足を動かす。必ずといっていいほど、沸儀の執務室から戻る帰りに顔を合わせる人物と出くわさないためだ。その頻度たるや――たまに見張られているのでは、と疑いたくなるほどである。

案の定、通路をこちらへと向かってくる一つの影があった。勘違いであってほしいと願うも、招達は、近くで見た姿に深い溜息をつきたくなる。

「これは管侍中。ここのところ、よくお会いしますね」

にこにこと満面の笑みを浮かべる男は、紅筝言といった。

年齢は三十代前半だろうか。宦官を髣髴とさせる男らしさの欠片もない細っそりとした体付きに、優男のような容貌。

なによりも際立っているのは、病的なまでに青白い素肌だ。それとは対照的に、筝言の唇は紅を塗ったように赤々としているのも特徴だった。

「また、陛下にお会いした帰りですか？」

「だったらどうだというのです」

「なぜ、そんな喧嘩腰なのです？　せっかく会えたのですから、せめて愛想笑いくらいしてもよいのではありませんか？」

考えただけでも虫唾が走る。思わずもれそうになった舌打ちを、招達は堪えた。この男に愛想よくするくらいならば、太子派の面々に笑顔を振り撒いた方がよほど有意義だろう。なにを企んでいるのかと、勝手に悩んでくれる。

「残念ですねぇ。まあ、今日はこちらも急いでいるので、名残惜しいですがこの辺で失礼します。また の機会を楽しみにしておりますよ」

人によっては蠱惑的にも見える笑みを浮かべ、筝言は去っていった。

招達は珍しいこともあるものだと首を傾げる。いつもならば嬉々として絡んでくる筝言に痺れを切らし、撥ねつけるようにして立ち去るのは招達の方と決まっていた。

だが、今日は勝手が違ったらしい。心なしか今日の筝言には、いつもの覇気がなかったように思う。だからといって心配するわけでもないが、気に掛かったのは事実だった。

入室の許可すら取らずに入ってきた筝言を、沸儀は咎めだてしなかった。それは唯一、筝言にのみ許された特権でもある。もっとも、許されたところで畏怖の対象である皇帝に、不遜な態度を取れる者は限られているだろうが。

「報告に参りましたよ」
「ずいぶんと、参っているようだな」
「わかります？　補充がなくなってしまったので、交替で私も参加しているんです。あと一人倒れれば、陛下への報告も滞ってしまいますが……その場合は、順調に進んでいると思っていただいてかまいませんよ」
「そうか」
あまりにも簡素な返答に、筝言は唇を尖らせた。己が主として忠誠を誓った相手ではあるが、つくづく面白味のない人物である。
しかし、からかって遊ぶにはあまりにも緊張感のある相手であり、下手をすれば首が飛ぶ。命懸けの遊びをするほどまだ自分は壊れていない。
――やはり、からかうなら管侍中が最適だ。
緊張感には欠けるが、充足は得られる。特に怒りを堪えながら、どうにかして一泡吹かせようと、躍起になっているところがまたいい。声をかけられても無視を決め込めばいいのに、いちいち立ち止まって応対するあたり、生真面目な性格が現れているといってもいいだろう。
「そういえば、貧民窟一帯とその周辺で疫が流行っているそうですね」
返答はない。沸儀の視線はすでに机上の書類へと向けられている。筝言はかまわずに言葉を続けた。
「やはり、地脈を流れる気が滞ってしまいましたねぇ。どこよりも先に貧民窟への影響が見られたのは、予想通りでしたが」
吹き溜まりのような場所は、そこを流れる気も淀んでしまうことが多い。通常ならばすぐに回復するそれも、今は難しいだろう。結果、疫が流行ったというわけだ。
「さっさと太子が死んでくれたらいいんですけどね。疫を終息させるもっとも有効な手段は、自分が死ぬことだと教えてさしあげたら、あの方はどうするんでしょうねぇ」

どれほどの善人でも、じゃあ自分が死んで終わりにしますとはならない。確実に筝言を疑い、むしろこちらが悪であると断罪してくるだろう。それではつまらない。

「筝言。いつまでも無駄口を叩かずに、持ち場に戻れ」

「じゃあ、黙っていれば、いつまでもここにいていいということですか？」

つい口を滑らせてしまったそれに、刃よりも鋭い一瞥がもたらされた。いつもより深く踏み込んでしまった。背を冷や汗が流れる。ああ、でもこの緊張感が堪らない――。

だが、一族の復興を大義名分に抱えている手前、自重すべきところはわきまえているつもりだ。

「はいはい。では、言いつけ通り持ち場へと戻りますよ」

最後は形ばかりの拱手をして、筝言は部屋を出た。歩く度に軽い眩暈を感じるのは、先ほどまで不眠不休であれを行っていたせいだろう。あと少しで最終段階へと進む。そうなれば、太子はもう逃れられぬだろう。

「……なんだか、あっさりと一族の復興が叶ってしまいそうだな」

部下の者たちが聞いたら、怒りを露にして窘められそうな台詞を、筝言は誰にともなく呟く。むろん、紅家の復興は一族の悲願だ。そのために、数多くの同胞たちが犠牲となって歴史の闇に消えていった。

自分の代でそれが成せることは嬉しいし、今という時を逃せば、もう二度と紅家が表舞台に立つことはないと感じていた。

しかし、それとは別に筝言は太子側の反撃を楽しみにしていた。障害のない成功など、達成感がないではないか。

「かといって、わざと手掛かりを残すのもねぇ……」

まず間違いなく、部下たちから叱責を食らうだろ

う。

　筝言を赤子の頃から見知っている大人たちは、当主だというのに時たま我が子を叱りつけるような態度を取る。また、筝言も殊の外それに弱かった。

「しかたがない。まあ、主上の側にいれば、いずれ面白いものが見られるだろうし」

　今は我慢して仕事に没頭しますか、と筝言は呟きながら、隠し部屋がある建物へと続く通路に向かったのだった。

　紫宝宮のすぐ近くに隠し部屋を作ったのは、宮を建てた皇帝だった。賊の侵入を恐れていたようだが、歴史書を見ても宮中に賊徒が乱入したという史実はない。誰にも使用されぬまま時だけが流れ、皇族とは関係のない筝言の手へと委ねられた。

　その使い道を知れば、あまりの皮肉に当時の皇帝は複雑な気持ちになるだろう。皇族を逃がすために作った場所が、今は太子の命を奪うことに利用されているのだから。

「戻ったよ」

　けっして広くはない室内に足を踏み入れれば、薄暗い室内の中央に、円を描くようにして座る五名の男たちの姿があった。足許の土間には、緻密に掘られた文様があった。その要所には、玉が置かれている。

　全身だけでなく、顔も隠すように頭から黒い頭巾を被っている者たちは、ただひたすら言葉を紡ぎ続けていた。

　傍から見れば異様な光景であるが、筝言は全員の様子をしっかりと確認したあと、手前に座っていた者に声をかけた。

「交替するよ。しばらく、休むといい」

　頭巾のせいで表情を窺うことはできなかったが、男は遠慮することもなく、体を引き摺るようにして場所を筝言に明け渡した。

　筝言が交替を申し出たのは、疲労の度合いが一番に濃い者ではなかった。隅で休んでいるのは、二番

目に疲労している者である。一番は、ここで休ませても大して回復しないまま終わるだろう。

ならば、二番を休ませ、一番に限界が訪れた時に二番が交替すればいい。その頃には、術も最終段階へと入っていることだろう。

これに参加した者たちは、初めから死を厭う気持ちはない。一族の復興のためならばと、命を投げ捨てる覚悟だ。だからこそ、筝言は部下に対し、一切の手心を加えない。彼らがそうあることを望んでいるからだ。

筝言が定められた言葉を紡ぎ始めれば、近くにある玉に淡い光が点る。光は明滅を繰り返し、それに呼応するかのように、他の玉も明るさを増した。

――あと少し。

筝言は、ゆらゆらと揺らめく光の渦を見つめながら、ゆったりと笑むのだった。

市が広がり、人々の往来も激しいそこで、橋の欄干に登って大声を張り上げる男がいる。その周囲には人垣ができており、誰もが足を止めてその演説に耳を傾けていた。

「――病は拡がりつつある。にもかかわらず、暗君は対策を取ろうともしない。我々、民を人とも思っていない証拠だ。このまま黙って死を待つつもりか。それを、愛する者たちにも強要するつもりなのか！」

おお、と聴衆から同意の声があがった。男はさらに声を張り上げる。

「暗君の顔色を窺っているような官吏に、なにができる！　暗君の狗となり下がった禁軍に、なにができる！」

男の右腕には、朱色の布が巻かれていた。それだけが、この男の唯一の特徴といえる。

顔はこれといって記憶に残るものでもなく、目が細く狡猾そうな印象を受ける。年齢は三十歳くらい

だろうか。背も低くやや猫背気味なのだが、その声はなぜか遠くまでよく響いた。

しかし、その演説は唐突に終わりを迎えた。男は腕に巻いた布を外すと、慌てて欄干から飛び降り、脱兎の如く駆けだした。はじめは目で追っていた聴衆も、すぐにその姿を見失う。そして、入れ換わるように龍乎の衛兵が、場に乱入した。

「猩猩緋はどこだ！」、「逃げ隠れせずに大人しく出て来い！」、「くそっ、また逃げられた！」と、龍乎の衛兵らは悔しげに叫ぶ。

群衆に紛れた男は、悪態をつく者たちを一瞥し、大路を進む人々の流れに乗るように悠々とした態度でその場をあとにしたのだった。

やがて、男が馴染みとしている料理店につく。庶民向けの素朴な料理が自慢の店で、大抵はここで腹を満たすことが多かった。

店内は昼のかき入れ時をすぎたこともあって、客は少ない。薄暗い店内をぐるりと見回した男は、奥まった場所にある席に腰をかけた。

「残りもんでいいから、適当に頼む」

店員に声をかければ、愛想のよい顔で頷かれた。額に滲んだ汗を袖で拭いていると、目の前の席にいつ見ても見目のよい青年が座った。癖のある髪を無造作に束ね、町人風の短服を身につけている。

彼ならば、ただすれ違うだけでも誰かしらの記憶に残りそうだ。特にそれが若い女ならば、振り返るくらいはするだろう。

青年は、男に聞こえる程度の小声で話す。

「見事な逃げっぷりだな」

「合図するのが、少し遅くないですか？」

「絶妙な頃合だっただろ」

にやにやと人を食ったような笑みを浮かべる青年は、名を郭洪釆といった。それに嘆息しながら応対する男は、応槍幽という。ともに猩猩緋の一員だ。

「焦らせないでくださいよ」

「平気だって。なんのために俺がいると思ってん

の」

「あのですね、真昼間から大立ち回りを演じる馬鹿がどこにいるんですか。民衆を巻き込むのは紅主の訓えに反しますよ」

むろん、洪采も本気で言っているわけではないだろう。ただし、実際に槍幽が捕らえられるようなことになれば話は別だ。愛用の槍を携えて龍乎に躍りかかっていくはずだ。

「絶対に止めてくださいよ。今は民の不満を煽るだけで充分なんですからね？」

「わかってるさ」

血気盛んな若者らしく、地道な抗議活動は肌に合わないようだ。確かに、今まで彼が手掛けてきた数々の任務に比べれば、槍幽の護衛は物足りないだろう。

だが、徐々に病が華安を蝕む中、派手な動きに意味はない。ならば、燻っている朝廷への不満を煽るだけ煽ればいい。病が終息する頃には、それが憎悪に変わっているはずだ。

「そういえば、冬雁さんから連絡はありましたか？」

「いや、ないな」

槍幽が頼んだ料理が運ばれてくると、洪采は嬉々としてそれに手を伸ばした。溜息をついて、槍幽は同じのをもう一人分、と店員に告げる。

「じゃあ、まだ動きはないんですかね」

「強がりってことも考えられるな。あいつ、俺によく突っ掛かってくるし」

「冬雁さんはそうでも、下についてる奴らは違うでしょう。こっそり連絡を寄越すくらいのことはしますよ」

本当にまだ動きはないのだろう、と槍幽は、龍天山で極秘任務についている同僚について思った。

「しかし、実際のところ、それが今回の流行り病に関係してるんですかね？」

「さあな。ただ紅主のおっしゃることは、いつも的

を射てる。たまに未来を見通せてるんじゃないかっていうくらい的確だ」

「頭の回転が速いっていうか、もはや人智を超えた存在ですよねぇ」

だからこそ、猩猩緋はここまで勢力を拡げられた。華安に潜伏する構成員は、すでに百人を超えている。誰も彼も仲間に引き入れるのではなく、絶対に猩猩緋を裏切らない——裏切れない人間に重点をおいて勧誘してきたおかげで、こちら側の情報が漏れるということはなかった。

地道な活動も、徐々に成果をあげ始めている。そう遠からず、世は朝廷への怨嗟で満ちるだろう。その時こそ、猩猩緋が今まで以上に脚光を浴びるのだ。

「……そういえば、あれは本当なんでしょうかね」

「ん？」

新たに運ばれてきた饅頭を頬張りながら、洪采は視線だけを槍幽に向けた。よほど腹が減っているのか、皿に盛られた肉饅頭が次々に洪采の胃袋へと収まっていく。

「今朝方に届いたやつですよ。流行り病への対応策が〝焼き打ち〟だなんて、狂ってるとしか言いようがありません」

「宮中にいる内通者の大半から、似たような報告があったんだろ？　なら事実だと思うけどな」

あっさりとした口調でそう告げた洪采だったが、瞳に宿るのは紛れもない怒りの感情だった。

「あの残虐非道な皇帝様のことだ、躊躇いもなく命じる姿が目に浮かぶよ」

「黎貴妃も関与しているようだという情報もありましたね。寵妃が焼き打ちを進言したのでは、と疑ってる者も少なくないようです」

「だとすれば、似合いの夫婦じゃないか。大事なのはそれが事実で、実際に焼き打ちが始まるってことだ」

突きつけられた現実に、槍幽は重い溜息をついた。

「はぁ……地道な抗議活動どころじゃなくなります

ね。楽でよかったのに」
「義賊としては、黙って見過ごすわけにはいかないからな。これから忙しくなるぞー」
　単調で刺激の少ない任務に飽き飽きしていたのだろう。洪釆は楽しげな笑みを浮かべた。
「とりあえず、今日はここまでにして隠れ家に戻りますか」
「そうだな。帰ったら、槍でも砥ぐか」
　今は洪釆が裏方だが、いざ禁軍との戦闘になれば、槍幽が補佐に回る。作戦を練るのは別の者になるだろうが、地図を集めたり、禁軍の進軍経路を調べるのは槍幽の役目だ。
　これからは、寝る間も惜しんで動き回る日々が待っているに違いない。溜息をついて、槍幽は手元の肉饅頭に齧りついたのだった。



白桃の背に揺られながら、春蘭は不機嫌に前を行く複数の背を見つめていた。

同行者は全員で四名。うち一名は、まだ怪我が治り切っていない仲望である。龍天山には春蘭一人で向かうつもりだったのだが、それに異を唱える者がいたのだ。

楊秀と仲望である。

本来ならば楊秀は、韓家の屋敷から外に出ることすら禁じられているにもかかわらず、自分も同行すると言い張った。

だが、蟄居を命じられた者が華安の外に出るということは、皇帝へ叛意ありと見做される。一族まで危険にさらすつもりかと、仲望だけでなく、春蘭も交えて説得した結果、楊秀は渋々と同行を諦めることに頷いた。

仲望にかんしては、啓璋と友寧が顔色を変えて引き止めようと必死になったが、本人が頑として引かなかった。

終いには涙を浮かべながら、二人に「旦那様をよろしく……」と託されてしまったほどだ。

よろしくと言われても、一人で向かう方針を変えるつもりはなかった。春蘭は、口では了承しつつも夜半にこっそりと鄭家を出るつもりだった。しかし、それは仲望に読まれていた。

房室から出たところを捕らえられ、有無を言わさずに部屋へと連れ戻されてしまった。怪我人を連れて行けるかと主張しても、大丈夫だの一点張りで今に至る。

しかし、同行者はそれだけではなかった。早朝、

頑なな仲望の態度に憤っていた春蘭の目の前に、龍乎の姫子慮、袁道順、蘇覚程の三人が旅装を調えてやってきたのである。唖然とする春蘭に向かって子慮は、「楊秀の野郎に頼まれて来てやったぞ！」と、豪語した。

怪我人の仲望と、春蘭の二人だけでは心許ないと、いらぬ気を利かせて護衛を手配してくれたらしい。なぜ子慮たちなのかと問えば、「受けた恩は返さなきゃなんねぇだろ」と返された。

どうやら、子慮は以前、山に入った人足たちが行方知れずになった件で、仲望と春蘭に恩義を感じ、今回を恩返しの機会と捉えているようだった。

そして、慌ただしく出立となり、今、白桃に乗った春蘭の目の前を歩いているわけである。どれほど同行を拒んでも、こうしてついて来られてしまってはどうすることもできない。

白桃を走らせ振り切ることも可能だったが、行き先を知られているのでそう簡単には諦めてくれないだろう。ならば、さっさと白旗をあげた方がいい。

未だ仲望に対し、複雑な感情を持て余している春蘭にとって、どう接すればいいのかわからないままの道行きは苦痛だった。

華安を発った春蘭たちは、都の北に位置する龍天山を目指していた。日帰りはさすがにむりだが、数日を要する旅ではない。山自体は華安から近く、歴代皇族の離宮が建てられていることもあって、整備された道は意外と奥まで続いていた。

お陰で予定よりも早く社に辿り着くことができる。こうしている間にも、焼き打ちの準備は刻々と整えられているのだ。急がねばならない。

道が途切れた場所で馬を木に繋ぎ、そこからは徒歩で進む。むろん、春蘭だけは白桃の背に揺られていたが。

周囲は鬱蒼とした木々に覆われているが、以前、分け入った山に比べれば、歩き易い。守り神を祀った際に利用したであろう山道が、草木に隠れるよう

にして姿を残していたのも幸いだった。
　山の緩やかな斜面に、微かに道とわかるほどの跡が蛇行するように続く。自然の中にあって、そこだけは人の手が加えられているようだ。だが、さすがに二百五十年も前に整えられた道が、そのまま残されているはずがない。
　少なくともここ一、二年の間に、この場所を通った人間が複数いると見て間違いはないだろう。
「しかし、なんの目的でここを訪れたのだろうな……？」
　考えてみても、適当な答えは浮かばなかった。
「どうしたんだ、ちびっ子？」
　視線を右側に向ければ、子慮が覗き込んでいた。年齢は二十五。精悍な顔立ちに、やや吊り上がった目尻。たまに浮かべる得意げな表情は、我の強い子慮の内面をよく表している。
　旅装の上から胸当てと籠手だけをつけ、腰に佩くのも一振りの剣だけである。騎乗してきた馬への負担と、山道を歩く際、途中で体力がなくなってしまわないように配慮した結果だという。いざ敵とかち合っても、武具の重さで負けてしまっては意味がない。
「疲れたのか？」
「平気だ」
　急な斜面もないため、春蘭も気楽に白桃の背に乗っていられる。以前、白桃にしがみついていたら掌に血豆ができてしまったため、今日は事前に手に布を巻いていたが、この分ではそれも必要なかったかもしれない。
「ところで、子慮。ぬしはこのようなことをしている場合なのか？　龍乎は華安の警備に奔走していると聞いたのだが」
「ああん？　最近は、ちびっ子の手も借りたいくらい忙しいぞ。終刻の鐘が鳴ってもたむろしてる奴が多くてな。どこの牢も満杯だ」
「ならば、私に付き合っている暇などないのではな

いか？」

　これは純粋な疑問である。華安を守る龍乎の、それも虎慈軍隊長という要職にある子慮が、いくら楊秀の頼みとはいえ、忙しい中、仕事を放り出してくるはずがない。

「あー、文重に追い払われた」

　思いがけず、子慮の有能な副官の名が出た。隊長が迷惑をかけたと聞けば代わりに頭を下げ、迷子になったと聞けば隊長を捜し回り、ありとあらゆる面で子慮を支え続けている人物だ。

「なにをしでかしたのだ？」

「禁軍の奴らを邪魔してやったんだよ」

「……ふむ？」

「あいつら、勅命だかなんだか知らねぇけど。疫病を街ごと焼き払っちまおうってんだろ？　だから、それを阻止しようとしたんだ」

　子慮の気持ちもわからなくはないが、龍乎の隊長としてあるまじき行為だった。顔を真っ青にして止めにかかる気の毒な文重の姿が思い浮かぶ。

「そんな時に、楊秀の野郎が詰所にやってきてよ。そしたらよ、文重の奴、護衛としてお前らに同行しろってうるせぇの。まあ、しかたねぇから来てやったけど。あいつは絶対、俺から隊長の座を奪うつもりだ！」

「ならば、とっくの昔に子慮は隊長の座から追い落とされているはずだぞ。下らぬことは考えるな」

　そうなると事情を知る道順と覚程は、迷子防止のために子慮につけられたのではと思っていたのだが、華安に戻って好き勝手やらせないための見張り番なのかもしれなかった。

「体よく押しつけられたわけか……」

　ぽつりと呟けば、前方を行く道順と覚程の肩がびくっと跳ねた。どうやら、こちらの会話が聞こえていたらしい。

「や、やだな、春蘭ちゃん。人聞きの悪いこと言うなよ」

わざとらしい口調でこちらを振り返ったのは、道順だった。十九になる青年は、陽気という言葉がよく似合う。

黙っていることが苦手なのか、道中でもあれこれと春蘭に様々な話題を振ってきたものだ。もっとも、山に入るまで子慮の馬に相乗りさせてもらった春蘭は、舌を噛まないようにするのに必死で、まともな受け答えはできなかったが。

対する覚程は、道順の真逆といっても過言ではない。年齢は二十二。背格好はまったく同じなのだが、こちらは驚くほどに無口な青年だった。たまに喋っても二言三言で終わってしまい、表情も道順に比べれば乏しい。

「違うのか？」

「いや、ほら俺たちは護衛だって、護衛。必要だろ？」

「この程度の森など、白桃がいれば事足りるのだが。実際、妖がいる気配もないようだ」

「ええと……そうだ、野盗だ！　野盗がたくさんいるかもしれないぞ？」

「そんなものが山ほどいたら、ぬしらがいても捕まってしまうと思うのだが」

「大丈夫。隊長は馬鹿みたいに強いから！」

「誰だ馬鹿って言った奴は！」

「ひいっ、俺ですっ」

なんとも緊張感に欠けるやりとりに、春蘭は溜息をついた。そして、春蘭たちから少し離れたところを行く仲望に、さりげなく視線を向ける。

そもそも足が悪いのと、今まで寝たきりの生活をしていた影響から、心なしか歩みは遅い。額を流れる大量の汗と大きく上下する肩が、仲望の不調を雄弁に物語っていた。

――だから、むりはするなと言ったのだ。

それを強行したのは、他ならぬ仲望自身である。自業自得の者を、春蘭が気にする必要もない。そう自分に言い聞かせ強引に前を向いた。

「ところでちびっ子。これはいつまで歩きゃいいんだ？」

時刻はすでに昼を回っている。春蘭は山に入ってから定期的に繰り返していた占を思い浮かべ、「もう少しだ」と答えた。

人捜しと違い、華安から龍天山に伸びる地脈を辿っていけば、いずれ社に辿り着くという自信があった。

社は、守り神が力を振るいやすくするため、地脈がより多く集合している、いわゆる源泉のような場所に祀られる。春蘭が守り神として崇められた場所も、似たようなところであった。

「そう遠からずして、社に辿り着くことができるだろう」

そう告げた春蘭に、子慮は意味深な笑みを見せた。

「そうか。でもなぁ。そう簡単には、辿り着かせてはもらえないみたいだぜ？」

「バウッ！」

子慮の言葉に、白桃が同意するように咆えた。

「虎野郎も気付いたか？」

「子慮。白桃は雌だ。野郎ではない」

「いやいや、その雄々しい顔付きはどう見たって雄だろ」

「雄々しい？　可愛い、の間違いだ」

「じゃあ、証拠を見せてもらおうじゃねぇか。おら、虎野郎。仰向けになれ」

「恥を知れ、馬鹿者が」

「……あの、隊長。そんなことで口論しないでください。それよりも、な、なんかいるんですか？」

剣の柄に手をかけながら、道順は不安そうに辺りを見回し、覚程も同じように周囲に警戒するような眼差しを向けた。

「さっきから、じーっと見られてたじゃねぇか。なんで気付かねぇの？」

「バウウッ？」

どうしてわからないの、という風に白桃も首を傾

げる仕草をした。それに道順は、首を横に振って力の限り訴える。

「隊長と白桃ちゃんみたいに、野生の勘が優れてるわけじゃないんですっ。文重さんっ、俺もう耐えられません！」

やはり、文重ではないと子慮の相手は務まらないと、さめざめと泣く道順だったが、それでも剣の柄から手を放さないあたり、やはり龍乎に所属する衛兵なのだろう。

「お、なんか来るみたいだぞ」

緊張感に乏しい子慮の声に、全員が臨戦態勢を取る。道順と覚程は背中合わせに、子慮は剣を抜き放ってはいるが余裕のある様子で、そして、仲望は春蘭を守るように体を寄せた。

一瞬、背に回された腕を振り払いたい衝動に駆られるが、警戒の色を強めた白桃に気付き、湧きあがる気持ちをむりやり抑え込んだ。

「真上だ！　横に飛べっ！」

道順と覚程を蹴り飛ばした子慮は、自身もそのまま地面を転がるようにして逃げる。

子慮とほぼ同時に反応していた白桃は、素早く仲望の背後に回り込み、腰紐をくわえると見事な跳躍を見せた。

鋭く空気を切り裂く音がする。

見れば、先ほどまで春蘭たちがいた場所に、六本の匕首が突き刺さっていた。その柄の部分には細い紐が結ばれており、一瞬ののち、跡形もなく回収されてしまう。

「おいっ、ぼさっとすんな！　さっさと走れ！」

子慮の叱咤に、道順と覚程が慌てたように森の奥へと走り出した。

「仲望、お前もちびっ子を連れて先にいけ！　ここは俺がなんとかしてやる！」

「あまり無茶をするなよ！」

仲望はそう返すと、春蘭を乗せた白桃と共に駆け出した。春蘭も振り落とされないように、白桃にし

がみつくので精一杯だ。

すぐ傍で、刃物がぶつかり合う鈍い音が響く。こちらに向かって投擲された匕首を、仲望が叩き落としたのだろう。

「お前の相手は俺だって言ってんだろ！」

子慮の声が響くと同時に、春蘭たちへの攻撃も止んだ。

その場を子慮に託した二人は、しばらくそのまま走り、敵の気配がなくなったところで白桃が速度を緩めた。

隣を見れば、同じ速度で疾駆してきた仲望が苦しげに胸を上下させていた。

「……だから、怪我人はついて来るなと言ったのだ」

木の根元に座り込んだ仲望は、汗で張りついた髪を掻きあげながら、困ったように笑う。

「迷惑をかけて、すまないな」

「そういう意味ではない」

素直に足の状態や体の調子を訊ねたいのに。どうしても、そうは言えなかった。

「……少し休んだら、すぐに社へ向かうぞ。この先になにかあるようだ」

本当は、助けてもらった礼を言いたい。だが、口にできない。それが歯痒くて、春蘭はつい八つ当たりのような態度を取ってしまうのだ。

こんなことではだめだ、と春蘭は頭を振る。龍乎の三人とは完全に逸れてしまった。それでも、道順と覚程ならば辛うじて続いている道を辿り、社へ向かうなり下山するなりできるはずだ。

問題は、子慮だ。極度の方向音痴で、道を見つけたとしても無視してどこまでも突き進んで行くだろう。

春蘭の心を読んだかのように、仲望が口を開いた。

「子慮のことなら、心配はないよ」

「……なぜ、そう言える？」

「あれの方向音痴は、街中だけに限られるんだ。こ

ういう山奥だと、まず迷うことはない。すぐに合流してくるはずだ」

そう言われてみれば、子慮たちが山で遭難した際、彼は迷わずに文重が休んでいた洞窟へと戻っていた。あの時、周囲には目印などなかった。

「それはまた、野生の勘が優れているにもほどがあるぞ」

唖然とした春蘭であったが、合流できるのならば問題はない。これで誰に気兼ねすることなく社へと向かえるだろう。

「あと、先ほどから言おうと思っていたんだが……地脈を視るならば、こちらの方が簡単だ」

仲望は、前髪で隠されていた右目を露にした。四年前の戦の最中に異常をきたして以来、地脈を流れる気を直に視ることができるようになったのだという。

普段は煩わしさから前髪で隠しているようだが、確かに一々水神盤を取り出すよりも楽である。

だが、春蘭はそれに頷くことはできなかった。

「平気だ。ぬしも疲れているだろう。地脈の流れは私が視る」

春蘭の拒絶に、仲望は一瞬だけ悲しげな表情を浮かべたあと、「そうか」と呟いた。仲望に背を向けた春蘭は、目の前にあった白桃の体にしがみつく。胸を苛む痛みには気付かない振りをして。

木の枝から枝へと、身軽に飛び移る小柄な影があった。全身を黒い装束で覆い、顔も目の部分を除いて同じ布で覆い隠している。

唯一の特徴といえば、右の二の腕に巻かれた血のように赤い布だろうか。それは黒地に映え、遠くからでもよく目立っていた。

名は冬雁。義賊、猩猩緋の構成員である。

「冬雁様。いかがいたしましょう？」

背後から追ってきた男が、采配を求めてきた。男

が問題にしているのは、龍天山に姿を現した奇妙な者たちのことだろう。

一人は片足の不自由な男。三人は武具から龍乎の衛兵だということがわかった。それに、真っ白な大虎に跨る、十歳ほどの少女だ。

配下からの報告を受けた冬雁も、自分の目で見るまでは信じられなかった。目にした今でも、妖術の類かと疑いたくなる気持ちでいっぱいだったが。どう考えても、大虎に子供が平然と跨っていられるとは思えなかった。

とにかく、あの者たちは招かれざる客だ。冬雁に指示を出す人物からは、侵入者は追い返すか殺すようにと命じられていた。

あと腐れがないのは、殺す方だ。だが、山で行方知れずとなった者を捜しに、また別の侵入者が現れるかもしれない。特に五人のうち三人は龍乎兵だ。結束が固いことで知られている。

「追い返すか……しかし、しつこいようでも困るな」

いったい、なんの目的でここを訪れたというのだろうか。やがて、木の枝を移動する冬雁の背後には、三人の配下が揃っていた。

「……あれに関係があると思うか？」

「情報が少なすぎます。今の段階で判断するのは早計かと」

三人の中でも、年配の配下が返答した。年長者だけあって、常に慎重な姿勢を見せる男は、名を鷗河（おうか）という。

「いっそのこと、捕まえて吐かせればいいのではありませんか？」

続いて発言したのは雀良（じゃくら）と呼ばれる男で、年齢は鷗河よりも五つ下の二十八だ。物事を単純化してしまう癖があり、「拷問すれば簡単ですよ」というのが口癖だ。

「馬鹿。そんなことしたら、白でも黒でも口封じしなきゃいけなくなるだろ！　冬雁様にそんなことを

させられるか！」

最後に発言したのは、吾鴉と呼ばれる少年である。まだ十七になったばかりの若者で、実力はあるが敵に対し非情になり切れない。雀良とは正反対の性格である。

三者三様。まったくもってまとまりのない配下に、冬雁は溜息をついた。

「とりあえず、社へ近付けることは絶対にできない。それは兎天様から、きつく言い含められている。わかっているな？」

冬雁の言葉に、三人が頷く気配があった。殺すにしろ追い返すにしろ、重要なのは社に誰も近付けさせないということだ。

「集団ではこちらの歩が悪い。まずは、一人ずつ確実に対応できるように、ばらばらにする。お前たちは社に戻れ。見逃した者が、そちらに辿り着いてしまうかもしれない。下山した者については……放っておくように」

あの中で一番体格のよかった男は、なかなかの遣い手と見た。こちらに損害が出るくらいならば、命を取らずに追い出すのが賢明だろう。それに、ずいぶんと人に慣れた様子の大虎も、襲い掛かってくるとなればかなりの脅威だ。

「……もう少し、早めに発見できていたのならばこんなことには。申しわけありません、冬雁様」

「鷗河。過ぎてしまったことを気にするな。次に活かせばいい」

そもそも、滅多なことでここを訪れる者はいない。念のために見張りは立てているが、変化に乏しい自然の中では、だらけてくる者がいたとしてもおかしくはなかった。

侵入者の報告が遅れたのは、そのせいもあるだろう。本来ならば内部まで辿り着く前に、対処しておきたかった。

つまるところ、冬雁の怠慢だった。知らぬ間に緊張の糸を緩ませていたのは自分も同じこと。これで

は師である兎天に顔向けができぬと、冬雁は項垂れた。

「それに、洪采には負けられぬ」

三人には聞こえないように呟いた。

同世代の同僚には、今のところかなりの差をつけられている。この件も、はじめは洪采に割り振られる予定であった。それを冬雁がむりを言って任せてもらったのだ。

――だからこそ、なにがなんでも失敗は許されない。

重要なのは過程ではなく結果だ。無事に不審者を撃退できれば、兎天は自分を褒めてくれるだろう。そう思い直すことにして、冬雁は懐に忍ばせている匕首の束を取り出した。

柄に強度のある紐を結ぶことによって、回収を容易くしたものだ。常に資金不足に喘いでいる猩猩緋では、武器や防具は貴重なものである。匕首一つですら無駄にはできない。

戦闘が終わったあとでいちいち拾うのも面倒であり、またそんな暇がない時に大活躍する一品である。むろん、扱い方にはこつがあり、勢いよく引っ張ると酷い目に遭うことも少なくない。

血の滲むような練習の結果、冬雁は瞬時に匕首を回収する術を身につけることができた。むろん投擲の威力も折り紙つきだ。

「ここは私が一人で対処する」

「――お気をつけて」

「なにかあったら、すぐ逃げるんですよ」

「あの、やっぱり離れたところから見守っていちゃだめですか？」

「さっさと行け！」

気配が消えた。優秀な配下だが、三人とも過保護すぎる傾向にあった。指揮官である冬雁が、年齢的に若いこともあるだろうが。それでも、もう二十二だ、と冬雁は呟く。

「そう考えると、問題は私の背か……？」

いつ成長期が終わったのかすら、むしろ成長期があったかすらわからぬほど育たなかった身長のおかげで、黒衣を着ている時ですら子供扱いを受けることが多い。

いや、外見など問題ではない。大切なのは、能力だ。冬雁は六本の匕首を指の間に挟み、気配を殺し集団の背後へと回った。

今の時季、青々と生い茂った葉は、冬雁の体を充分に隠してくれる。任務の成功を確信し、まずは集団を分断するべく、別の枝に飛び移りながら匕首を投擲した。

冬雁の手から放たれた匕首は、寸分の狂いもなく男たちへと向かう。しかし、片足が不自由な男と、龍乎の若い二人に怪我を負わせることができるだろうという予測は、見事に外れることになる。

「真上だ！　横に飛べっ！」

目付きの悪い男がそう叫びながら、部下と思しき二人を蹴り飛ばす。そして、自身は間一髪のところで匕首を避けた。

一方、片足が不自由な男も、大虎の見事な動きによって危機を回避していた。

このままではまずいと、冬雁は紐を手繰り地面に刺さっていた匕首を、一気に引き戻す。また攻撃が来ると感じたのだろう、目付きの悪い男は大声を張り上げた。

「ちびっ子先にいけ！　ここは俺がなんとかしてやる！」

「なんとかする、だと……？」

男は気付いていないのだろうか。すでに、頭上を取られていることに。

それを理解したうえで、なんとかできると思っているならば大したものだ。男の声に押され、片足が不自由な男と、少女を背に乗せた大虎が離れて行く。

せめて、大虎に致命傷とまではいかずとも、動きを鈍らせるような傷を負わせておきたかった。もったいないが、万が一にと持っていた飛鏢を投げる。

鋭く砥がれた剝き出しの刃は、威力こそ匕首に劣るが、神経毒が塗布されているためわずかでも掠ればたちまち動くことができなくなる。死に至るものではないが、しばらくは動けないだろう。

しかし、それは片足が不自由な男の剣によって、すべて叩き落とされてしまった。振り向きざまの行動に、唖然とする。弱そうに見えて、実は一番腕が立つのだろうか。

「お前の相手は俺だって言ってんだろ！」

目付きの悪い男が喚きたてる。集団を分断することには成功した。あとは、見つけ次第一人ずつ対処していけばいい。

瞬時に方針を決めた冬雁は素早かった。男を攪乱させるように枝から枝へと移り、構えなおした匕首を顔面目掛けて投げつける。反応の遅れた男の体に、刃が食い込む——はずだった。

冬雁は自分の目を疑った。

男はその場から一歩も動いていない。ただ素早い剣捌きで、匕首をすべて叩き落としてしまったのだ。

唖然とした冬雁であったが、慌てて紐を手繰り寄せる。今の攻撃がだめならば、何度かに分けて攻撃すればいい。それに、今のは一箇所に集中しすぎていた。頭と足を同時に狙えば、同じようにはいかないだろう。

「——いや、回収させるわけねぇだろ」

男の呆れたような声が響くと同時に、掌の中にある紐が強い力で引き寄せられる。この時、冬雁は手を放せばよかった。匕首は失うことになるが、飛鏢はある。

しかし、とっさのことに冬雁は手を放すことができなかった。そして、均衡を崩した冬雁は、真っ逆さまに地面へと落下する。

反射的に受け身を取り、背を丸めた時だった。冬雁が感じたのは固い地面の感触ではなく、適度に弾力のあるなにかであった。

「私としたことがっ」

慌てて目を開ければ、至近距離に男の顔があった。受け止められたのだと気付いた冬雁は、慌てて男から距離を取ろうとする。

しかし、それは抱き締めるように拘束されたことで阻止されてしまった。

「はっ、放せっ」

「お前、ちっさいなぁ。子供か？」

「馬鹿者が！　私は歴とした大人だ！」

「嘘をつくな嘘を。胸も全然ねぇし、どこもかしこもちんちくりんだろ」

「ち、ちんちくりん……！」

さすがに、誰にもここまで言われたことのなかった冬雁は、顔を真っ赤にして怒りを露にした。なによりも拘束したまま、確認するように冬雁の胸を触ってくる不届きな手を斬り落としたくてしかたない。

「どれ、ちんちくりんの顔でも見てやるか」

「や、止めろ！」

「おい、暴れんなって」

「だめだ、だめっ」

ここで龍乎に顔を見られてはお終いだ。人相書きの手配書が回されれば、どうしても活動の幅が狭められてしまう。また、親類縁者に害が及ぶ可能性も高い。

だが、冬雁の制止も虚しく、顔を覆っていた頭巾が強引に奪われる。配下たちには反対されたが、邪魔だからといって肩につく辺りで切り揃えた髪が、音もなく揺れた。

「捕まった時点で、お前に拒否権は――」

ない、と紡がれるはずだった言葉は、不自然なところで止まった。

怒りと絶望に憤っていた冬雁は、至近距離から相手の男を睨みつける。涙が滲んでしまうのは、どうしようもないことだろう。

「くっ、この馬鹿力っ！」

冬雁は必死になって拘束から逃れようとするが、抱き込むように回された腕のおかげで、体をよじる



ことしかできない。せめて懐にある飛鏢に手が届けば、なんとかできるのに。

やはり、部下たちに待っていてもらえばよかった、と冬雁が後悔した時だった。

「隊長ー！　あんたこんな小さい子になにやってんですかー！　って、文重さんが顔を真っ赤にしながら怒鳴ってるとこですよー！」

すぱーん、といい音がしたと思えば、男の頭が真横に吹き飛んだ。

道順は、後悔していた。子慮のお守を押しつけられたこともそうだが、意地でも文重を引き摺ってくるべきだった、と。

道中の、子慮と春蘭の力が抜けてしまいそうな会話の応酬は、まだよかった。許容範囲内だ。だが、何者かに襲われたあと、一旦逃げ出した道順たちは、自分の隊長が極度の方向音痴であることを思い出したのだ。

文重からは、自然に囲まれた場所なら平気だからと、よくわからない助言を貰っている。しかし、万が一、子慮が迷子になってしまったら、自分たちも隊長を捜すために広大な山をさ迷い歩くことになるだろう。

覚程と話し合った結果、戻ろうということになった。幸い、さほど距離は移動していなかった。実力は龍乎でも一、二を争うほどの子慮だ。すでに襲撃者を捕まえているかもしれない——確かに、その推測は当たっていた。

戻ってきた道順たちが目にしたものは、半泣きの少女を抱き締めて放さない、尊敬すべき隊長の姿だった。

少女は、見た目から十五、六歳ほどだろうか。まだ成長期が訪れていないのか、女性らしい丸みは見られない。顔を真っ赤にして子慮を睨みつける姿はなかなかに可愛らしく、将来が楽しみな容貌をして

いた。
「隊長ー！　あんたこんな小さい子になにやってんですかー！　って、文重さんが顔を真っ赤にしながら怒鳴ってるとこですよー！」
そう叫びながら、道順は勢いよく子慮の頭を叩いた。これが叩かずにいられるか、という気分である。
「ううう、そんなに、そんなに仲望さんが羨ましかったんですか。確かに、春蘭ちゃんはそりゃ大きくなったら美人になるでしょうね。仲望さんの一人勝ちみたいなもんですよ。俺だってちょっと羨ましいくらいです。でも、だからって自分も少女に手を出そうなんてっ。しかも女の子の方は、泣くくらい嫌がってるじゃないですか！」
子慮の襟首を摑み、道順は力の限り揺らしまくった。
その拍子に拘束が緩んだのか、這うようにして少女は子慮から距離を取った。そして、よろよろと立ち上がると、子慮に憎しみの籠った眼差しを向ける。
「貴様、覚えておけ！　絶対に殺してやるっ。爪先から、少しずつ賽の目切りにして、ありとあらゆる苦痛を与えてから殺してやるっ！」
吐き捨てるように告げると、少女は軽い身のこなしで木の枝に飛び移ると、あっという間に姿を消してしまった。
隊長が無体なことをしてすみませんでした、と謝罪する暇もない。
「……え、もしかしてあの子が襲撃者だったんですか？」
「お前がやったことは、犯人の逃走幇助だな。しかも、隊長への暴力、暴言つきだ」
背後に控えていた覚程が、冷静な声で応じる。
「えええっ、で、でもむしろ隊長の方が犯罪者……あ、でもこんな山奥に子供がいるわけないか」
頭が冷えたところで、ようやく事態が呑み込めた道順は、顔を真っ青にしながら子慮に謝罪した。
「すみませんっ。俺、せっかく隊長が捕まえた犯人

を逃がしてしまって！」

頭を地面に擦りつけんばかりの勢いで謝罪すれば、今まで一言も喋っていなかった子慮が口を開いた。

「……熱烈な殺し文句をもらっちまったぜ」

少女が消えた辺りを見つめる子慮の頬は、心なしかほんのりと赤く染まっている。瞳もここではないどこかを見ているようだ。

確かに間違いではありませんが、双方に温度差がありすぎですよ、とは言うに言えない道順であった。そして、その隣では覚程が「あの子、赤い布を巻いてなかったか……？」と、意味ありげに呟いていたのだった。



子慮たちと逸れてから、どれほど経っただろうか。初めはなだらかであった斜面も、奥へと進むにつれて徐々に険しさを増していた。さらに地面をうねるように這う木の根が行く手を阻む。社へと続く道を使えば少しは楽なのだろうが、謎の襲撃者を警戒した春蘭たちは、別の迂路を選んだ。

地脈を流れる気の方向さえ確認できれば、時間はかかってもいずれ社へと辿り着くことができる。襲撃者の正体や人数が不明な今、無防備にこちらの姿をさらすのは得策ではなかった。

白桃の背に乗る春蘭は平気だが、そのあとをついてくる仲望は明らかに辛そうだ。普段は気付かない程度に庇っている足を、今は引き摺っている。それを見たくなくて、春蘭は白桃の背にしがみつく振りをした。

そもそも、なぜ仲望は怪我を押してまで春蘭に同行したのか不思議だった。兄を狙う春蘭など見捨ててしまえばいい。だが仲望は啓璋や友寧がどれほど反対しても、頑なにその態度を崩そうとはしなかった。

楊秀だけが、「よく決意したぞ、仲望。自分の嫁は自分で守らなければな」と、しきりに頷いていたが。

自分は仲望にとってどんな存在なのだろうか。

お前の兄に真名を奪われたといって、いきなり屋敷に押し掛けてきた。ただの迷惑な子供でしかなかったはずだ。

屋敷に置いてくれたのも、追い返すのが面倒だったからだと思う。たぶん、その認識に間違いはない。

それとも、四年前に死んだものとされていた兄の情報に、なにか思うことでもあったのだろうか。

現に兄――玄楽は、意味もなくそんなことをするような人ではないと、擁護する発言もあった。鄭家の兄弟には、見えない確執があったのではないかと感じていたのは、春蘭の単なる勘違いだったのだろうか。

考えれば考えるだけ、深みに嵌まっていきそうだった。

大切なのは真名を取り戻すことだ、と春蘭は何十回唱えたかわからない言葉を反芻する。

しかし、実際に春蘭が取ってきた行動は、それに反するものが多かった。

行方知れずとなった仲望を捜しに行ったこと。

卦に背き、鄭家を離れて妓楼に居続けたこと。

なによりも、疫の拡大を阻止するべく、華安の守り神を訪ねること。

自分に危険が及ぶかもしれないような行為だった。

では帰るかと問われれば、答えは〝否〟だ。

妓楼の者たちを思えば、ここで足を止めることは許されない。

たとえ守り神に戻った時、そのような感情は消えてしまうのだとしても。それでも〝春蘭〟である今の自分は、疫に苦しむ者たちを助けたいと思わずにはいられないのだ。

「――春蘭？」

耳朶を打つ声に、春蘭は反射的に顔を上げた。心配するようにこちらを見ている仲望は、額の汗を拭いながら小さく息をつく。どんなに辛そうでも、仲望が弱音を吐くことは一度もなかった。疲れたと、一言でもいいから口に出せばいいのに。そのことがまた、春蘭に重く伸し掛かる。

「さっきから何回呼んでも返答がなかった。さすがにその格好で寝たら危ないぞ」

「寝るわけなかろう。それよりも、休憩するぞ。白桃の背にしがみつくのも疲れるのだ」

今のは少しわざとらしかっただろうか。言ったあとで後悔した春蘭は、白桃の背から降りると誤魔化すように近くの木の根に腰かけた。

周囲を見回せば、背の高い木が葉で空を覆うように枝を伸ばしていた。襲撃者が隠れられそうな場所はいくらでもあるが、白桃がいる限り、すぐにわかる。少しの間、ここで休んでいても大丈夫そうだ。

竹筒の水でのどを潤していた仲望も、春蘭のすぐ傍に腰を下ろす。できればもう少し距離を取ってもらいたかったが、わざわざそう告げるのも憚られた。

白桃は地に伏せるようにして休んでいる。ときおり、遠くの音を拾うかのように耳だけが、ぴくぴくと忙しなく動いていた。

風に揺れる草木の音に混じり、鳥たちの囀りが辺りに響いている。葉の間から零れる日差しの暖かさに、一つ小さな欠伸を零した。

そのまま何気なく顔を横に向けた春蘭は、仲望がずっと自分を見ていたことに気付いて、思わず体を硬直させる。

「……なにを見ているのだ？」

「春蘭を」

「いや、そういうことではなく、だな」

「こちらを見るな」と告げられればいいのだが、「なぜ？」と問い返されても困る。かといって、お返しとばかりに仲望を凝視するわけにもいかない。

「見ても、なんの得もないぞ」

「うん」

子慮の、あの奇跡的なまでの傍若無人さが春蘭は恋しくなった。きっと、瞬時にこの奇妙な空気を払拭してくれるに違いない。

いっそのこと、もう休憩は終わりだと告げるべきだろうか。少しも休めていないが、この居心地の悪さから解放されたいと真剣に思う。それでもやはり、仲望の体調を考えれば、休憩を切りあげることはできなかった。

「……仲望。なぜ、ぬしはここへ来たのだ？」

代わりに、ずっと気になっていた言葉が春蘭の口をついて出た。怪我を押してまで春蘭と行動を共にする理由。聞きたくもあり、聞きたくもなかった、それ。

自分でも、どうしてそれが気になるのかはわからない。ただ、純粋に理由を聞いてみたかった。

「怪我は、まだ治り切っておらぬのだろう。歩くだけでも辛そうだった。それなのに、なぜだ？　ちなみに、楊秀が言っていたような馬鹿馬鹿しい返答は受けつけぬぞ」

春蘭の問いに、仲望は肩から力を抜くように溜息をついた。

「春蘭はそれを知ってどうするんだい？」

「どうもせぬ。疑問に思っただけだ」

言いたくなければいい、と春蘭は言葉少なに告げた。どう出るかと、相手の様子を窺っていると、しばらくの沈黙のあと、仲望はゆっくりと口を開いた。

「――少し、俺の話を聞いてくれるかな」

先を急ぐ旅ではあったが、少し、という仲望の言葉を信じて、春蘭は頷いた。

仲望がいったいなにを話すのか。興味と少しばかりの不安を隠して、春蘭はできるだけ平静を装った。

「俺と兄はね、三歳違いの兄弟だった。特別、仲がよいというわけでもなかったが、悪かったわけでもない。ただ、俺は少し臆病な性格で、逆に負けん気の強い兄に憧れていた。春蘭は、兄を見ているのだろう？」

「うむ」

玄楽は、髪も瞳も夕陽のような赤い色をしていた。母親が異国の血を引いており、息子の玄楽にもそれが受け継がれたのだと。

黒髪黒眼が大半を占める華国（かこく）で、それは異質であった。

「兄は、幼い頃から外見のことでいじめられていた。酷いものだったよ。何度、父に隠れて泣いている兄を見たことか。でも、兄は負けなかった。能力を示

すことで、自身を蔑む者たちを見返してやろうと考えたんだ。実際、天賦の才に恵まれていた兄は、それから頭角を現して、禁軍でも並ぶ者がいないと言われるほどの人物になった。それでも、批判する人は絶えなかったが、同じくらい兄を理解してくれる人もできた」

春蘭は拳を握り締めながら、仲望の言葉に耳を傾けていた。正直、玄楽の話をこれ以上続けるなら、話を遮ってしまいたかった。しかし、それが龍天山へ来たことに繋がるのならば……。その答えを知るためだと、春蘭は自身に言い聞かせた。

「俺はいつしか、そんな兄と比べられていることに気付いた。初めは使用人たちの、口さがない噂話だった。兄が正妻の子であったのなら、鄭家はますます繁栄しただろう、と。悔しいという気持ちはあったが、兄が有能であることはまぎれもない事実だ。だから、俺は兄と同じように努力した。剣術も、学術も、血を吐くような思いで学び続けた。でも、努力すればするほど、兄との差に気付かされたんだ。それで、俺は悟った。兄を越えるのはむりなんだ、って」

仲望の瞳には、昔を懐かしむような色が宿っていた。初めて本人から聞く話に、春蘭はなにも言えずにいた。

「気付いたところで、俺は生き方を変えることはできなかった。体格的に不利だと思って、剣や槍を捨てて弓の腕を鍛えた。追い掛けて、追い掛けて、俺は四年前の戦で、右目と左足に大きな怪我を負った。その時は、悲しむよりも先に安堵したよ。もう二度と、兄の背を追わなくて済むんだって。まさか、同時期に兄自身が目の前からいなくなってしまうとは思わなかったけど……」

ここで、仲望は悲しげに苦笑した。いつもよりも少しだけ表情が豊かだ。

「それからは、諦めの人生だった。楽だったよ。なにもせず、ただ漫然とした日々を過ごすのは。宮中

から遠ざかっていれば、面倒な揉め事には巻き込まれない。あっという間に四年が経っていた」

仲望の視線が、ゆっくりと春蘭に向けられる。思わず肩に力が入ったが、穏やかな眼差しに緊張が解けた。

「初めは気付かなかった。でも、攫猿と対峙した時や、俺を助けに来てくれた時。毎日のように職を探しに出ていく姿や、真名を取り戻すことを諦めない姿が、以前の俺を見ているようだったんだ」

「似ているとは思えぬが……？」

春蘭は仲望のように、自身の技能を磨いていたわけではない。占以外のことでは、血の滲むような努力をしたわけでもないし、誰かの背を追い掛けていたわけでもなかった。

「諦めないこと。春蘭は一度だって諦めたことはなかっただろ？」

一度だけ、むりだと思ったことがある。

他ならぬ、目の前の男が山で行方不明となった時のことだ。山堺へと迷い込んでいる可能性が高い状況で、それを捜しに行くのはあまりにも無謀だと。真名を取り戻し、邑に戻ることを最優先にしている春蘭にとって、己の身を損なうことだけは避けなければならなかった。

それでも仲望を捜しに向かったのは、翰栄の一言があったからだ。

〝――今、春蘭のいる場所が限界なのかい？〟

諦めたくなかった。その気持ちを、その言葉が後押ししてくれた。

「だから、今回のこともなにか力になれたらと思ったんだ」

「それで、同行したというのか？」

「ああ。足手纏いにならないように、努力はしたんだけどな。白桃に助けられてしまった。それに、俺がいなければ、もっと先に進めていたはずだ」

反論の言葉が口をつきかけたが、春蘭はなにも言えずに黙り込んだ。

仲望の本音を聞いても——いや、聞いてなおさら、分厚い壁ができたように思える。どれだけ玄楽のことを尊敬していたのか。まざまざと思い知らされた。

「あと、春蘭に訊きたいこともあった。屋敷では声をかけても逃げられてしまうから、ここではっきりさせようと思っていたんだ」

「……なんの話だ」

「なぜ、俺を避ける？」

仲望の声は、春蘭を責めるものではなかった。ただ純粋な疑問として。そして、幾許かの悲しみが込められているように聞こえた。

「山から帰ってきた日から、急に態度が変わった。なにか俺に思うところでもあるのか？」

「それは……ぬしが、仕事もせぬ怠け者で、啓璋や友寧たちに迷惑ばかりをかけているから、少し腹が立っていただけだ」

「俺は以前から、怠け者で啓璋たちに迷惑をかけていたと思うけど？」

「う……」

仲望は追及の手を緩めるつもりはないようだ。なぜ、と問われても上手く説明できる気がしない。なによりも、春蘭の胸に巣食っているぼんやりとした影を、はっきりと形にしてしまうのが怖かった。

「ぬしが悪いのだ……」

「うん。たぶん、俺が悪いんだろうな」

あっさりとそれを認める仲望に、春蘭は少しばかり違和感を抱く。自身へと向けられる視線や、言葉使い、それになにより、仲望の性格が今までと違うように感じられた。

ここまで強引な男だっただろうか。春蘭が答えなければ、別にいいやと、すぐに諦めてしまう。それが、春蘭が認識していた〝鄭仲望〟という人物だった。

「あの日、ぬしは私を否定した」

口にしてから、春蘭はもう後戻りはできぬと自嘲した。

「〝兄は、理由もなくそんなことをするような人ではない〟――そう言ったのを、ぬしは覚えているか？」

仲望はわずかに目を瞠った。しかたのないことだ、と春蘭は自らに言い聞かせる。

家族と赤の他人ならば、誰でも前者を取るに決まっている。それに、自分はいずれ真名を取り戻し、守り神として邑へと戻る。それは玄楽に相応の罰を与えるということでもある。

仲望にどう思われようが――たとえ、目の前の男が敵として立ちはだかろうが、気にしなければいいだけの話だ。

「……それを、春蘭は気にしていたのか」

「違う。ただ、認識を改めただけだ」

仲望は、春蘭から真名を奪った男の弟なのだ、と。初めて会った時は、春蘭も警戒をけっして解かなかった。

だが、仲望の態度があまりにも飄々としているから。知らぬうちに、つい気を許してしまっていたらしい。玄楽の弟であるという認識も、不仲だったのではと疑ったことから、あまり重要視しなくなっていた。

あの日、仲望から告げられた何気ない一言は、それを思い出させるに充分だった。

「すまん。確かに、俺が悪かった」

「だから、気にしていないと言ってるだろう」

「いや、そういうことではないんだ。ちゃんと訂正させてくれ」

額を押さえている仲望に、春蘭は不満を感じながらも押し黙った。

「兄は、理由もなくそんなことをする人ではない。今でもそう思っている。でも、春蘭のことを否定したわけじゃない」

「どういう意味だ？」

「理由があったのだと、そう言いたかったんだ」
「当たり前だろう。理由もなく、守り神から真名を奪う愚か者がいるか」
「春蘭が怒ってたのは、そこじゃないのか？」
不思議そうに首を傾げられ、春蘭は自分が墓穴を掘ったことに気付いた。そうだと肯定しておけば、上手く誤魔化せたのに。
「……違う」
仲望の終わりの見えない追及に苛立ちを覚えていた春蘭は、いっそのことすべて洗い浚い告げてしまうことに決めた。
「腹が立ったのだ。ぬしはどうせ、私ではなく玄楽の味方をするだろうと」
その当たり前のことに、言葉では言い表せない、やり切れない気持ちを感じていただけなのだ。とうとう認めてしまったそれに、春蘭は心中で深い溜息をついた。
「俺が、兄の味方を……？」
「違うのか？　尊敬していたのだろう？」
「……ああ、そうか」
得心したように頷いた仲望は、珍しく柔らかな笑みを浮かべた。
「違うよ」
それはなんに対する否定なのか。春蘭は訝しげな眼差しを仲望に向けた。
「いくら身内だからといって、すべて許してしまえるわけじゃない。守り神から真名を奪うということがどういうことか、春蘭を見ていればよくわかるよ。あまりにも大変なことだ。春蘭の邑は、加護を失っている。それは、今の華安のような状態になるということだろう。たとえどんな理由があったとしても、そんな兄はこっちから願い下げだ」
そう断言する仲望に、春蘭は唖然とした。なんともあっさりとした拒絶の言葉である。
「むしろ、生きているのに連絡の一つも寄越さないことや、結局、当主の座を俺に押しつけたことも含

めて、敵対するくらいはするよ」
「いや、でもぬしにとっては実の兄なのだぞ？」
「俺は春蘭を助けたい」
本当だろうか。
それは信用してもいいのだろうか。
春蘭の心に、じわりじわりと戸惑いが広がる。それは今までのような痛みを伴うものではなくて、そわそわと落ち着かない気持ちだった。
「そ、そういえば、ぬしの喋り方や態度が、いつもと違う」
指摘されて初めて気付いたようで、仲望は困ったように口元を緩めた。
「少し、昔の喋り方に戻ってたみたいだ」
「そうか。ところで、話はもう終いだ。そろそろ行くぞ」
「ああ、ごめんね」
春蘭が立ち上がれば、それに気付いた白桃が近付いてきた。そして、春蘭が乗りやすいようにと身を屈める。
よじ登ろうとする前に、仲望の手が春蘭の両脇をかかえ、ひょいと白桃の背に乗せられてしまった。
「じゃあ、行こうか」
「……うむ」
「それと、地脈は俺が視るから」
「なぜそうなる」
「時間の短縮だよ。わざわざ水神盤（すいしんばん）を使うよりも、その方が早いだろ？」
そう言われてしまえば、春蘭に反論の余地はない。しかし、仲望はこの短期間で、強引さが増したのではないだろうか。
前を行く仲望の背を見つめながら、春蘭は困惑するしかなかった。
足の悪い仲望が巨木の根に苦戦しながらも辿り着いた先は、大地に空いた巨大な洞窟であった。

入り口には、側面に彫られた文様や、色褪せた彩色の痕など、人の手が加えられた形跡が見られる。洞窟は地下へと続いているようであった。

春蘭は岩陰から辺りを窺う。

「仲望、ここで間違いないか？」

「ああ……目が痛むくらい、すごい光景だよ」

うんざりとするような口調で仲望は告げた。実際、どのような光景が視えているのかはわからないが、酷く疲れるようだ。

「守り神が祀られているにしては簡素だな。華安ほどの都だ、仰々しい社でも建っていると思っていたのだが」

しかし、春蘭の感想は、洞窟の内部に入ってから撤回されることになる。

仲望が途中で拾った枝に布を巻きつけ、火付け石で火を熾して松明をつくる。まず、先に仲望が足を踏み入れる。続いて、白桃の背から降りた春蘭がそのあとを追った。

「これは……」

先へ進んだ仲望が、思わずといった風に感嘆の声をあげる。つられるようにして上を向けば、松明に照らされるようにして、洞窟の壁に彫られた無数の装飾が姿を現した。

入り口付近には、左右に体の半分を壁に埋めた門番が彫り込まれていた。番をする者だけあって、見る者を監視するような厳めしい表情を浮かべている。手に持っている槍は、柄の部分がすでになく、片方の像は右肘から先がなくなっていた。

それを通り過ぎると、同じように半分ほど壁に埋没した門が春蘭たちを出迎えた。表面に塗られた朱色は、雨風にさらされることがないせいか色鮮やかに残されている。

門を潜ると、周囲には桃源郷さながらの光景が広がっていた。無数に彫り込まれた蓮の花や、それを愛でる天女。空を飛ぶのは鳳凰か。遠くには桃と思われる樹木まで、事細かに再現されている。

「見事なものだな。洞窟自体が社となっているわけだ」

短期間ではけっして造り得ぬものである。おそらく何十年という歳月をかけ、大勢の職人たちによって完成させたのだろう。

「春蘭。辺りを見ていないで、足許に集中した方がいい。坂になっているぶん、かなり歩き難い。むりなら白桃に乗せてもらうんだ」

「む、確かに少し辛いな」

洞窟の奥へと続く道は、緩やかな傾斜となっているようだ。足許の岩が湿り気を帯びていることもあって、油断すれば仲望の言う通り足を滑らせてしまいそうだ。

「しかたない。白桃、背に乗せてくれるか」

「バウッ」

春蘭が、身を屈めた白桃の背に跨ろうとした時だった。その白桃が突然、警戒するように低い唸り声をあげる。

金色の瞳が向けられるのは、洞窟の奥である。

「春蘭、気をつけろ」

「わかっておる」

仲望が松明を奥へと向けながら、空いた方の手で剣を構える。灯りが目印となってしまうおそれもあったが、ここで火を消すのは得策ではない。

「ガウッ」

白桃が一際高く咆えた。おそらく、来るぞという合図なのだろう。

案の定、奥から顔を隠した黒衣の者たちが三人、こちらに飛び掛かってきた。春蘭は急いで白桃の背に乗る。

一人は仲望に、二人は春蘭と白桃へと向かってきた。片足の不自由な仲望よりも、大虎を警戒してのことだろう。

「白桃っ」

春蘭の声に、白桃は素早い跳躍を見せた。春蘭を乗せているため、攻撃を巧みに避けても、動き回る

には広さが不十分な洞窟内では行動が制限されて積極的に戦闘に参加できない。

「白桃。春蘭を連れて奥に行け！」

松明を、白桃が対峙していた黒衣の者たちに投げつけ、仲望はそう叫んだ。奥ならば充分な空間があるかもしれないと踏んだのだろう。それに、白桃は夜目が利く。暗闇での戦闘は有利だ。

「行かせるな！」

仲望と剣を合わせていた者が叫ぶ。だが、わずかな隙を白桃が見逃すはずがない。春蘭を背に乗せたまま、素早く洞窟を駆け抜けた。

焦ったようにこちらを追う気配があったが、白桃の脚に敵う者はいない。置き去りにして、奥へと向かう。

一瞬、振り切った二人の襲撃者がそのまま仲望に向かうのでは、と危惧したのだが、それはすぐに解消された。よほど奥へ行かせたくないようだ。猛然と追い縋ってくる襲撃者たちに、春蘭は安堵の溜息をついた。

――いったい、この先になにがあるのか。

暗闇を疾駆するうちに、春蘭は前方から光が漏れていることに気付いた。白桃は通路から飛び出すようにして着地した。

春蘭は急いで背から降りる。白桃も、暗闇の方が有利であることをわかっているのだろう。春蘭を置くと、そのまま通路へと戻って行った。

「しかし、これは凄いな」

隠れ場所はないかと周囲を見回した春蘭は、光の正体に気付いた。洞窟の通路を抜けた先にあったのは、天井がぽっかりと空いた箱庭のような空間だったのだ。

空高く聳え立つ壁には、通路と同じように彫刻が施されている。岩の亀裂から生命力の強い木々や蔦(つた)が根を張り、そこに色を添えていた。

「そうだ、社は……」

身を隠すことも重要だったが、春蘭の脳裏を過っ

たのは守り神の存在である。慌ててそれらしきものを捜せば、祭壇と思しき岩が隆起した部分に、小さな社が作られていた。

駆け寄ろうとした春蘭だったが、はっと動きを止める。見間違えたのかと思い目を擦るが、それは消えない。

「なんと……」

岩が隆起していると思ったそれは、真っ白な龍だった。

胴体の太さは、白桃と同じくらいか。長さはとぐろを巻いているのでよくわからないが、鄭家の一塀分はあるだろう。優雅な胴体には宝石のような鱗が輝き、光を反射してきらきらと輝いていた。

なぜ動かないのか。不審に思い目を凝らせば、龍の首許になにかがある。どす黒く変色した槍のようなものが、龍の胴体を地面に縫い止めているらしい。

「酷いことをする」

春蘭たちを襲撃してきた奴らはこれを見られたくなかったのだ。とにかく、守り神を解き放つことが先決だ。どうにか槍を抜くことはできぬかと、春蘭は龍の側に近付こうとした。

しかし、巨体を囲うようにして掘られた地面の溝に気付く。

「これは……」

見覚えのあるそれに、春蘭は足を止める。

試しに小石を拾って投げてみれば、文様の内側に入った途端、稲妻のようなものが走り小石が撃ち落とされた。

「誰も近付けぬようになっているのか」

できるだけ近くまで寄った春蘭は、地面に横たわったままぴくりともしない龍を観察した。微かな気を感じる。

守り神は、そう簡単に死ぬことはない。怪我を負ったとしても自身の力が尽きない限り、すぐに治癒する。この槍は、逃亡を阻止するためだろう。そして、この地面の文様は万が一にも守り神を解放させ

ないためのもの――ふいに、春蘭は違和感を覚えた。
いや、むしろ嫌悪感と言った方が正しいだろう。
穂先だけでなく、柄の部分からも黒い霧のようなものを漂わせているそれに、春蘭は眉を寄せる。どこかで似たような話を聞いた覚えはあるのだが、それがいったいなんなのか思い出すことができない。
「龍殿！　意識はあるか！」
必死になって呼び掛けると、やがてうっすらと龍の瞼が開かれた。
「私が見えるか？　このような形をしているが、とある邑の守り神をしている者だ」
『……ああ……たし、か……に……しか、し……ひとが、せんに……』
「私は守り神として、少々特殊なのだ」
弱々しい声音に、春蘭の不安は強まった。たとえ槍を抜いたとしても、龍自身の力まで弱まっていれば傷を癒すことは難しい。
『頼み……が……』
龍は苦しげに告げた。
『これ、を……ぐうっ』
体を動かしたせいで痛みが増したのだろう。龍は苦しげに身をよじった。
「むりに動くでない。いったい、誰がこんなことを……」
これでは、地脈の歪みを直すことができぬはずだ。守り神が力を失っているのではと疑ったこともあったが、まさかこんなことになっていたとは。予想外の展開に、春蘭は困惑した。
『……力を、封じられた、ようだ』
「封じる……そうか」
春蘭の脳裏に、ある一族の存在が浮かんだ。
人であった頃、母から寝物語に聞いたことがある。詳しくは覚えていないが、特殊な術で仙を捕まえることができるのだという。守り神がいない邑は、大金を払って彼らから仙を買うのだと聞いていた。
しかし、そのようなことが許されるはずがない。

仙は人々に乞われて守り神となるのである。むりやり連れてこられ、誰が邑を守ろうとするだろうか。春蘭は幼いながらに怒りを感じた覚えがある。他にも呪を用いた暗殺などもその一族は請け負っていたそうだ。

春蘭が守り神となってからはどうなったか不明だが、未だにその術が受け継がれているというのか。

「力が使えれば、こんなもの」

春蘭は唇を噛み締めた。

本来の力が使えれば、この程度の封印など吹き飛ばしてしまえるのに。

「バウウウッ」

白桃の鋭い咆哮が響く。はっとして振り返れば、小柄な黒衣の少女が天井に空いた穴から飛び降り、こちらへ向かって疾駆してくるところだった。可愛らしい容貌は、険しく歪んでいる。

「離れろ！」

少女が春蘭に向かって匕首を投擲するが、それは春蘭の前に素早く回り込んだ白桃の前脚によって弾かれた。

「くそっ」

少女が悔しげに唇を噛み締める。

「これは貴様らの仕業か？」

春蘭の問いに、少女は答えない。白桃の攻撃を避けるので精一杯なのだろう。

「冬雁様！」

「逃げてください、冬雁様！」

白桃と対峙していた黒衣の者たちが、通路から飛び込んできた。そして、それに続くように仲望が姿を見せる。

仲望は肩で荒い息をついているが、目立った怪我がないことに、春蘭は安堵の息を吐いた。体調は万全ではないが、禁軍に属していた腕前は未だに健在らしい。

「私はここを兎天様より任されたのだ！　死んでも引くものか！」

冬雁と呼ばれた少女は、必死に匕首を振るう。しかし、少女の不利は否めない。
「冬雁とやら。ぬしの負けだ。怪我をしたくなければ引け」
「黙れ！」
冬雁はそれでも抵抗を続けたが、背中から白桃の巨体に押し倒される形で、勝負は終わった。前脚を揃えて得意げに胸を張る白桃に、冬雁が人質に取られたと勘違いしたのか、黒衣の者たちが悔しげにこちらを睨んでいた。
「くうっ、退け！」
「バウウッ」
白桃はなぜか冬雁を気に入ったらしく、しきりに顔を舐め回している。白桃が止めを刺さないということは、春蘭の〝敵〟ではないと認識したのだろう。人の言葉を喋ることはできないが、内面の感情を読み取ることに長ける白桃の判断は、まず間違うことはない。
「春蘭、これはどういうことだ？」
春蘭の許へと近付いてきた仲望は、驚いたように地面に縫いつけられた龍を見た。
「彼が華安の守り神だ。力を封じられている。この文様のうちには入るなよ。雷に打たれるぞ」
白龍に近付こうとする仲望を、春蘭は手で制した。あの強力な雷電に打たれれば、一瞬で命を奪われてしまうだろう。
「しかし、なぜこんなことを？」
「わからぬ」
「彼らの仕業か？」
仲望が、未だ白桃に捕らえられている冬雁へと目を向けた。
「ならば話は早いだろうが……そうは思えぬ」
春蘭の記憶では、呪を扱う一族は、その特殊性故に秘術が受け継がれるのは男子のみ。女である冬雁が、この場の指揮をとっているのはおかしい。
もっとも、あの一族が与しているという確たる証

拠はないのだが。

「助ける方法がないわけではない……」

いずれ守り神は衰弱して死ぬだろう。

だがこのままでは、疫の拡大は止まらずに、皇帝の命を受けた禁軍は貧民窟をはじめとする、感染が拡がる地域を焼き打ちするはずだ。それがどれだけ惨いことかわかっていても、皇帝の勅命に逆らえる者はいない。

大勢の者が死ぬ。

そこには、春蘭の知り合いも含まれるだろう。華安に来てから知り合った者たちの顔が、春蘭の脳裏を過る。

胸が苦しかった。

瞼の奥が熱くなり、息苦しささえ感じる。

「……のう、仲望。真名を取り戻すことを優先すると言いながら、疫に罹患した者たちを助けたいと思う気持ちは、私が守護してきた者たちに対する裏切りだろうか？」

春蘭の問いに、仲望は首を横に振った。

「いいや。それは人として当然の感情だ」

「私は守り神……いや、今は人だったな」

だから、これほどまでに胸が痛むのだろう。

守り神として邑を守護していた時、他の場所で大勢の人間が亡くなったと聞いても胸は痛まなかった。長い歴史の中でそういうこともあるだろう、と。その余波が自分の守護する邑に及ばなければいいと、達観していたように思う。それが守り神というものだ。

だが、今の春蘭はそれが当然であるとは思えない。助けたいのだという気持ちを、抑えることはできそうにもなかった。

「仲望。離れておれ」

「春蘭？」

「大丈夫だ」

一瞬だけだ、と春蘭は自分に言い聞かせた。

わずかな間ならば、たとえ真名を呼ばれたとして

も抗える。そして、また元の体に戻ればいい。真名を奪われた際も上手くいったではないか。

――ただ自分が華安にいると、知られてしまうことになるが。

だから、春蘭は仲望に訊ねたのだ。これは裏切りになるだろうか、と。春蘭の強みは、玄楽に居場所を知られていないことだった。それを今、手放そうとしている。

「龍殿、約束してくれ。華安では疫が蔓延している。地脈の乱れを正し、疫を祓ってくれると」

龍が微かに頷く気配があった。守り神や仙は約束を違えない。了承したということは、それくらいの力は残っているのだろう。ならば、春蘭も自分にできることをやるのみだ。

「今、楽にしてやる」

瞼を閉じて、自身の中に潜む特殊なそれに意識を集中させれば、春蘭の周囲を濃厚な水の気配が包んだ。

意識が徐々に遠ざかっていく。

完全になくなるわけではない。透明な壁を一枚隔てたように、少しだけ感情が薄くなるだけだ。懐かしいその感覚に歓喜するように、春蘭は微かに笑った。

守り神へと戻るのは、一瞬の間さえあればいい。人としての魂魄の下に隠していたものを、解き放てばいいのだ。

意識を眼前に向ければ、同胞の姿があった。

力を封じられ、地に縫い止められた姿に、深い悲しみを覚える。

『待っておれ』

春蘭は意識を集中した。

龍の周囲を水の塊が漂い始める。春蘭は華安の守り神のような実体ではなく、魂魄だけの存在であった。

人は仙にはなれない。とある特殊な方法で守り神となった春蘭は、彼らとは違う存在だった。その証拠に、守り神に戻った春蘭は、春蘭自身が力を行使しない限り誰にも視ることはできなかった。

龍の体を水で包み込んだ春蘭は、文様や槍にまとわりつく呪を一瞬で浄化しようとした。

だが、それに強い圧迫感が加わる。

〝――、――〟

ここより離れた場所で、春蘭の真名を呼ぶ声がする。抗おうとするが、それに反発する力が暴走をはじめる。

『くぅ……』

まだだ。まだ、器に戻ることはできない。

真名に逆らうことによって生じる、引き裂かれるような痛みに春蘭は耐えた。

春蘭の苦痛を受けて、龍を包む水の塊が歪む。霧散しそうになるそれを、春蘭は強引に押さえ込んだ。そして、浄化の力を注ぐ。

地に掘られた文様が、跡形もなく消え去った。それを待っていたかのように、自力で槍を引き抜いた守り神は体を蠢かせる。その余波で、洞窟を軽い揺れが襲った。

『――我は、北庸。礼をいうぞ、人であった守り神よ』

ふわりと体を浮かせた北庸は、天に昇る勢いで空へ向かった。それを見届けようとしたが、すでに限界だった。

遠くで名を呼ぶ者の声が体中に響く。

ここで抵抗を止めたら問答無用で隷属されてしまうという怖れはあったが、全身に拡がる痛みは痺れとなって、春蘭の意識さえも根こそぎ刈り取ろうとする。

〝――、――〟



従ってしまえば、どれだけ楽になれるだろうか。
甘美な誘惑が、春蘭の脳裏を過った時だった。
「戻るんだ、春蘭！」
そうだ。
魂魄を戻すのだ。
あの、幼く小さな器に。
意識が切り替わる。
屈伏させようとする圧迫感が消え、春蘭はその場に力なく崩れ落ちた。すぐに仲望に抱え起こされる。もしも一瞬でも名を呼ばれるのが遅かったら、あの男に隷属させられていたかもしれない。冷たい汗が、春蘭の背を伝った。
「大丈夫か？」
「うむ……」
気遣わしげに問われ、春蘭は力なく頷いた。全身を押さえつけるような、圧倒的な支配力への恐怖が、春蘭の小さな体を震わせる。
「……でも、これで疫は収まる」
ぽつり、ぽつりと小粒な雨が春蘭の頬を濡らした。北庸が降らせる神気の雨だ。華安全土に降り注ぐ慈雨は、疫を洗い流してくれることだろう。
春蘭の脳裏に妓楼の面々が過る。全身を包む倦怠感に誘われるように、春蘭はゆっくりと瞼を閉じた。
「祥琳（しょうりん）！　こっちも運んでおいてくれ！」
「はい！」
妓楼の荷物を俥に積み込む作業が、朝から行われていた。昨日、貧民窟及び疫が蔓延しているとされる地域への焼き打ちが決定されたからだ。
妓楼が立ち並ぶ花街（はなまち）も、その憂き目に遭うだろう。黄海楼（おうかいろう）でも、すでに罹患者の数は数え切れないものとなっていた。
疫に罹っていない者だけは逃がそうと、蟬英（せんえい）の指示の下、避難準備が整えられているところだった。

楼主までが病に倒れた時はもう終わりかと思ったが、意識ははっきりしているようで、病床からあれこれと指示を飛ばしていた。

焼き打ちは、まだはじまっていない。だが、不安が伝染するように、すでに貧民窟に火が放たれただの、検問が設けられて、病人は通ることができないだのと、様々な噂がまことしやかに囁かれている。そんな中、誰もが胸に巣食う不安を押し隠すようにして、与えられた仕事をこなしていた。

「お嬢様、私が運んでおきますよ」

「守真」

まだ枯れ木のように痩せているが、妓楼で働くようになって、以前よりは見られる格好となった守真が、祥琳の持っていた一抱えもある壺を代わりに受け取った。

「それよりも、具合がよろしくないのでは？」

「大丈夫。あと、いい加減にお嬢様って呼ぶの止めてほしいんだけど。今は下男と妓女見習いなのよ？」

「ええと、まあ、それは追々ということで。本当に具合が悪いのでしたら、休んでくださいね」

「うん」

守真が去ったあとで、祥琳は気だるげに溜息をついた。体の不調は、時を経るごとに強まってきている。

――疫に罹ったのでは、と不安でしかたない。

きっと色々なことがあって疲れているのだと、自分に言い聞かせた。

「春蘭……私、頑張るよ」

春蘭はくびにした、と蟬英が告げたのは昨日のことだ。蒼羽に手を引かれながら、項垂れるようにして歩いていた姿も目撃されている。

唯一の友人がいなくなってしまったことは悲しかったが、よく考えれば、春蘭にとってはその方がいいのだ。

「……でも、好きな人のことを聞きそびれちゃったな」

珍しく慌てる春蘭が見られるかと思ったのに、と祥琳は肩を落とした。そして、俥へと荷物を運ぶべく作業へと戻る。

しかし、歩みを進める度に、腹部の痛みは無視できないものとなっていた。迷惑にならないようにと、通路の隅で蹲る。近くの房室からは、病人の微かな呻き声が聞こえてきた。

祥琳の瞳に涙が浮かぶ。

病に感染しているとわかれば、祥琳は避難させてもらえないかもしれない。脳裏を〝死〟の文字が過る。

怖かった。

死にたくなかった。すでに故人となってしまった父と母の顔が脳裏を過る。

「お嬢様！」

守真の慌てたような声に、のろのろと顔を上げる。

強い力で抱き起こされた拍子に涙が頬を伝った。

「しゅ、しん」

「待っていてください。今、医師のところに――」

そう言われて、抱えあげられた時だった。

湿り気を帯びた風が、祥琳の体を吹き抜けるようにして通り過ぎていった。

「え？」

「お嬢様？」

腹痛が治ったわけではなかった。しかし、先ほどと違い、なぜか体が軽い。守真に抱えられながらぽかんとしていると、裏口の方から慌てたように下働きの男が走ってきた。

「龍だ！　真っ白な龍が空を飛んでるぞ！」

――ああ、また、ほら。

祥琳の体を湿り気を帯びた、心地よい風が通り抜けた。

土間に掘られた文様を前にし、呪文を唱え続けていた筝言は、弾かれたように顔を上げた。
同じように作業に没頭していた者たちは、そのほとんどがまだ気付かないようだ。唯一、筝言と同じようにそれに反応したのは、この中でも一番の古株である男だった。
「筝言様……」
「うん。気付いてるよ。誰かなぁ、あの封印を解いちゃったのは」
「やはり、そうでしたか」
けっして少なくない犠牲を払い、この作業の最大の障害となる守り神を封じたのに、何者かがそれを壊してしまったようだ。
「あの槍、家宝だったんだけどな」
呪が解かれたということは、源となっていた槍は役目を果たさなくなってしまったのだろう。反対する者もいる中、わざわざ家宝である呪具を用いたというのに。
「いかがいたしましょう？」
「……問題ない。欲を言えば、もうちょっともってほしかったけどね。まあ、段階はすでに最後まで進んでるんだ。いまさらどう足掻いても手遅れだよ」
「では、なんの措置も取られないということでよろしいですね？」
「うん。今は、こっちに集中しようか」
「了承しました」
しかし、誰が封印を壊したのだろうか。一介の人間にできることではない。筝言の脳裏を様々な可能性が過った。しかし、これといって引っ掛かるものはない。
「誰だろ。まだ、表舞台にあがってきてない奴がいるのかなぁ」
そいつは自分を楽しませてくれるだろうか。全身に重い疲労を感じながら、筝言は口の端に笑みを上らせたのだった。



あとから洞窟に集結した子慮たちと龍天山で一夜を明かした春蘭は、翌日、華安へと戻ってきた。

春蘭が意識を失ったあと、謎の襲撃者たちはいつの間にか全員が姿を消していたらしい。守り神に戻った春蘭に興奮した白桃は、うっかり捕らえていた少女を逃がしてしまったようだ。

彼らはいったい何者なのかという疑問は、覚程の「全員、赤い布を腕に巻いていた」という一言で明確になった。

猩猩緋。義賊と呼ばれる彼らが、どうして華安の守り神が封じられた社にいたのか。猩猩緋は民の味方だという。なのに、なぜ——。なによりも、春蘭が知る猩猩緋の一員である洪釆は、このことを知っているのだろうか。確かめる術がない以上、どれだけ悩んでも無意味ではあるのだが。

春蘭との約束を守った北庸が戻ってきたのは、夕暮れも間近のことだった。乱れ切っていた地脈を正常に戻し、疲は念入りに祓ってきたのだという。戻ってきた北庸に、春蘭はいったい何者のしわざなのかと訊ねた。

『よくはわからぬ。ただ隙をつかれ、あのざまだ。ぬしが助けてくれなかったら、あのまま弱って消えていただろう』と、北庸は深く頭を垂れた。

わからないことだらけであるが、華安の裏側でなにかが起こっていることだけは確かだった。

春蘭が体調を崩して二日が経つ。

本来ならば、帰って来たその日に妓楼へと行きた

かったのだが、啓璋と友寧が断固として許さなかった。

その間に、皇帝の疫にかんする勅命が取り消された。代わりに命じられたのは、遺体の回収である。悪い病に罹って死んだ場合、そこからまた新たな疫が発生することを防ぐためだ。

特に貧民窟での被害は酷く、かなりの数の死者が確認されたとのことであった。

「仲望、早くするのだ！」

「はいはい」

「龍天山での働きっぷりはどうした」

「いつもああだとは限らないよ」

また、元の怠け者に戻ってしまったらしい仲望を、春蘭は必死になって急かす。

向かう先は黄海楼だ。はじめは俥に揺られていたのだが、未だ病人がいる花街の中に入ることを御者が拒んだため、大門からは徒歩で向かうこととなった。

ちなみに、仲望が同行している理由は、啓璋と友寧が一人では絶対に行かせられないと言い張ったからだ。龍乎が治安回復に奮闘しているが、以前のように戻るまでにはまだ時間が必要であった。

華観大路の両脇には、華やかな妓楼が軒を連ねているが、客と思しき者の姿は見えない。だが、病に倒れた妓女たちが回復すれば、ここはすぐに活気を取り戻すだろう。

黄海楼へと辿り着いた春蘭は、いつものように裏口から中へと入る。さすがに仲望は連れて入れないと、門のところで待っていてもらうことにした。

「誰かおらぬのか？」

春蘭の声が、無人の通路に響き渡る。

疫が終息したとはいえ、病に罹った者がすぐに回復するというわけではない。看病に追われているものだと思っていたのだが、これはいったいどうしたことだろうか。

「ふむ」

首を傾げ、春蘭は歩き出した。そういえば、裏門のところには誰の姿もなかった。

「とりあえず、蟬英の許へ行くか」

無断で入り込んだことを知られれば、よい顔をされないかもしれない。だが、せめて妓楼の現状だけでも知っておきたかった。

北側の楼閣へと向かった春蘭は、階段のところで泣き崩れている下女たちの姿を見つけた。

「どうしたのだ？」

春蘭の姿に驚いた様子の下女たちは、階の上を指し示す。嫌な予感に駆られ、春蘭は足早に楼主の房室へと向かう。

階が上がるにつれ、人々の啜り泣きが大きくなる。誰もが肩を寄せ合い、慰め合うように涙を零していた。

あの蘇啓も、声を殺すようにして泣いていた。

表情の乏しい蒼羽も、歯を食い縛るようにして涙を零していた。

一瞬だけであったが、守真に抱かれながら泣きじゃくる祥琳の姿もあったように思う。

「なにが……？」

蟬英の房室の前には、人だかりができていた。しかし、春蘭の姿を見ると誰もが先を譲ってくれる。背中を押されるようにして室内に入った春蘭が見たものは、布団に横たわる蟬英の姿だった。

その両脇には、泣き叫ぶ妓女たちの姿がある。

「蟬英？」

瞼を閉じる蟬英は、まるで眠っているように静かだった。顔は青白く、最後に顔を合わせた時より、一回りも二回りも痩せてしまったように思う。

蟬英の胸に縋りつくようにして泣いているのは、紅燕だった。どうやら、起き上がれるまで回復したらしい。あれほど見た目に拘っていた紅燕が、子供のように声をあげて慟哭している。

「春蘭……」

肩に置かれた手に顔を上げれば、泣き腫らした目

の月儀が立っていた。

「馬鹿な人だよ。自分も病に罹っていたのに。周りが気付いた時には、もう起き上がれないくらい弱っていてね。それでも、病床から指示を出すくらい元気だったんだよ？　昨日だってあんなに……誰も、朝になって冷たくなってるなんて思わないじゃないか」

月儀の頬を、幾筋もの涙が伝う。

春蘭は未だに目の前の光景が信じられずに、茫然としていた。

「……蟬英姐さんがあんたに感謝していたよ。あんたの占がなかったら、医者の手配も、薬の備蓄もできなかっただろうって」

「そんな、話、聞いてない。蟬英は、信じない、と、言って、いた……」

「信じてなかったら、高価な薬を大量に買いつけたりしないよ」

あんたに言わなかっただけだ、と月儀は言った。

否定されたわけではなかったのだ。

口に出さなかっただけで、蟬英は春蘭を信じてくれていたのだ。

「蟬英……」

春蘭の視界が滲む。

なぜか、蟬英の顔をよく見ることができない。もっと、ちゃんと見ておかなければいけないのに。

不意に、温かな腕が春蘭の体に回された。

「春蘭」

耳に心地よい声。仲望の腕が、春蘭の視界を覆う。

それに、堪え切れなかった嗚咽がのどから漏れた。

「なぜっ、なぜだ！」

不安はあった。でも、きっと大丈夫だと思っていた。災厄は華安の守り神によって、食い止められたのだと。

だから、誰も死なない。

大丈夫。

大丈夫。

大丈夫だと、そう信じていた。
信じていたのに。
「どうしてっ！」
間に合わなかった。
救えなかった。
死なせてしまった。
それが、こんなにも苦しい。こんなにも切ない。
仲望に抱き締められながら、春蘭は後悔の念に苛まれるように嗚咽を漏らし続けたのだった。

泣き疲れたのか、春蘭は仲望の腕の中で静かな寝息をたてていた。
今から帰っては終刻の鐘には間に合わないでしょう、と用意された妓楼の一室。仲望のことを蟬英からどう聞いていたかは不明だが、通されたのは品のよい調度品が置かれた房室だった。
妓女が客を取る部屋ではなく、別の目的で妓楼を使用する者に宛がわれる場所なのだろう。格式の高い妓楼は、内密の会合や、官吏らの密談場としても重宝されていると聞く。
仲望は寝台に春蘭を横たえようとして、その小さな手が袍の袖を摑んでいることに気付いた。外そうとするが、思いの外しっかりと握り締められたそれはどうすることもできなかった。
「やれやれ……」
眠っている春蘭を起こすことはできない。先ほどまで、見ているこちらが辛くなるほど悲痛な涙を零していた少女は、目覚めればまた故人を思って泣き出すだろう。せめて今だけはゆっくりと休ませてやりたかった。
結局、少しでも寝心地のよいようにと、仲望は寝台に腰かけ、春蘭を横抱きにしたままの格好に落ち着いた。毛布に包むようにすれば、暖かさが心地よかったのか、春蘭の口元が微かに綻んだ。しかし、泣き続けたせいで赤く腫れた目元を見て、仲望は眉

を寄せる。

すでに陽は落ち、燭台に点された灯りが室内を照らしている。静まり返る中で、仲望は腕の中の少女を眺めていた。

思い出されるのは、龍天山の社で、守り神へと戻った春蘭の姿だ。

陳腐な表現だが、〝神々しい〟という以外の言葉は浮かばなかった。

それは淡い光のようでいて、どんなに深い闇をも照らし出してしまう強さを秘めているような印象を受けた。

春蘭が自身を守り神であると主張していることについて、仲望としては本人が言うのだからそうなのだろう、という程度の認識しかなかった。守り神であるからと態度を変えるつもりもなく、あくまでも普通に接してきたつもりだ。

だが、あれを見せられてしまっては、その認識も変わらざるをえない。

光の中には、少女がいた。

一切の感情を削ぎ落としたような――まさに〝無表情〟というのが的確な容貌に、思わず背筋が粟だったことを記憶している。

同じように発光する、裾の長い礼装に身を包んだ少女は、まるで呼吸するかのように水を操り、白龍を縛りつけていた結界のようなものを吹き飛ばそうとした。

その時だ。感情の見えない容貌に苦痛が浮かんだ。目には見えぬなにかに抗おうと、全身を痙攣させながらも、春蘭は力を行使していた。

『――戻るんだ、春蘭！』

気付いた時には、そう叫んでいた。徐々に抵抗を弱めていく少女に、焦りを感じたことを覚えている。それがきっかけとなったのかは定かではないが、次の瞬間には、春蘭は元の姿へと戻り、地に倒れていた。

意識を取り戻したあと、またすぐに気絶してしま

った少女を抱えながら、仲望は痛感せざるをえなかった。

——春蘭は守り神である。

わかっていたつもりだったが、仲望は本当の意味でそれを理解していなかったのだ。だが、認識を新たにしたところで疑問が湧いた。

兄はなぜ春蘭から真名を奪ったのだろうか、と。

どれだけ考えても答えはでない。あの兄のことだ、きっと誰も予想できないことを考えているはずだ。

「あまり、猶予はないみたいだけどね……」

わずかな期間ではあるが、春蘭は確実に鄭家に自分の居場所を築きつつある。

それを思うと、嬉しいような悲しいような複雑な感情に駆られた。それは春蘭がいずれ自分の前から去っていってしまう存在であると、わかってしまったからだろう。

仲望は春蘭の手触りのよい髪を指で梳いた。

兄、玄楽は、真名を奪うことによって、春蘭を隷属しようとした。それがどれだけ無謀なことかは、春蘭に出会った当初に説明を受けている。

あの賢かった兄が、それを知らぬはずもない。ならば、なぜ自身の命を危険にさらすような行動をしたのか。自分ならば大丈夫だという確信でもあったのだろうか。

兄の目的がわからない。そもそも、四年前の戦で生きていたのならば、どうして仲望に報せの一つも送らなかったのか。

生きていたのであれば、仲望が禁軍を辞すほどの怪我を負ったことくらい知っているだろう。

負傷した弟を見捨てられるような人ではない。だからこそ、亡骸が見つからなくても兄は死んだのだと、仲望は思ったのだ。

「目的、か」

守り神から真名を奪うという禁忌に手を染めるのだ、よほどの理由があったのだろう。だが、それがなぜなのかまでは、仲望も推測できずにいた。

だが、一つだけ明確なことがある。
どのような理由があろうとも、守り神から真名を奪うことは許されるべきものではない。仲望は目の前に玄楽が現れたとしても、春蘭の味方をすることに躊躇いはなかった。
「春蘭……」
たとえ、そう遠からず別れが来るのだとしても。重荷を背負い続ける少女の助けになりたい。その気持ちだけは紛れもない真実だった。

華安に次ぐ都として知られる、東都。華安とは馬を使えば十日という距離にあり、二代前の王朝では王都として栄えていた。
その入り口である、龍頭門にできた列に、一際目立つ男が並んでいた。簡素な旅装姿で、頭には布を巻いている。なによりも屈強な肉体と、精悍な容貌が、群衆の中にあって埋没することを拒んでいるようであった。
門のところには、出入りを厳しく確認する兵士たちの姿もあった。猩猩緋の活躍のおかげか、日に日に取り締まりは厳しくなっているようだ。
特に武器や防具を扱う商人たちは、他の商売に鞍替えしたくなるほど執拗に商品の卸し先を確認されるようだ。
男はなんの問題もなく、門を潜ることが許された。その際、門番の一人が一瞬だけ目礼する。簡単な話だ。取り締まりが厳しくなるのなら、内に息のかかった者を作っておけばいい。
口の端に笑みを浮かべ、男は馬に跨った。
「――しっかし、まさか華安にいるとはねぇ」
白い虎に跨った少女の情報は、ある一点で途切れていた。東に向かえば東都が。南に向かえば華安があった。
東を選んだのは、故郷に戻ることを無意識に拒んでいたからかもしれない。だが、華安にいるとなれ

ば、そうも言っていられなかった。

「すぐに見つけ出してやるぜ。なぁ、守り神様？」

三日前のことだ。

突如、男が追っていた少女は失態を演じた。なにがあったのかは不明だが、守り神に戻り男に位置を報せてしまったのだ。

もしかすれば隷属させられるかもしれないと、奪った真名を口にしてみたが、抵抗の方が強かった。自身にかかる負荷の強さにも辟易したが、苦痛に苛まれながらも抗う相手に感嘆した。

「次は逃がさねぇぜ」

口の端を歪め、男は馬の横腹を蹴った。

奪い損ねた相手を、今度こそ我がものとするために――。

了

あとがき

物語もだいぶ佳境に差し掛かってまいりました。にもかかわらず、仲望がまだヒーローらしき力を発揮しておりません。仲望を活躍させてあげたいのですが、今回は他の者たちがしゃしゃり出てきてしまいました。活躍したのに、色々と美味しい場面を持っていかれてしまった感じです。

しかも、三巻は様々な場所で恋の嵐が吹き荒れていますが、春蘭と仲望の間にはちっとも吹いてくれないのはなぜなのでしょうか。嫁認定されているはずなのに……差は確実に縮まってきているはずなのに。別のところでは一瞬で恋の花が咲いているにもかかわらず、この二人の関係は遅々として進みません。楊秀ではありませんが、仲望にはっぱをかけてやりたくなります。

二人の仲はあまり進展しませんでしたが、春蘭の人としての感情が成長し、激しく揺れ動いている様子に少しでも共感していただければ幸いです。

今回もご迷惑をかけてしまった担当さん。今年こそは、余裕をもって締め切りをクリアしていきたいと思います。校正者さんもありがとうございます。イラストレーターの由貴さんも、

素敵なイラストをありがとうございます。毎回、どんなイラストができあがってくるか楽しみです。

そして、本書の完成に関わって下さった方々と、本書を手にとって下さった読者の皆様にも、心からのお礼と感謝を。

次回、春蘭と仲望の仲は進展するのか。
今度こそ、本当に仲望のかっこよさをアピールする機会はくるのか。
まさかの大穴、皇帝沸儀（ふつぎ）が春蘭とご対面？
ご期待ください。

九条　菜月

ご感想・ご意見をお寄せください。
イラストの投稿も受け付けております。
なお、投稿作品をお送りいただく際には、編集部
(tel:03-3563-3692、e-mail:mail@c-novels.com)
まで、事前に必ずご連絡ください。

C・NOVELS fantasia

虚空からの声
——華国神記

2012年2月25日　初版発行

著　者　九条菜月

発行者　小林敬和

発行所　中央公論新社
〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
電話　販売 03-3563-1431　編集 03-3563-3692
URL http://www.chuko.co.jp/

ＤＴＰ　ハンズ・ミケ

印　刷　三晃印刷（本文）
大熊整美堂（カバー・表紙）

製　本　小泉製本

©2012 Natsuki KUJO

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN978-4-12-501189-9 C0293

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ
個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

第9回 C★NOVELS大賞 募集中！

あなたの作品がC★NOVELSを変える！

みずみずしいキャラクター、
はじけるストーリー、
夢中になれる小説をお待ちしています。

賞

大賞作品には賞金100万円

刊行時には別途当社規定印税をお支払いいたします。

出版

大賞及び優秀作品は当社から出版されます。

第1回	大賞	藤原瑞記	光降る精霊の森
	特別賞	内田響子	聖者の異端書
第2回	大賞	多崎 礼	煌夜祭（こうやさい）
	特別賞	九条菜月	ヴェアヴォルフ　オルデンベルク探偵事務所録
第3回	特別賞	海原育人	ドラゴンキラーあります
	特別賞	篠月美弥	契火（けいか）の末裔（まつえい）
第4回	大賞	夏目 翠	翡翠の封印
	特別賞	木下 祥	マルゴの調停人
	特別賞	天堂里砂	紺碧のサリフィーラ
第5回	大賞	葦原 青	遙かなる虹の大地　架橋技師伝
	特別賞	涼原みなと	赤の円環（トーラス）
第6回	大賞	黒川裕子	四界物語1　金翅のファティオータ
	特別賞	片倉 一	風の島の竜使い
第7回	特別賞	あやめゆう	RINGADAWN〈リンガドン〉　妖精姫と灰色狼
	特別賞	尾白未果	災獣たちの楽土1　雷獅子の守り

応募規定

❶プリントアウトした原稿、❷表紙＋あらすじ、❸エントリーシート、❹テキストデータを同封し、お送りください。

❶プリントアウトした原稿
「原稿」は必ずワープロ原稿で、40字×40行を1枚とし、90枚以上120枚まで。

※プリントアウトには通しナンバーを付け、縦書き、A4普通紙に印字のこと。感熱紙での印字、手書きの原稿はお断りいたします。

❷表紙＋あらすじ（各1枚）
表紙には「作品タイトル」と「ペンネーム」を記し、あらすじは800字以内でご記入ください。

❸エントリーシート
C★NOVELSドットコム[http://www.c-novels.com/]内の「C★NOVELS大賞」ページよりダウンロードし、必要事項を記入のこと。

※❶❷❸は、右肩をダブルクリップで綴じてください。

❹テキストデータ
メディアは、FDまたはCD-ROM。ラベルにペンネーム・本名・作品タイトルを明記すること。必ず「テキスト形式」で、以下のデータを揃えてください。
ⓐ原稿、あらすじ等、❶❷でプリントアウトしたものすべて
ⓑエントリーシートに記入した要素

応募資格

性別、年齢、プロ・アマを問いません。

選考及び発表

C★NOVELSファンタジア編集部で選考を行ない、大賞及び優秀作品を決定。2013年2月中旬に、C★NOVELS公式サイト、メールマガジン、折り込みチラシ等で発表する予定です（一次選考通過者には短い選評をお送りします）。

注意事項

- 複数作品での応募可。ただし、1作品ずつ別送のこと。
- 応募作品は返却しません。選考に関する問い合わせには応じられません。
- 同じ作品の他の小説賞への二重応募は認めません。
- 未発表作品に限ります。ただし、営利を目的とせず運営される個人のウェブサイトやメールマガジン、同人誌等での作品掲載は、未発表とみなし、応募を受け付けます（掲載したサイト名、同人誌名等を明記のこと）。
- 入選作の出版権、映像化権、電子出版権、および二次使用権など、発生する全ての権利は中央公論新社に帰属します。
- ご提供いただいた個人情報は、賞選考に関わる業務以外には使用いたしません。

締切

2012年9月30日（当日消印有効）

あて先

〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
中央公論新社『第9回C★NOVELS大賞』係

（2011年9月改訂）

九条菜月の本

華国神記

1 奪われた真名

下級官吏・鄭仲望の前に現れた少女・春蘭。真名を奪われた神だと主張する彼女は居候を決め込んだ。そして都を跋扈する魔物にまつわる大事件に、二人は巻き込まれていくのだった！

2 妖霧に惑いし者

元神様・春蘭は近づく雨期に焦りつつも、鄭家に居候中。真名盗人の情報収集の最中、山では妖がらみの事件が頻発していた。情報を握る仲望は捜索隊の一員として都を離れてしまい……。



イラスト／由貴海里

9784125011899

ISBN978-4-12-501189-9

C0293 ¥900E

1920293009001

定価 本体900円＋税



実兄とはいえ、真名を奪った犯人を庇う鄭仲望に複雑な思いを抱える春蘭。鄭家にいるのが気詰まりで、仕事と称して妓楼に入り浸る。同じころ貧民街で発生した流行病が猛威をふるい、急速に花街にも広まろうとしていた。このまま放置しては甚大な被害をもたらす。守り神が健在であれば起こるべくもない事態に、春蘭は仲望らと共に神域に向かう。その陰で国を揺るがす奸計が進行しているとも知らずに……。